岩波文庫
32-064-2

公女マーラヴィカーとアグニミトラ王

他一篇

カーリダーサ作
大地原 豊訳

岩波書店

Kālidāsa

MĀLAVIKĀGNIMITRAM
VIKRAMORVAŚĪYAM

凡　例

一、原文中の舞台指示要素は、訳文にて小字で表出した。

一、欄外注は用いず、読者の理解に必要な最小限の補足要素を、〔　〕内の小字で訳文中に繰りこんだ。なお時として、両義性を宿す原文字句に対し、裏意の訳出に同様の表記を流用している。

一、原典の韻文部分は、訳文の組みを散文部分よりも一字下げ、末尾に詩節番号を添える。訳文は、原文の韻律は無視して、五音と七音との邦語調を守るに努め、このため随処に一字アケの便法を施した。

一、原文措辞への逐語的忠実に捉われたため、しばしば訳文の晦渋を犯したかと恐れる。神格その他に関し頻出する異名の字義を示そうとした箇所で、特にこの感が強い。

一、原文の対話におけるサンスクリットとプラークリット(シャウラセーニー方言——女性、道化、その他の低次人物が使用)との使い分けは、もとより訳文に反映すべくもなかった。

一、動植物名については、同定の労は一切回避して、まったく便宜的な訳語もしくは音写に甘んじた。

『武勲《ヴィクラマ》(王)に契られし天女ウルヴァシー』の第四幕に関しては、「解題」末尾(二二八—二二九頁)を参照。——北印本のみが見せるテクスト範囲は、〽で画する歌唱詩節以外をすべて小字で組み、舞台指示要素を〈 〉内に収めた。ただし、この〈 〉内の訳語は、訳者の場当たり的な恣意に属することを諒とされたい。

底本とした原典刊本は、次記のものである。

——Ed. F. Bollensen, *Malavikagnimitra*, Leipzig 1879(repr. in : J. Varenne, *Textes sanskrits*, Aix-en-Provence 1966).

——Ed. H. D. Velankar, *The Vikramorvaśīya of Kalidasa*, New Delhi 1961.

目次

故辻直四郎先生の霊前に捧ぐ

公女マーラヴィカーとアグニミトラ王

登場人物　（男女別・登場順）

座頭
小頭
ガナダーサ　正妃の贔屓する舞劇師範、マーラヴィカーが師事。
王アグニミトラ　主人公——第二代シュンガ国王。
王の供奉衆
宰相パールハタカ
道化ガウタマ　王の腹心。
執事マウドガリャ　後宮監督をも司る老人。
ハラダッタ　王の贔屓する舞劇師範。
吟遊詩人　甲、乙二名。
サーラサ　正妃側近の佝僂男。
腰元甲カウムディカー　正妃の侍女。
腰元乙バクラーヴァリカー　同右、マーラヴィカーの親友。
正妃ダーリニー

遊行尼カウシキー　正妃の顧問、ただし実は王に荷担——マーダヴァセーナ公子の家老の妹なる身元を秘す。
マーラヴィカー　女主人公——正妃の侍女、マーダヴァセーナ公子の妹なる身元を秘す。
サマーヒティカー　遊行尼の下女。
庭番女マドゥカリカー
女御イラーヴァティー　後宮随一の寵姫。
ニプニカー　女御側近の侍女。
門番女ジャヤセーナー
正妃の供奉衆
同腰元ナーガリカー
女甲ジョーツニカー　マーダヴァセーナ公子より貢進の少女。
女乙ラマニカー　同右。

第一幕

唯一至尊の主権に立ちて　ひれ伏すものへの果報や多大、しかも自身は一枚きりの　象皮を身に帯び給うのみ——　愛しき女神と合体すれど、感官の対象に無関心なる　行者らの域をも遥かに凌(しの)ぎ——　八種の姿態もて全世界担いありとて驕(おご)るなき——　かの主宰神(イーシャ)〔シヴァ〕の御身(おんみ)らに　正道明識あらしむべく　闇質(タマス)の作動を除去されよかし。　(一)

祝祷終って座頭登場。

座頭　(舞台裏の方を見やって)頭(かしら)よ、ちょっと来てくれい。

小頭　(登場)親方、御用でござるか。

座頭　御参集の客筋が仰せには——「カーリダーサ編作の戯曲『公女マーラヴィカーとアグニミトラ王』なるものを、只今の早春の祭りを機に上演するとせよ」——とのこと。されば囃(はや)子(し)を始めてくれい。

小頭　ちと、それはいけませんて。名声かくれもないバーサ、サウミッラ、カヴィプトラといった方々の編曲をさしおいて、現存詩人カーリダーサなどを尊しとすることがあるものですかな。

座頭　やれまあ無分別な物言いかな。見られい——

古人の詩とて皆が皆　名詩というものにはあらず、近作の詩なればとて　取柄なしとは限らぬを。識者はとくと吟味の上　いずれか一を御愛賞、愚者は他人の言うこと信じ　判断これに流さるるなり。　(二)

小頭　お歴々の御一存に任せますじゃ。

座頭　しからば、そなた急いで下されい。

先刻頭(こうべ)に推し戴いた　参集各位の御命をば　拙者は果したく存ずるぞ——　正妃ダーリニーの御命に対し、あれよ、宮仕えの上手たち　伴回り衆の致すがごとく。　(三)

序幕終る。

腰元甲　(登場)正妃ダーリニー様の仰せには、舞踊師範ガナダーサ先生に伺(うかが)って参れとのこと——「最近お稽古をつけていただいておる由のチャリカ舞とやらでは、マーラヴィカーはどんな出来でしょうか」——と。では、ともあれ音楽堂へ参るとしよう。

装身具を手にして、腰元乙登場。

腰元甲　(腰元乙を認めて)あら、カウムディカーさん、何くわぬ風はまたどうして——すぐそばを通り過ぎながら、私の方には目もくれぬなんて。

腰元乙　おやまあ、バクラーヴァリカーさんだわ。あなた、そら、これ正妃様のよ——職人さんの所から受け取ってきたの——竜蛇の印を刻んだ素敵な指輪。私たら、これに見とれていたところ、あなたのお咎めに会う羽目となっちゃった。

バクラーヴァリカー　(ちらと見て)むべなるかなだわ、あなたの目が離れぬのも。この指輪といえば、光線が恣さながらに吹き出し、捧持するあなたのお手先は、ために花咲くといった風情ですもの。

カウムディカー　あら、ところであなたはどちらへお出向き。

バクラーヴァリカー　正妃様のお言葉とて、舞踊師範ガナダーサ先生に伺いに参りますの、——「マーラヴィカーは、お稽古のこなし具合どんなでしょうか」——と。

カウムディカー　ねえ、あなた、あれほどお稽古三昧で、大奥にはいないはずのあの子だのに、どうしてまた殿様のお目にとまったのかしら。

バクラーヴァリカー　それがねえ、あの子が正妃のお側にいるのを、絵の中で見かけられたのよ。

カウムディカー　どんな風にしてなの。

バクラーヴァリカー　聞いてちょうだい。絵画殿へお成りの正妃様が、彩色の跡も瑞々しい画伯

先生の新作を御覧になりますうちに、殿様が来合わされたのですわ。

カウムディカー　で、それから。

バクラーヴァリカー　御会釈の儀礼あってから、殿様は正妃様と半座を頒って御着席、そこで正妃のお供回りの中ほどに描かれた童女を認めて、正妃様にお訊ねになります。

カウムディカー　何とおっしゃって。

バクラーヴァリカー　——「おや、ここに、絶えて見かけぬ童女が正妃に近う描かれてあるが、名は何と申すかな」——と。

カウムディカー　何さま気懸りになる的は、秀でた器量ですものね。で、それから。

バクラーヴァリカー　ところが、せっかくのお言葉にお取合いがなかったので、殿様は不審に思し召し、重ねて正妃様に問いすがろうとなさいました。すると、ヴァスラクシュミー姫様が御発言——「義兄上様、あれはマーラヴィカーですわよ」——と。

カウムディカー　(微笑して)ありそうなことだわ、年端の行かぬうちには。その先を言ってちょうだい。

バクラーヴァリカー　他でもないわよ——今じゃマーラヴィカーさんは、念の上にも念を入れて、殿様のお目から隔ててあるわけ。

カウムディカー　じゃあれ、あなた、御自分のお役目をお大事に。私も、この指輪を、正妃様に

お届けするとしましょう。（退場）

バクラーヴァリカー　（舞台を回り、見やって）おや舞踊師範先生が、音楽堂から出ておいでだわ。さあ、先生にお目通りしよう。（舞台を回る）

ガナダーサ　（登場）自家の学を独り高しとする風は、何人にも見られるところではあるが、しかし身共の舞劇に対する限り、我が仏尊しの蒙はさらさらにないぞ。何故とならば——

この道こそは神々の　眼に捧ぐる祭儀にして　御嘉賞ひとしおのものなりと、古来聖賢は宣えり。　この儀をばルドラ〔シヴァ〕の大神は　〔女神〕ウマーと合したる玉体が上に〔現出〕分かちて〔荒・和の〕二様とはなせり。　三元質に発源の　なべて世上の営みは　能くこの道に上りてこそ　情趣多岐とは見ゆるなれ。　げにも舞劇の道こそは、好尚区々なる世人を通じ、多彩にしてかつ独一の　心ゆかしき悦楽ぞ。　（四）

バクラーヴァリカー　（近寄って）先生、御挨拶申し上げます。

ガナダーサ　娘御や、末長く生きられよ。

バクラーヴァリカー　先生、正妃様がお訊ねでございます——「御身の門弟マーラヴィカーは、お稽古を身につけるのに四苦八苦ではありませぬか」——と。

ガナダーサ　娘御や、正妃に申し上げて下されい——「こよなく巧者で、また利発な子でござる」——と。つまりはじゃ——

舞台上演の分野に触れて　思い入れある所作をば　それがし彼女に教えます都度、すぐと出藍の演技見せ　少女の方がそれがしに　教えを垂るるの体にてござる。　（五）

バクラーヴァリカー　（独白）察するところあの子は、イラーヴァティー女御様をも凌ぐようだわ。（声に出して）そちら様のお弟子として、あの子はもう本望ですわ——お師匠がたがそこまでに御満足でいらっしゃれば。

ガナダーサ　娘御や、あのような英才はめったと見当らぬものゆえ、それがしお訊ねに及ぶのじゃが——あの大器は、どちらから正妃のお手許に届いたのかな。

バクラーヴァリカー　正妃様にはヴィーラセーナと申す腹違いの弟君がおありでして、殿様はこの方を、中間基地司令官として、ナルマダー河畔に配置しておられます。その方が、この童女は技芸職に向いていると見こんで、姉上に献上品として送ってよこされたのですわ。

ガナダーサ　（独白）器量・品行から推して、あの子は歴とした家柄の出と察するぞ。（声に出して）娘御や、それがしとても名の高うなること必定じゃ。と申すは——

教授者の備えし技能、非凡の器に寄託されなば、新たなる質を取得するなり——雲の孕める雨水が　海の巻貝に託置さるるや　真珠の玉に転化するごと。　（六）

バクラーヴァリカー　先生、そちら様のお弟子は、今どこにおりますかしら。

ガナダーサ　つい今しがたじゃ、五体の術その他の所作演出を稽古したところで、一休みするよう身共が申したれば、長池を見晴らす窓辺にあって、風に涼をとっておるわ。

バクラーヴァリカー　では先生、お暇を下さいませ。先ずは先生の御満悦ぶりを伝え、あの子を元気づけて参りますから。

ガナダーサ　朋輩に会うてきなされ。それがしも、ちと今のうちに、自宅まで行ってくるとしよう。

　両者退場、間幕終る。

　王登場、供奉衆は一隅に侍立、宰相は書状を手にして侍座。

王　（書状を黙読しある宰相の方を見やり）バールハタカよ、ヴィダルバ侯はいかが申しおるかな。

宰相　陛下、我と我が身の破滅を、と申しまする。

王　いざや文面を知りたく思うぞ。

宰相　さて、彼の返書にはこうございます——「貴台の当方への御教示には、『御身が父系の又従弟マーダヴァセーナ公子、当家との縁組に合意して余が許に伺候されんとする途上、そこもと側の辺境都督が襲撃し捕縛するところとはなった。そこもとには、当方なる存在に顧慮ありて、妻女・実妹ともども彼の釈放かたを取り計らわれたい』とあるも、さりとては貴

台、およそ王侯が門地同等の国主に対して執るべき常軌を、ご存じなき次第なり。さらば当面の件に関し、貴台には中立不介入を旨とされたい。他方、同公子の実妹はというに、密林中の不測事態に行方不明となりたるも、彼女の捜索には不肖尽力致すべく存ずる。さもあらばあれ貴台には、当方をして必ずマーダヴァセーナ釈放に到らしむべき、方途のおありなるはず。と申す趣旨はじゃ、お聞きあれい——

貴台にしてもし、余が義兄　大臣の位にまします方を、　抑留の憂目より解き給わらば、
——さらば余とても即刻に　マーダヴァセーナを獄舎より　釈放するとは致そうぞ。」（七）

王　（怒って）何と、身のほど知らずめが、交換条件を持ち出して余と取引きするというのか。バールハタカよ、ヴィダルバ侯は余に不快をなす不倶戴天の仇敵ぞ。さらば、敵性国の範疇に属する彼奴めを、かねての想定に従い覆滅するよう、ヴィーラセーナを長とする征討軍に下命せよ。

宰相　陛下の御命のごとく。

王　いやさ、貴官の御所見はいかがか。

宰相　陛下の仰せは、すなわち論書にも見ゆるところにてござる。——

王位に就きて日浅き敵は　未だ衆庶に根を張らざれば、　植樹早々の弛き木のごと、　根こぎ
にするに造作なし。（八）

王　さらばじゃ、指南書をものされし聖賢の、真実に悖ることなき如上の句をば、そっくり開戦理由に掲げて軍司令官に出動をうながすとせよ。

宰相　畏まってござる。（退場）

供奉衆、職掌に応じ王の周囲に侍立。

道化　（登場）かの王様のおっしゃるにゃ――「ガウタマよ、ひとつ策を案じてくれい。たまたま絵姿を見たマーラヴィカーとやら、実物が目の当りになるように」――と。して、この儂はじゃ、ことほどさように致したと。では、ひとつ王に告げて進ぜよう。（舞台を回る）

王　（道化を認めて）やれ、またしても大臣、ただし職掌は別なのが、身共のもとに参られたぞ。

道化　（近寄って）弥栄えませ、御身には。

王　（頷きつつ）こちらに座されよ。

道化、着座。

王　策をも的をも見つけ出すのに、そちの智も眼も大変じゃったろうな。

道化　同じ問うて下さるのなら、計略の仕上がりぶりは、と言いなされ。

王　いかなる次第ぞ。

道化　（耳打ちして）これこれ、しかじか……（と知らせる）

王　でかしたぞ、おぬし、旨く計ったぞ。かくなれば今回の件、成功に漕ぎつけること至難と

はいえ、身共も希望を覚えるぞよ。

人は伴侶に恵まれてこそ　はじめて障碍山積の　事業を完遂し得るなり。具眼の人士にてもあれ　燈火なくんば暗中に　目指すものをば認め得ず。　（九）

舞台裏に声。

――もうもうたくさんじゃ、大風呂敷ひろげるのは。王の御前に出さえすれば、我らが優劣は明白となろうぞ。――

王　（聞きつけて）おぬしよ、そちの機略と申す木に、そら、もう花が綻び出たな。

道化　おっつけ実の方も御覧でしょうぜ。

執事　（登場）陛下、宰相の上奏には、「主命執行致してござる」と。他方、あれなるはハラダッタ、ガナダーサの両名――

王　所作演出の師範にして　互いに他をば凌がんと競い　御身に拝眉をと逸る様は、劇的情感なるものが　形を取りて罷り出しごと。　（一〇）

王　両名を通すとせよ。

執事　陛下の御命のごとく。（退場、両名とともに登場）御両所、こちらへ、こちらへ。

ガナダーサ　（王を見やって）おお、寄りつき難き王の御威風かな。――

馴染なき人にはあらず、愛敬なき人にもあらず、さにありながら怖じつ怯えつ　我は御方

の傍に向かう。これなる君は海原のごと、自体に変りはなきままに、刹那刹那に我が目には　新規・初見の様にぞ見ゆる。　（一）

ハラダッタ　これなるは、丈夫の姿を取り給いし、偉大なる天体にてこそはあれ。と申すは――

御門にて番士より　参内の許可ありて後、玉座至近に奉仕する　近侍ともども参進すれば、これに坐します君の御威光　正視を許さぬ趣ありて、お言葉とては無けれども　御前払いに会える心地す。　（二）

執事　陛下はあれに坐します。御両所、参進なされよ。

両師範　（近寄って）御勝利ありませ、陛下には。

王　御両所、よくぞ参られた。（供奉衆を見やり）ちと、ここな御両所に座を進ぜい。

両師範、供奉衆のすすめる座に着く。

王　門弟らへの稽古時間というに、両師範が打ち揃ってこなたへ参られるとは、いかがな次第かな。

ガナダーサ　陛下、お聞き下されませ。拙者は所作演出の学を、歴とした権威筋より、確と習得せし者にござる。また舞台上演の場数も重ね、陛下ならびに正妃の御愛顧をかたじけなく致しおりまする。

王　よく存じておる。で、どうと申すか。

ガナダーサ　さような拙者に対してでござる、彼奴ハラダッタは、それも貴紳がたの御前で、「それがしの足の埃にも及ばぬわ」などと誹謗に及びましたる次第。

ハラダッタ　陛下、中傷を働きましたるは、此奴めの方こそ先でござる――「ここな御仁と拙者とでは、水溜りと大海とほどの差があるわ」とか申しましたる由。されば、今こそ殿におかせられては、此奴と拙者とをば、理論・応用両面を通じて御審理下さいますよう。我ら両名にとり、眼識ある試問官は陛下をおいてござりませぬ。

道化　只今の申立て神妙じゃわ。

ガナダーサ　名案にござる。陛下、お耳澄ませて聴取し給わりませ。

王　ちと待たれい。さもあっては、正妃が不公平と思し召されよう。正妃が碩学カウシキー尼ともども臨席あった上にて、是非の議に及ぶが妥当なるぞ。

道化　御身の申さるる通りじゃて。

両師範　陛下の御意に召すまま。

王　マウドガリャよ、先刻来の件を伝えて、碩学カウシキー尼ともども正妃をお呼びして参れ。

執事　陛下の御命のごとく。（退場の後、遊行尼同道の正妃を伴なって登場）奥方様、こちらへ、こちらへ。

正妃ダーリニー　(遊行尼を見やって)御出家様、ハラダッタとガナダーサの角(つの)突き合いを、そなたはいかが御覧じますか。

遊行尼　御贔屓(ひいき)の側の不首尾を案じられますな。ガナダーサは、対決の相手に、ゆめ後れをとるものではございませぬ。

正妃　だとしましても、何せ国王の肩入れがありますれば、どうしたって相手方に分があるようになりましょうを。

遊行尼　あれまあ奥方様、御自分とても、正妃の称号を帯びていらっしゃるのをお忘れなく。御覧じませ――

太陽は昼の加勢のあるがゆえ　極度の光輝を弥増(いやま)しにせど、月輪もまた夜の加勢得て　多
大の威光に到るなり。（三）

道化　くわばらくわばら。参りましたぜ、正妃が、腹心の碩学カウシキー尼を先に立てて。

王　見ゆるとも、正妃はあれに――

吉祥(きっしょう)の美粧(びしょう)なせるが、修験者の衣を纏(まと)いある　カウシキー尼とともにあれば、至高我秘教
〔ウパニシャッド〕を伴なえる　三吠陀(ヴェーダ)の明知さながら　体現せしかと映ずなり。（四）

遊行尼　(近寄って)御勝利ありませ、陛下には。

王　御出家、それがし御挨拶つかまつる。

遊行尼

ともに貴き宝をば産み　難きを忍ぶ大度も似たる　正妃と大地――「万有を支う」との
その名も等しき両ダーリニー女――の　夫君・扶養者(バルトリ)にてあれよかし、そこもと百歳の久
しきにわたり。（五）

正妃　上様、上様の御盛運を。

王　正妃には、よくぞ参られた。(遊行尼を見やって)御出家、何とぞ座をお受け下されよ。

一同、着座。

王　これなるハラダッタ、ガナダーサの御両所が、互いに造詣のほどを張り合われるにつき、御出家には試問官の役に御就任いただきたい。

遊行尼　(微笑して)悪評嘖々(さくさく)はご免こうむりまする――町があるのに村へ出向いて、宝石鑑定してもらうなどとは。

王　さようなはずはござらぬ。御出家は名うての碩学カウシキー尼、しかも、それがしと正妃とは、何れも身贔屓(みびいき)のある立場なれば。

両師範　陛下、よくぞ仰せられました。中立の立場にある御出家こそ、我ら両名の長短を裁決なさるべき御方でござる。

王　さらば、弁論対決を開始するとせよ。

遊行尼　陛下、舞劇の学は実技を主と致しまする。この場で口頭弁論に及ぶとて、何の益がございましょうぞ。それとも、正妃にはいかが思し召しますか。

正妃　妾（わらわ）にお訊ねとあらば申しますが、そもそも妾には、両名の対決それ自体が嬉（うれ）しゅうありませぬ。

ガナダーサ　正妃様、学識尋常なれば敗れるやも知れぬ、などと拙者に当てつけはなさりますな。

道化　のう、見ましょうぜ、山羊の取っ組み合いを。無駄に食い扶持（ぶち）やってるのじゃ、つまらんがな。

正妃　そちは喧嘩好きだものね。

道化　てなこと言いなさんな、怒りん坊の奥さん。さかりのついた象が二匹、仲間喧嘩をしたがるのじゃ、どちらか一匹が参らんじゃ収まりようがあるもんかいな。

王　両師範とも肢体のこなし絶妙は、御出家が既に御覧のところであろうが。

遊行尼　もとよりにござります。

王　ならば今その上に、両名が提示すべき判定の資とて、一体何があろうぞ。

遊行尼　その点こそ妾の申し上げたきところにござります。――

磨きのかかった一芸が　ある人の身に好（よ）く付いており、それが他の人に伝授され　更に一段と精彩放つ――両項ともに卓抜の士こそ世に数多き教師の列の　首座に推戴さるべきはずぞ。（一六）

道化　よう心に入れたかな、お歴々、御出家の言葉をば。つづめて言うとじゃな、稽古の付け具合を見りゃ判定がつくちゅうわけよ。

ハラダッタ　身共は至極賛成にござる。

ガナダーサ　という次第にござります、正妃様。

正妃　だとしても、お弟子の方の頭が鈍うて、せっかくにつけていただいたお稽古を台無しにするとしましたら、先生が駄目という判定になってしまうではありませぬか。

王　正妃よ、さもあって然るべきぞ。適性なき者を弟子に迎えたること自体、訓育者その人の知能貧困を露わにする次第なれば。

正妃　（傍白）さて、どうしたものかしら。（声に出し、ガナダーサを見やって）人をむきにならせる上様の望み、そんなものをかなえてなるものですか。無用の試みはおよしなさいよ。

道化　奥方の仰せの通りじゃて。のう、ガナダーサよ、音曲関係の職も見つかって、弁才天女（サラスヴァティー）へのお供えの甘い菓子を喰ってる段にゃ、敗訴の憂目に会いやすい弁論対決なんぞ、おめえはまっぴらじゃろうぜ。

ガナダーサ　まこと正妃様のお言葉は、さような趣旨とはあいなりまするぞ。今こそ時宜を得

ましたる、以下の句を聞こし召しませ。――

我は地位ある身なりとて、弁論対決を怖じ恐れ　我慢一途に行くものは、世人の誹りを招くなり。　習得したる学識は　ただ生計に資するのみとの　人物を称して世間では「知識切売商人」とぞ言う。　(一七)

正妃　そなたの女弟子は、入門したばかりですのに。仕上がってもいないお稽古を披露するなんぞ、かえってはしたない仕儀ですわよ。

ガナダーサ　さればこそでござる、拙者がたっての執念は。

正妃　それじゃ、両名とも、お稽古ぶりは御出家様お独りに見ていただかれたらよい。

遊行尼　正妃様、それは妥当でありませぬ。造詣の到らざるなき知者とても、単独で裁決に当るのは、とかく過ちを招きまする。

正妃　(傍白)馬鹿尼め、妾の眼は明いているのに、眠ってるみたいに扱うのね。(恨めしげに、そっぽ向く)

王、遊行尼に対し、正妃の様を指差し示す。

遊行尼　――

月の顔なせる妃や、そなたはなどてか謂れなく　これに坐します殿方より　面を背け給うぞや。　世帯一切とりしきる　女房衆とて宿六に　怒ってふくれ面しますのは　訳あって

のみでございます。

道化　訳あったればこそじゃろうが――手前の贔屓は庇わにゃならんて。(ガナダーサを見やり)　(一八)

やれ嬉しや、正妃様は怒ったふりして救うて下さった――というところじゃろうが、あんた様は。自身の心得は秀れててもよ、人に稽古を仕込む段には、上手と限ったものじゃないわな。

ガナダーサ　正妃様、聞こし召しませ。世間の受け取り方は、あのようにござる。かくなりましたる上は――

対決の場にて示さん、己が技芸の伝授成果を。　今にして御聴許なからんか、すなわち拙者は御身より　お見限り受けし仕儀にござるぞ。　(一九)

座より立とうとする。

正妃　(独白)もう仕方がない。(声に出して)お弟子衆をどうなさるかは、先生がたの御自由ですわ。

ガナダーサ　先刻来というもの、正妃様のお言挙げに、拙者は疑心暗鬼でござった。(王を見据えて)正妃の御聴許がござりました。されば陛下、御下命給わりませ。いかような演出主題につき、稽古ぶりを御披露に及びましょうか。

王　御出家の指示されるものを。

遊行尼　正妃の御心中には、何かしら蟠りがおありの模様。さにては妾とて、なかなかに申し

かねまする。

正妃　心置きなくおっしゃいよ。どうせ国王ともあろう方は、供奉衆をどう扱おうと勝手でしょうもの。

王　「妾（わらわ）も込めて供奉衆を……」と申すがよい。

正妃　御出家様、さあ、おっしゃいよ。

遊行尼　陛下、四行詩に基づく「チャリカ舞」と申しますもの、世人の取り沙汰しきりでございます。この舞について、両名それぞれが同一主題を取り扱っての、舞台上演を見ると致しましょう。それだけで、これなる御両所の、お稽古ぶりの差が知れまするゆえ。

両師範　御出家の御命のごとく。

道化　そうと決まったからにゃ、両家元ともにぞ、演舞館に囃子を調え次第、こなた様に使いを差し向けるとせい。いやさ、太鼓の音さえすりゃあ、我らが方から出向くとなろうぜ。

ハラダッタ　かしこまった。（立ち上がる）

ガナダーサ、ダーリニー妃を見据える。

正妃　（ガナダーサを見やって）先生、勝って下さいませね。

両師範、立ち去りかける。

遊行尼　ちと、お待ちあれ。

両師範　（向き直って）御用にござるか。

遊行尼　判定の職責上から申しまするが、身体各部位のこなしの美事が判然としますように、盛装を差し控えた姿で両出演者を入場させていただきたい。

両師範　我らに御指示を俟（ま）つまでもないこと。（退場）

正妃　（王を見据えて）政務にかけても上様に、かような御手腕がおあり――というのでしたら素敵ですわ。

王　――

曲解は無用ぞ、聡き妃よ。このこと、ゆめゆめ、余の仕組みしにはあらず。修むる学の
等しき同士が　名声の先を競うは、およそ世の習いなるを。（二〇）

舞台裏に太鼓の音。一同、耳澄ます。

遊行尼　ああ、囃子が始まりました。と申すは、あれに――

孔雀は嬉しき雨雲の　雷鳴するかと取り違え　首をもたげて太鼓に唱和、低く轟く「孔
雀打ち」なる　太鼓の調べは唱和のゆえに　中音階を添え立ち昇り、人の心を酔わしむる
なり。（二一）

王　と申す調べに、正妃よ、身共は連なると致そうぞ。

正妃　（独白）まあ、上様のはしたないことよ。

一同、立ち上がる。

道化 （傍白）のう、悠々と歩くんじゃぜ。でないと、あれダーリニー妃が、文句をつけましょうからな。

王 ——

悠然と構えんとはせど、太鼓の轟きここに及びて余を急かさずばおかぬなり。余の馳する望みの馬車が成功の途を駆け下り行く響きかと耳に聞こゆれば。 （三）

全員退場、第一幕終る。

第二幕

囃子の準備が整って、王は道化を伴ない登場、着座しあり。同様にダーリニー妃と遊行尼。供奉衆は身分に応じて位置。

王 御出家、かの師範御両所のうち、いずれの側の稽古ぶりを先に見たものであろうか。

遊行尼 造詣のほどは同等と致しましても、年齢が上でありますれば、ガナダーサを先立てるのが至当ではございませぬか。

王 さらば、マウドガリャよ、この旨を御両所に伝えて後、下がってそちの役向きを怠りなく致せ。

執事 陛下の御命のごとく。（退場）

ガナダーサ （登場）陛下、シャルミシュターの作にして、中拍子詠唱の四行詩がございます。四行の主題に即してこれを演出致しますゆえ、陛下には耳澄ませて御聴取下さりませ。

王 師範よ、仰せ畏み謹聴しようぞ。さらば当人を入場させい。

ガナダーサ 陛下の御指示のごとく。（退場）

王　（傍白）おぬしよ――

楽屋なる彼女を見んと　逸り立つ余が目、いたたまれずして緞帳を　剝がしとらんとするまでに　思いつめしがごとくなり。　（二三）

道化　（傍白）のう、眼への蜜が参りましたぜ。さあ、今度こそは、抜かりのう御覧なされや。

師匠に身のこなしを試演してみせつつ、マーラヴィカー登場。

道化　（傍白）御覧ぜられよ、あんた様。ほんに、あの娘の優形ったら、画像にも引けをとらんわ。

王　（傍白）おぬしよ――

画中に見えし彼女には、美の現実と背離なきやを　余が胸は秘かに気づかえり。今にして思うらく、彼女を描きし絵師たるや　およそ注意散漫なりしと。　（二四）

ガナダーサ　娘や、固くならずに、いつものままで行くのじゃぞ。

王　（独白）おお、いずれの部位を取っても、容姿の完全無欠なることかな。と申すは――

目は切れ長に秋月と冴ゆる顔、撫肩に垂れし双の腕、胸元は締まり乳房の張りて高く、両腋の滑らかは磨けるがごと、手もて囲み測るべき細胴、豊かなる腰、趾まろやかの両の足――舞踊の師の心に願う　理想のままに出来てあり、彼女が姿態。　（二五）

マーラヴィカー　（声調を整えてから、四行の主題を歌唱）――

いとしい方にはなかなか会えぬ。あの方にはもう、ねえ心や、思いは寄せぬとしなさいな。おやまあ、あたいの左の目尻、微かにひくひくするではないの。あら、あそこに、あの方が。久方ぶりにお見かけすれど、お引き寄せするすべもない。もしや、主さま、わかってたもれ、ままならぬ身のこのあたい　そなたに渇えておりますことを。　（二六）

引続き、各行の情趣に従って所作を演ずる。

道化　（傍白）のう、おぬしや、これなる姫御はじゃ、四行詩の主題に事寄せて、お前さんに思いのたけを寄せたげな。

王　友よ、そこもとばかりか、余の心象もさようなるぞ。まこと彼女が――

「これなるは恋す女子と、主よ、分かって下さいませ」の　歌詞のくだりを、　己が肢体指で差しつつ演じありしは、　ダーリニー妃の近ければ　情誼を寄する術もなしとて、愛し男を恋う場に託し　余に言問いしかと覚ゆるを。　（二七）

マーラヴィカー、歌唱終って退場しかける。

道化　姫さんや、ちと待った。御身は何か忘れなさったぞ。そこのところを、先ずはお訊ねしようぞ。

ガナダーサ　娘御や、ほんのしばらく立ち止まって、お稽古の出来につき嫌疑が晴れてから行くとなされよ。

マーラヴィカー、立ち止まる。

王　（独白）おお、身の構えの一つ一つに、天成の美が異なった魅力を増し行くことよ。と申すは――

手首に腕輪のひたと止まれる　左手を尻辺の方にあてがい、他方の腕は朝顔の蔓さながらに放ち垂らして、足先の趾もて花を　まさぐりつ舗石の床に　眼は伏せど、上の半身はすっくとばかり　反らせたる、これなる姫の静止の様は　舞うにも勝りていとど艶やか。（二八）

正妃　先生ったら、ガウタマの言葉なんぞを気になさいますのね。

ガナダーサ　などとは申されますな、正妃様。陛下の御信任ぶりから察しまするに、ガウタマは精緻な目利きかも知れませぬ。御覧じませい――

頭の鈍い男でも　利発の人と交われば　鈍くはなくなりまする――「泥消し」樹の実に触れます際の　濁り水の様に似て。（二九）

（道化を見やり）さらば身共がうかがおうぞ、貴殿の御趣意を。

道化　（ガナダーサを見やり）カウシキー尼に、先ずは訊ねるとされい。その後でじゃ、儂が気づいた手違いを言うてやるわ。

ガナダーサ　御出家、良きにつけ悪しきにつけ、御覧なされたままを仰せ下されい。

遊行尼　お見せいただいた限り、万端非の打ちどころありませぬ。何ゆえと言いますに――

肢体の各部は言葉が籠り、大意を見事に表出したり。足の運びは拍子にかない、折節の情緒につけて　没入一体の域に到れり。手指に発する所作は優美、その変転に呼応して表情こもごも基調を周り　去来する間、感動の喚起は終始して変らず。（三〇）

ガナダーサ　陛下にはいかが思し召されまするか。

王　己が平素の贔屓筋に、身共は熱が冷めることとなったぞ。

ガナダーサ　今こそ拙者、天下晴れての舞踊の師にござる。――

教師の授くる訓育は、御身ら識者に成果ためされ　汚点をこうむることなくてこそ、火に黒ずまぬ黄金のごとく、世の心ある人士より「純正」の評を博するものぞ。（三一）

正妃　あな嬉しや先生の御隆昌、鑑定人のお眼鏡にかなわれて。

ガナダーサ　そなた様の御庇護、また拙者が栄の源にござります。（道化を見やり）ガウタマよ、いざ、そちの存念を申せ。

道化　初の稽古披露にはじゃ、いの一番に婆羅門供養をせずばならんて。そいつを御身は忘れなさったろうが。

遊行尼　おお、舞台上演に通じたる御質問かな。

一同笑う。マーラヴィカー、微笑を浮かべる。

王　（独白）余の目は己が対象の、正に精髄を捉えたぞ。というは、この目――
切れ長の眼の姫の、微笑めば　ちらと歯覗き賞でたき口辺、未だ蕊すべては見えず　息づ
ける蓮のごときを、目の当りにせしとあれば。　（三二）

ガナダーサ　大婆羅門殿よ、只今は楽屋にての祭儀にはござらぬ。さもなくんば、いかで身共が、心付けを呈すべきそこもとに対し、礼を失することがござろうぞ。

道化　何とも儂のしたこと、チャータカ鳥の間抜けさかいな――旱天雲の雷で空がゴロゴロ空鳴りすると、さあ水飲もうと口開いたみたい。

遊行尼　ほんに、その通りよ。

道化　そいじゃと、間抜けな手合いはな、学のある人がお褒めになると尻馬に乗るもんじゃわ。さあて、これなる尼殿が見事じゃとおっしゃるからにゃ、そりゃ、こいつを御褒美に、儂もあの娘に進上するわい。（王の手から腕輪を引っ張る）

正妃　お待ち、お前ったら、どこが良いのか内実は分かりもせぬに、何だって装身具を授けなどするの。

道化　何せ他人のもの〔こちとらの腹は痛まん〕と思えばじゃ。

正妃　（師範を見やり）ガナダーサ先生、そなたのお弟子は、お稽古の披露もうすみましてよ。

ガナダーサ　娘や、さあ、もう行くとしよう。

　マーラヴィカー、師匠ともども退場。

道化　（傍白）儂の才覚もここまでですぞ、御身のお役に立とうとて。

王　などとは割り切らんでくれい。余はというに――
思えらく、彼女を隔つ　緞帳の下りてあるは、両の目には日輪の　西山に沈みしがご
と、胸にとりては大祝祭の　終局を迎えしがごと、かの安息の境地には　開きにし扉の
閉じたるごとし。　（三三）

道化　（傍白）よおしと。お前さんと来たら、貧乏病患者のくせに、医者が薬を届けてくれようと当てにする御仁じゃわ。

ハラダッタ　（登場）陛下、只今より拙者の側の上演に、御観覧の寵を賜りませ。

王　（独白）余としては、もう見る意味がなくなったわ。（愛想めかして、声に出し）待ち焦がれておるではないか、身共らは。

ハラダッタ　有り難き仕合わせにござる。

　舞台裏にて。

吟遊詩人　陛下、陛下の御盛運を。正午の刻とはなりましたるぞ。と申すは――
あまりの炎熱に苦しみて、長池の蓮の葉影に　白鳥は眼を閉ざし、綺羅競う館は暑く、
軒の端に住み馴れ来しを　家鳩が呪うほどなり。　水滴はぜて上がれば、井戸車回るあた

りを　渇(かつ)えてし孔雀さすらう。七頭の駿馬を馳する全き日輪　陸離(りくり)たる光条(グナ)の数を尽く
して　赫々(かくかく)と輝きあるは、王よ、十全の王者とて　英資(グナ)をこぞりし御身に似たり。（三四）

道化　やれやれ、儂(わし)らの飯時にはなったぞ。これなる殿におかせられてはじゃ、日課の時刻を外されると加減が悪うなる由、医者どもが申しておるわ。ハラダッタ、どうじゃ、そちの言い条は。

ハラダッタ　余人が口挟む筋合いにあろうものか、只今の件は。

王　（ハラダッタを見やり）さらばじゃ、そこもと側の稽古の出来は、身共ら明日に見ると致そう。貴殿には、下がって休息をとるとなされよ。

ハラダッタ　陛下の御命のごとく。（退場）

正妃　上様には、正午の儀を執り行なわれませ。

道化　奥方や、中でも飲食の儀を、と急(せ)かせて下され。

遊行尼　（立ち上がって）幸(さち)ありませ、御身には。（正妃ともども退場）

道化　のう、おぬしや、器量ばかりか技芸の方でも、マーラヴィカーは無二の逸品ですなあ。

王　おぬしよ――

かの天成の美女に配すに　艶(あで)やかの技能をもってすとは、造物主梵天(ブラフマー)におかせられて
は　愛神の武威に供すべく　毒塗りの矢を調え給うか。（三五）

つまりじゃ――余の状況、そちは察してくれい。

道化　お前様も、儂の状況を察して下されや、そりゃもう屋台の鍋みたいに、儂の胸の奥は焼けて沸(たぎ)っていますじゃに。

王　そうともよ。身共のため、そなた急いで努めてくれい。

道化　心付けはしかといただきましたと。でもな、かのマーラヴィカー様はじゃ、叢雲(むらくも)に妨げられた月光みたいで、お目にかかるとて当方の一存にゃ行かぬ。それにまた、お前様はというと、屠殺場うろつく禿鷹みたい、肉が欲しゅうてたまらんくせに、やたらびくびくしてなさる。重病人が心ひそかに手術の成功を願う――といった風でいて下さりゃあ有り難いが。

王　病むことのうしてあり得ようか、余は――

大奥にありとある　美姫(びき)の動静に心向かわず、目元の涼しき彼女や独り　余が愛の無二の
寄辺(よるべ)と　なりにける今は。（三六）

全員退場、第二幕終る。

第三幕

遊行尼の下女、登場。

サマーヒティカー　御出家様の仰せには――「サマーヒティカーや、国王陛下の御苑に生っているレモンを一個、取っておいで」――とのこと。では、ひとつ、遊園林のお庭番マドゥカリカーさんを探すとしよう。(舞台を回り、見据えて)あら、あそこにマドゥカリカーさんが、金色無憂樹を眺めているわ。先ずは、あの人に挨拶しよう。

庭番女、登場。

サマーヒティカー　(進み寄って)あなた、お気に召しまして、お庭の森でのお勤めは。

マドゥカリカー　あらまあ、サマーヒティカーさんだわ。ようこそおいで。

サマーヒティカー　ねえ、あなた、御出家様が仰せなの――「妾のごときものは、かの殿に空手では拝謁もかなわぬゆえ、レモンの実なりと手土産にして御機嫌奉伺に及ぶとしたい」――と。

マドゥカリカー　そこにあるじゃないの、レモンなら。それより、聞かせてちょうだい――張り合う舞踊師範お二人の稽古ぶりを御覧になって、さて御出家様は、どちらをお褒めになったの。

サマーヒティカー　お二人とも学識あって実技も堪能、でも、お弟子の出来が格段とあって、軍配はガナダーサ側に上がった、と聞いてますわよ。

マドゥカリカー　ところで、マーラヴィカーさんについてのうわさ、どんな風にお聞きかしら。

サマーヒティカー　あの子に殿様は、ぞっこん御執心なのですって。ただし、正妃ダーリニー様のお気持を傷つけないよう心されて、御自分の権勢を見せつけにはなさらぬとか。マーラヴィカーはというと、この数日、瑞々しさの抜けた素馨の花輪みたいに、打ち萎れて行く一方の様子ですって。それ以上は私、存じません。じゃ、お暇を下さいな。

マドゥカリカー　そら、そこの枝に下がっているレモン、お取りなさいよ。

サマーヒティカー　(所作あって取り)ねえ、あなた、成道者がたに尽くして下さったのですから、この実に勝ってふくよかな、果報を得られますようにね。(立ち去りかける)

マドゥカリカー　あなた、一緒に行きましょう。私も、この金色無憂樹がなかなか花を見せないので、「足蹴の儀」の件で正妃に言上に参じますから。

サマーヒティカー　なるほど、あなたの御職責よね。

両女退場、間幕終る。

王、恋わずらいの体、道化と登場。

王　（己が身を見やって）——

身は生気　失なうこともありぬべし、愛しき人と相擁す幸のなければ。目は涙　浮かぶこともありぬべし、しばしも彼女を見かけ得ずとて。されど、そこもとは、片時も鹿のごとあどけなき目の　姫と離るることとてはなし——かくては至福の満足こそそこもとに定めしあるべきを、胸よ、などてかそこもとは　ひたすらに悩み苦しむぞ。（三七）

道化　落着き失のうて泣き言ばかり、もう止して下され。儂はマーラヴィカーの仲良しバクラーヴァリカーに会うて、あんた様の言付けの旨を聞かしときましたがな。

王　すると彼女は何と申したか。

道化　「お殿様に申し上げて下さい——『今回は大任を拝し、有り難き仕合わせにございます。ただ彼女は、哀れや正妃様の監視がいよいよ強く、まるで竜蛇が見張るお倉のように、容易には寄りつけぬのでございます。とはいえ私、力を尽くしましょうぞ』——」と。

王　「気紛れの胎より生ずる」となん尊き愛の神よ。御身はこれなる輩を障碍山積の境域に執心させ、しかも彼がもはや一刻の猶予も忍び得ぬまでに、打ってかかられまするとは。（驚嘆

の語気にて）——

胸を錐もみにする労きは、見る目やさしき花になる　御身が戦の物の具と、何たる違いでござろうか。「当りの柔らなものほどきつい」とは下世話にも聞こゆれど、「思慮かき乱す」愛神よ、御身の上に見ゆるもの——正にこれぞや。（三八）

道化　「しとげにゃならん例の件で、儂は策を立てやした」——というてるじゃねえか。で、あんた様、しゃんと気を取り直して下されや。

王　ところでぞよ、何するにも気乗りがせぬ今、残る日長をどこで過ごしたものかな。

道化　あんた様やあ、ほんの今日の話じゃねえですか——イラーヴァティー女御がじゃ、初咲き結構な赤い春鶏頭の花を献上、早春の訪れに事寄せて、「妾は上様とぶらんこ乗りがして見とうございます」てな口上を、腰元ニプニカーを通じて寄せてきなさったのは。それに、あんた様ったら、女御に承諾の約束をしなさったがな。じゃによって、無論のこと遊園林へ参りましょうぜ。

王　それはならぬぞ。

道化　いかがな次第で。

王　おぬしよ、女子どもは生来、抜け目のないものぞ。そちの親しきかの女御が、どうして感づかずにすむものか——情は他に移りある余にてあるを。さらば、余の思うに——

彼女に日頃し馴れてし 情誼めかしの応待は、今や一擲するに若かず、けだし断りの理由とて 気づく口実多々あれば。 逆に禁物ぞや、聡き婦女子に、既往に勝りて事々しきも 真情こもらぬ型通りの儀礼。

道化 あんた様、いけませんぜ――大奥の方々への愛想めかしを、藪から棒にうっちゃっては。〔三九〕

王 (考えこんで)しからばじゃ、遊園林への道を案内せい。

道化 あんた様、こちらへ、こちらへ。

両者、舞台を回る。

道化 そら遊園林はじゃ、風にそよぐ新芽の指でさしまねき、あんた様に早うお入りとせっつくみたいでしょうが。

王 (心地よい肌ざわりの所作あって)春とは品良き上流子弟ぞ。友よ、見られい――
歓喜に酔いし郭公の 耳に快き囀りを語とし、 恋わずらいのお加減いかがと 陽春〔男〕神は同情こめて 言問い給うかと見ゆるうちに、 感触爽やかなる 掌 のごと、マンゴーの若芽に薫る南の風を、余が肢体に宛われたり。〔四〇〕

道化 入りなされや、とくと御満足が行くように。

両者、林に入る。

道化 固唾を呑んで目を配るのですぜ。 こりゃあ、どうじゃ、いわばあんた様を籠絡しょうと

て、遊園林の美の精が、若い女子の装いをも気恥ずかしゅうさせずにおかん体の、花の盛装を凝らしたげな。

王 感に耐えて見とれおるにあらずや、余とても。――
紅唇に差せる臙脂は 赤花無憂樹の蔓枝に妍を凌がれ、 紅・白・茜三彩の春鶏頭花は頬を彩る筋紋様を 顔色なきに到らしめたり。 額に描ける精華の印も、 蜂連なれば眉墨なせる 名のみ同じき灰木樹の花に、侵され生彩を失なえり。 美顔化粧の手並にかけて、世の婦女子をば見下すがごと――陽春〔精女〕の美は。〔四一〕

両者、庭園の美を凝視する。

焦心のマーラヴィカー登場。

マーラヴィカー お心の内も存じ上げぬ殿様に思いを寄せるとは、我と我が身に先ず恥ずかしいわ。仲良しの朋輩衆に一部始終を打ち明けることなど、どうしてできよう。癒す術のない劇痛を、恋が私にいつまでもたらすものか、見当もつかない。(数歩歩んで)さて私、どこへ行くのだったかしら。(考えこんで)そうそう、正妃様から御指示を受けたのだった――「ガウタマの悪ふざけで妾はぶらんこから落ち、未だに足が疼くによって、ひとつそちが、金色無憂樹の『足蹴の儀』を執り行なうことにしておくれ。五夜のうちに木が花を見せたら、そ

の時には、妾はそちに……（中途でため息）……どのような思いをもかなえる恩賞を授けましょうぞ」——と。先ずは、お役向きの場所に、私の方が先に着くようにしましょう。追っつけバクラーヴァリカーさんが、私の足飾り一式を手にして見えるはずだから。それまで、しばしの間、心置きなく悲しみに暮れるとしよう。（舞台を回る）

道化 （認めて）どうじゃ、どうじゃ、酒を喰ろうてくたばった男に、悪酔さましの特効薬、氷砂糖さんが寄り添うて来たがな。

王 やよ、何としたと。

道化 そら、あそこじゃ——身づくろいも控え目で物思い顔、独りぼっちでマーラヴィカーが——遠からぬあたりにいますがな。

王 （喜ばしげに）なに、マーラヴィカーとな。

道化 そうでげすとも。

王 これで生命を持ち直せるぞ。——

愛しき姫の　片方にあるを　そこもとより　知るに及びて　余が胸は　いざ生きなんと
息づきてあり。水欲しの　思いに暮るる旅人が　木に覆われし　流れのあるを　鳴く水
鳥より　知りしがごとく。　（四二）

いずこぞ、あれなる姫君には。

道化 ほうら、見えますがな——木立の中から抜け出して、こっちへ向かって来ますのが。

王 （見やって、喜ばしげに）おぬし、見えたぞ——

腰の辺は豊満　胴は華奢　乳は高まり　目はいとど切れ長、余が生命の　あれに来たる
を。　（四三）

友よ、先日とは様変って坐すぞ、かの姫御前は。と申すは——

頬の辺は芦茎のごと仄白く、身の飾り控え目なれば、春の訪れに葉は闌けて　花数輪を
残すのみなる　素馨の蔓かと映ずなり。　（四四）

道化 あの子も、あんた様みたいに、恋の病いに苛まれてるのじゃろうて。

王 と見るは友情の僻目ぞよ。

マーラヴィカー これが目指す木だわ——艶やかな「足蹴の儀」を待ち侘びて花の盛装をしないとは、思い焦がれる私の嘆きをいわば真似しているのね。ではひとまず、あの木の蔭になって涼しい板石に、座って気を晴らすとしよう。

道化 あんた様や、聞かれましたか——「私は思い焦れてます」と、あれなる姫は宣うがな。

王　それだけでは、そなたの推理に曇りなしとは余に思えぬぞ。何ゆえとならば――
春鶏頭の花粉を運び、新芽の襞の裂け目より　滴る水気を伴うて　南より吹く春風は、謂れもなきの思い焦がれを　人の心に生みかねまじく。　（四五）

マーラヴィカー、腰を下す。

王　友よ、ちとこちらへ。蔓草に身を隠そうぞ。

道化　イラーヴァティー女御らしいのが、遠からぬあたりに見えますぜ。

王　象は蓮池を見つけたら、鰐がおろうが気にせぬものよ。（窺うて留まる）

マーラヴィカー　心よ、手懸りもない高望みはおよし。私に苦労させないでよ。

道化、王をちらと見る。

王　見られい、愛情というものの偉大を。――
焦心の何に因るやは　そなたの明かすところにあらず。推理は真相究明を　常に果とするものにはあらず。さりながらぞ、腿美わしの姫、先刻来のそなたが嘆きは　己れをおいて他に的なしと、余は心得て有卦に入るなり。　（四六）

道化　今となっては、あんた様に、疑問の余地もなくなりましょうが――そうら、儂が恋の用向きを託しておいた、バクラーヴァリカーが来ましたぜ。

王　身共らの頼み事を、果して彼女は憶えておろうか。

道化　生れの賤しいあの下女風情がじゃ、こうまで重い御用向きを、どうして忘れるものですかいな。

バクラーヴァリカー、足美粧の道具一式を手に、登場。

バクラーヴァリカー　あなた、御気分はよろしくって。

マーラヴィカー　おやまあ、バクラーヴァリカーさんが見えたわ。ようこそおいで、お座りなさいな。

バクラーヴァリカー　（腰を下し）ねえ、あなた、このたびは御名代の大役ですわね。それでと、片足を出してちょうだい――臙脂を刷き足輪を付けて進ぜますから。

マーラヴィカー　（独白）心よ、いい気になっては駄目よ。御名代とて、正妃の晴姿を今は身に帯びることとなった。こうとなっては私、（妃の晴着を）もう手放せないわ。いいえ、それとも、これがこのまま、私に死出の装束となろうか。

バクラーヴァリカー　何をぐずぐずしてなさるの。正妃様がお待ち焦がれよ――この金色無憂樹

が花見せるのを。

王　何じゃ、無憂樹(アショーカ)に「足蹴の儀(ドーハダ)」とてか、只今の件は。

道化　お前さんたら——謂(いわ)れもなしに正妃がじゃ、ここな侍女風情に大奥の盛装を差し許される——てなことあるとでも心得なさるのか。

マーラヴィカー　(足を差し延べる)じゃ、あなた、ご免なさいね。

バクラーヴァリカー　あれまた他人行儀な、あなたは私と同体よ。(所作あって足の美粧にかかる)

王　——

見よや、おぬし、愛しき姫の　足の辺(へ)に今し施されたる　瑞々(みずみず)しき紅(くれない)の筋、　シヴァ大神
に焼かれてし　愛樹(カーマ)にようやく萌え出ずる　新芽のごときを。　(四七)

道化　足に似合いのお役向きが託されたことよ、あれなる姫御前(ごぜ)には。

王　そなた、よくぞ申された。——

爪の光沢ほとばしり　紅萌ゆる若葉色なす　この瑞々しき御足(みあし)もて、早乙女(さおとめ)は二者を打ち
給えかし——一は「足蹴の儀(ドーハダ)」を待ちもうけ　未だに開花せぬ無憂樹(アショーカ)の木、一は今し

がた不埒の儀あり　平身低頭哀訴する愛人。

道化　お前さん、追っつけ出来ることでしょうて——あれなる姫に不埒を働くことなら。　(四八)

王　事の成就を洞察さるる婆羅門(ブラーフマナ)殿の仰せ、かたじけなく頂戴つかまつる。

女御イラーヴァティー、酔気を帯び、腰元と登場。

イラーヴァティー　これよ、ニプニカーや、しょっちゅう聞くことだがね、酔いは女子衆(おなご)に格別の飾りだって。という世間の言い草は本当かしらね。

ニプニカー　もとは世間の言い草というだけのことでしたが、只今は本当になりましてございますよ。

イラーヴァティー　忠義面(づら)したお情けは、まっぴらご免さ。さあ、お言いよ、どうして分かるのかい——殿が一足先に、ぶらんこ館へおなりになってるとは。

ニプニカー　女御様に情誼つくすを、殿様が破られた例(ためし)はございませぬゆえ。

イラーヴァティー　おためごかしは、もうたくさん。公平なところでお言いったら。

ニプニカー　春祭のお祝儀ほしさに、ガウタマさんがわざわざ知らせて参りました次第。奥方様、お急ぎなさいませ。

イラーヴァティー　(酔態に見合った足取りで、舞台を回り)これよ、酔いで大儀な姿(わらわ)をば、上様に会

いにと心は急かすの。ところが足の方はよ、道に引っ掛ってしまうのさ。

ニプニカー　はや着きましてはございませぬか、ぶらんこ館に。

イラーヴァティー　ニプニカーや、ここには見えぬぞえ、上様は。

ニプニカー　ようく御覧なされませ、奥方様。殿様は、悪ふざけなすって、どこかに隠れておいでに違いありませぬ。私たちも、そら無憂樹の根方の板石——樹蘭の蔓に包まれて人目につきませぬゆえ——、あそこに腰下すと致しましょう。

イラーヴァティー　いいとも。

ニプニカー　（見やって）御覧なさいませ、奥方様。私たちがマンゴーの若葉を摘んでますと、蟻どもが足を刺してございますよ。

イラーヴァティー　とは、どうしたことかえ。

ニプニカー　あれ、無憂樹の木陰で、バクラーヴァリカーがマーラヴィカーに、足の美粧を施しておりますわ。

イラーヴァティー　（怪訝の所作あり）ここはマーラヴィカー風情の来る所じゃないのに。ついては、そちはどう思うかえ。

ニプニカー　私の思いますに、正妃様は、ぶらんこから摩り落ちて足を痛めておいでなものですから、無憂樹に「足蹴の儀」を施す役目を、マーラヴィカーに仰せつけられたのでございましょう。でなければ正妃様には、平素御自身で御佩用のあの足輪一対を、どうして供奉衆にお差し許しになりましょうものか。

イラーヴァティー　妾には棚上げか、とんだ栄誉だわ。

ニプニカー　殿様をお探しにはならぬのでございますか。

イラーヴァティー　これよ、妾の足は前に進まぬぞえ。酔いで気持が悪い。先ずは不審を、とことん突きとめるとしようよ。（マーラヴィカーをしげしげと見つめ、独白）むべなるかなよ、妾の胸が気後れするのも。

バクラーヴァリカー　（美粧おえた足を見せて）どうお、臙脂の筋の刷きようは、お気に召して。

マーラヴィカー　己が足のことですもの、褒めるのも恥ずかしいわ。あなたったら、美容術では、ここまでのお仕込みを誰から受けられたの。

バクラーヴァリカー　そのことならね、私は殿様のお弟子ですの。

道化　さあ催促しなされよ、早う師への授業料を払えと。

マーラヴィカー　見上げたわ、あなたったら、いばったりなさらないのね。

バクラーヴァリカー　お稽古の腕を振るうってつけの足に出会ったのだもの、今こそいばるとしましょうかしら。（彩色の具合を見やって、独白）ああ、仕上がった、自慢するだけのことが。（声に出して）あなた、片足の色塗りは終りましてよ。ただ、乾かすのに息吹きをかけねば。いえいえ、このあたりは風が通るからよいと。

王　友よ、見よや、見よや。――

臙脂瑞(みず)けき彼女が足を　口ずから息かけ干さば、余に絶好の奉仕の機会　今こそは訪れしぞよ。（四九）

道化　じたばたしなさんな。そういう良い目にゃ、あんた様、いずれおいおいと会われますがな。

バクラーヴァリカー　あなた、おみやは紅蓮の花みたいに素敵。ぜひとも、あなた、殿様のお膝に侍(はべ)る身とはなりませよ。

イラーヴァティー、ニプニカーの顔をうかがう。

王　とは余の祈願するところぞよ。

マーラヴィカー　まあ、あなたったら、はしたないことお言いでないわ。

バクラーヴァリカー　言うべきことを言ったまでよ。

マーラヴィカー　私をいとおしんで下さるのねえ、あなたは。

バクラーヴァリカー　私ばかりではなくってよ。

マーラヴィカー　ほかに誰が。

バクラーヴァリカー　美質に御執心の殿様も。

マーラヴィカー　嘘をおっしゃい。そんなことったら、私にはないわ。

バクラーヴァリカー　なるほどあなたにゃないでしょうが、窶(やつ)れて仄(ほの)白い殿様の御身の上には、ありと見えましてよ。

ニプニカー　あらかじめ下稽古が出来てるようですわ、あん女郎(めろう)の受け答えぶりは。

バクラーヴァリカー　「当方から情寄せて見てこそ、相手の情を験(ため)し得る」という、世の心ある人士の句をば、準拠とはなさいませな。

マーラヴィカー　自分勝手に出まかせをおっしゃるの。

バクラーヴァリカー　いいえ、とんでもありません。これは殿様御自身が、情誼尽くされてのお睦言(むつごと)ですわよ。

マーラヴィカー　まあ、あなた、正妃様のこと思うと、私の胸は落ち着きませんわ。

バクラーヴァリカー　おぼこさんたち、蜂が寄ってくるからって、マンゴーの新芽を耳輪にしちゃいけないの。

マーラヴィカー　さしあたってはね、難儀に会うた折には、あなたが私の耳輪であって下さいね。

バクラーヴァリカー　拉(ひし)がれりゃ一段と香の高い「赤鉄樹(バクラ・アーヴァリ)の花房」ですったら、私は。

王　でかした、バクラーヴァリカーよ、でかしたぞよ。――

相手の気持を読み取るや　ここぞと口火を切って落し、抗弁あれば即妙の　答え打ち返す
弁舌により、今やこれなる姫御前(ごぜ)を　己が意のままとなすに到れり。むべなるかなよ、
恋する者の　生命(いのち)は遣手(やりて)に係ると言うは。　(五〇)

イラーヴァティー　これよ、見てたもれ。あれあのようにバクラーヴァリカーは、マーラヴィカーを踏み出させたじゃないの。

ニプニカー　ほんに、奥方様、何食わぬ顔で筋書にのせる模範例ですわ。

イラーヴァティー　むべなるかなよ、妾(わらわ)の胸が騒ぐのも。事情を明らかにした上で、とくと考えることにしよう。

バクラーヴァリカー　こちらのおみやも、化粧が出来ましたと。さあて、両方ともに、足輪を付けて進ぜますわ。(所作あって一対の足輪を取り付け)じゃあ、あなた、お立ちになって。正妃様から仰せつかった、無憂樹(アショーカ)に花咲かせるお役目を、果すのですよ。

両女、立ち上がる。

イラーヴァティー　正妃の言付けと聞いた、ようし見ておれ。

バクラーヴァリカー　そうら、紅潮して享受に堪えなんとばかり、あなたの正面に御鎮座よ。

マーラヴィカー　(嬉しげに)え、殿様がですって。

バクラーヴァリカー　(薄笑いして)殿様ってわけじゃないの。(マーラヴィカー、傷心の所作あり)無憂樹(アショーカ)の枝から垂れ下がる新芽の叢(むら)が、ですわよ。ひとつ取って耳飾りになさいな。

道化　聞かれたかの、あんた様は。

王　友よ、もはやこれだけにて存分ぞ、恋する者には。――

一は心平らけく、一は思い焦れある二者の交わり成就し行くとも、余にとりては愉悦を成さず。相思の情の等しきに　互いに他を得る望みなき二者、終には身亡び果つるとも むしろ勝れりとは覚ゆるを。　（五一）

マーラヴィカー、新芽の耳飾りを調え、さて無憂樹に対し、艶やかに足蹴をくれる。

王　おぬしよ――

耳飾るべき新芽をば　これなる木より受け取りて後　同じ木に姫は足をば授く。　見合える交換取引の場に　余は独り馬鹿見し思い。　（五二）

マーラヴィカー　この木に私たちの捧げました敬意が、どうぞ実を結びますよう。

バクラーヴァリカー　ねえ、足蹴の栄に浴しながら、もし花咲かすのに愚図ついたりすれば、あなたの落度ではなくて、無論この無憂樹が能無しなのよ。

王　――

かぼそき胴の手弱女の、咲き初めし蓮華のごとくしなやかに　揺らぐ足輪に響き立てある　この御足もて栄を授かりしに、　無憂樹よ、もしそこもとにして即刻に　蕾の綺羅を帯ぶるなくんば、　由なし事よ、そこもとが　婀娜なる色男〔における〕と等しき　足蹴の望みをば抱くとも。　（五三）

道化　よし来た、あの子をからかってやろう。

友よ、言問う好機をとらえて、余は割って入りたく思うぞよ。

ニプニカー　奥方様、奥方様、殿様がこちらに入ってみえまする。

イラーヴァティー　だろうと前から思ってたぞえ、妾の心は。

道化　（近寄って）姫さんや、一体してよいものかな――これなる殿の親友に当る無憂樹を、左足で蹴りつけるなんぞとは。

両女　（狼狽して）おやまあ、殿様が。殿、殿様の御盛運を。

道化　バクラーヴァリカーよ、事情に明るいその方じゃに、これなる姫がこうもはしたない仕儀に及ばれるのを、何としてお控えせんかったのじゃ。

マーラヴィカー、怯える所作。

ニプニカー　奥方様、御覧なされませ。ガウタマさんは何をしでかそうとするのでしょうか。

イラーヴァティー　ああでもせねば、おまんまの喰い上げさ、似非(えせ)婆羅門(ブラーフマナ)の奴は。

バクラーヴァリカー　殿方、この子は正妃様のお言付けを果しておるのですわ。今それが不届きとおっしゃっても、この子にどう出来るものでもありません。――お殿様、何とぞお宥し給わりませ。（自ら平伏、マーラヴィカーにも平伏させる）

王　さようならば、そこもとに不届きの咎(とが)はないぞ。娘御よ、いざ立たれい。（手を取って立ち上がらせる）

道化　もっともじゃて。ここは正妃の顔を立てにゃならんわ。

王　（微笑して）――

婀娜(あだ)なる姫よ、若枝のごと柔(やわ)なるに　硬(こわ)き樹幹に宛(あて)がわれてし――美(ヴァーマ)わしの腿せる姫よ――
汝(なれ)が左(ヴァーマ)の御足(みあし)には、今お労(いたつき)はござらぬか。　（五四）

マーラヴィカー、恥じろう所作あり。

イラーヴァティー　おお上様たら、生牛酪(バター)みたいに、とろりと優しいお心根よ。

マーラヴィカー　さあ、バクラーヴァリカーさん、「お役向きは果しました」と正妃様にお知らせしましょう。

バクラーヴァリカー　殿様に言上なさいな、「お暇(いとま)を賜りませ」と。

王　娘御よ、いずれ去られて宜(よ)しかろうが、先ずは余が、折を得たればとての願いの筋を聞くとなされよ。

バクラーヴァリカー　あなた、とくと拝聴申し上げるのよ。

マーラヴィカー　殿様、仰せ下さりませ。

王　――

これなる輩(やから)また絶えて久しく、金色無憂華(アショーカ)に喰(たく)うべき　安息の境てふ名花をば、結ぶこと
なく今に到れり。膚(はだ)触れ合うの甘露もて、足蹴(ドーハダ)の願い満たしてたもれ――そもじを措い
て愛(め)ずべきを　知らずとなん、この者の上にも。　（五五）

イラーヴァティー　（やにわに進み寄って）さあさあ、満たして上げるがいい。無憂樹(アショーカ)は花を見せずとも、こちらは間違いっこない紳士だわよ。

一同、イラーヴァティーを見て狼狽。

王　（傍白）おぬしよ、今こうなって対策はいかがじゃ。

道化　他でもごわさん、〔三十六計〕脚力のみよ。

イラーヴァティー　でかしたぞえ、バクラーヴァリカー、でかしたぞえ。マーラヴィカーや、さあ、そちは上様を念願結実としてたも。

両女　奥方様、お宥し給わりませ。私ども風情としましたことか、殿様の御情誼をかたじけのうするなぞとは。（退場）

イラーヴァティー　信用ならぬわ、男というもの。こなたの騙し言葉を真にとって妾、お優しい正妃様を蔑ろにし、御心痛をかけてきたとは。こうとは知らなかったわよ——猟師連に心許して疑わぬ牝鹿同然、行く手にあるのは一身の破滅だとは。

道化　（傍白）やい、何とか答えなされや。根太を掘り起したところでふん掴まった泥的はじゃ、「壁破り術の演練、ゆるがせには出来ぬゆえ」とでも言わにゃなるまいが。

王　美わしの女御よ、余はマーラヴィカーなど、何の用もないわ。そこもとの来るのが遅いとて、行き当りばったりに気を晴らしておったまでぞ。

イラーヴァティー　信用なりません、あなたは。ほんと知らなかった——上様が、こういう気晴し沙汰をお見つけとは。知ってりゃ妾、こんな風に意地悪したりはしませぬに。

道化　（声に出して）ちょいと、これなる殿がじゃな、せっかくと愛想ようなさるに、邪魔とはな

って下さるなや。近くに見かけた正妃の侍女と、口利くにつけてはさぞや不届き——というくらいなら勘弁しなされ。ここのところはじゃ、そこもとの腹づもり一つに任そうぜ。

イラーヴァティー　口利いただけとしませいでか。何だとて妾、今さらに心を労することがあろうぞ。（怒って立ち去りかける）。

王　（追いすがって）女御よ、お宥しを賜れい。

イラーヴァティー、帯が足にまつわるまま、歩み続ける。

王　美わしの女御よ、情誼を尽くそうとする者を、無下にされるとは聞こえませぬぞ。

イラーヴァティー　人でなし、信用なりません、あなたなんぞ。

王　——

愛しの妹よ、「人でなし」とて、馴染を重ねしそれがしに　汝がなさるる黙殺は、ひとま
ずそれにて好しとせんも、　腰より帯の摩り落ちて　足下に伏して愁訴しあるに、　驚き入
ったる怒りんぼかな、　汝また黙殺を止められずとは。（五六）

イラーヴァティー　えい、こん女郎、帯までが——そっちにしなだれかかって行くわ。（帯を引っ掴み、これで王を打とうとする）

王　あれに女御が——

放つ涙は村雨のごと、目放せし間に金糸の帯紐　まろき腰より余が方へ　摩れ垂りたりし

を振りかざし、怒気おどろおどろしく余をば打たんと逸り立てるは、げに雨雲の連なりが稲妻の緒を走らせてヴィンディヤの山を打つにも似たり。（五七）

イラーヴァティー（独白）こんな風なことおっしゃって、上様は妾をいよいよ疎んじられるのかしら。（帯つかんだ手を垂らす）

王 ——

美わしの捲毛の女御よ、不届きの咎ありし余に一度は振りかざされし罰の笞をお控え召さる。かくて御身は婀娜なる風情を弥増しに募らせつつも、これに侍う僕の者になお御勘気をば向け給うとや。（五八）

今こそは、この儀きっと御聴許なろうぞ。（足下に身を投ずる）

イラーヴァティー マーラヴィカーの足じゃありませんたら——あなたに歓喜の憧れを満たすことになるとかいう。（腰元ともども退場）

道化 さあ立った、お前さん、宥してはもらえなんだわ。

王（立ち上がり、イラーヴァティーの姿が見えぬので）ええ、何たること、愛しの女御は行ってしもうたか。

道化 このたびの不行跡は効験あらたか、そいつで女御は追っ払われたげな。儂らの方も、早々に立ち退くとしましょうぜ——火星がもとの星宿を目指し、曲線軌道をたどるてなことのないうちにな。

王 おお、恋というものの奇妙さよ。——

余が心愛し乙女に奪われたれば、今し平身低頭を無下に却けられたるがかえって女御の有り難き心尽くしのごと覚ゆるわ。かように情誼の厚き女御が御勘気に坐すとあらば、知らぬ顔して放ってはおけじ。（五九）

されば、いざ二人して、御勘気の女御の御機嫌奉伺に参ろうぞ。

全員退場、第三幕終る。

第四幕

焦心の王、門番女と登場。

王 （独白）――

小耳に挟める評判の　乙女に関し思い馳すれば　いつしか根を確と張り、　乙女の姿を目のあたり　するに及ぶや熱き思いの　紅の新芽吹き出だし、　乙女の手触り感ずとき　膚毛立つ歓喜の著ければ　花の咲くかと見えたりき――「心に生う」てふ愛の木の、　打ち萎れあるそれがしを、　美し実の味　知る人とせばや。　（六〇）

（声に出して）友よ、ガウタマよ。

門番女 殿、殿様の御盛運を。ガウタマは不在にございます。

王 （独白）そうだ、マーラヴィカーの様子をうかがいに遣ったのだったな。

道化 （登場）あんた、あんた様の御盛運を。

王 ジャヤセーナーよ、ちと伺うて参れ――「正妃には、いずこにお移しし、はた、いかように看護したてまつって、お労を紛らわしておいでか」――と。

門番女 陛下の御命のごとく。（退場）

王 ガウタマよ、いかがな様子かな、そこもとの親しいかの姫御前には。

道化 猫に取っ摑まった時鳥のそれじゃて。

王 （悄然として）どんな風なのか。

道化 かわいそうに、あの子をじゃ、宝物庫という死神の口に投げこんだわ、目を血走らせた女子が。

王 余との密会を察知してか。

道化 そうじゃともよ。

王 何奴じゃ、一体――正妃を怒りに駆立てなどして、身共に敵意を寄せある奴めは。

道化 聞いて下され、あんた様。尼刀自が儂に話しましたじゃ――のう、昨日のことじゃげな、かのイラーヴァティー女御には、足を病んでる正妃のもとへ、安否を訊ねに見えたとか。

王 して、それから。

道化 すると、正妃の方からじゃ、女御に向かって問われたげな――「御自身への思し召しめでたい向きに、今はお添いもないのかえ」――と。すると女御が嘆いて言うにゃ――「どうして、まあ、御挨拶ですこと。思し召しのめでたさなら、供奉衆の方に移ってること、知れた話ですのに」――と。

王　単刀直入にばらさずとも、こうもマーラヴィカーをほのめかせば、疑惑を起こさせずにはすまぬわ。

道化　なおも問いすがられて行くうちにじゃ、つまりはあんた様の不行跡に関し、女御は正妃に注進に及ぶ——ちゅう格好になってしもうたわ。

王　おお、あれなる女御には、何たる怒りの執念深さよ。その先を申せ。

道化　他でもないわ。マーラヴィカーとバクラーヴァリカーとは、枷を嵌められて陽光も仰げず、竜蛇の娘さながら地下暮しの目に遭うてるのじゃがな。

王　やれ悲しや、悲しや。——

共に優しき声音せる　雌郭公と雌蜂とは、目覚め咲き出しマンゴーの　花に寄り添いある

うちに、逆風烈しき不時の雨に　木の洞へとぞ追いこまれたる。　（六一）

この場合、何か画策の余地があろうかな。

道化　あろうもんですかい。だって、宝物殿勤務のマーダヴィカーに、正妃が指示を授けられたことにゃ——「妾の印章入り指輪を見ぬ限り、そちは放してはならぬぞえ、人でなしのマーラヴィカー、バクラーヴァリカーの両名を」——じゃと。

王　（ため息つき、思案のしてみようもなく）友よ、この場合、どうしたものかな。

道化　（考えこんで）よおし、策があったぞ。

王　どのような策か。

道化　（目を配って）誰か、こちとらの目に隠れて、立ち聞きするもんがあるかも知れぬて。耳打ちとしましょうぜ。（くっついて）これこれ、しかじか……で。

王　やったぞ、その手を用いて事の成就を計れい。

門番女　（登場）陛下、正妃には風通し良き臥所に安らわれ、おみ足には赤檀油を塗って供奉衆が捧持しますまま、御出家のなさる物語で御気分を紛らわせて坐します。

王　さらば、今こそ、身共の進発に打ってつけの折じゃ。

道化　では、お出かけなされ、あんた様は。儂も正妃へのお目通りに、空手でないよう支度してきまさあ。

王　そちは先ず、ジャヤセーナーにとくと言い含めた上で、行くとせよ。

道化　合点じゃ。（耳打ちして）御婦人や、これこれ、しかじか……ぞよ。（退場）

王　ジャヤセーナーよ、風通しの良い臥所とやらへの道を案内致せ。

門番女　陛下、こちらへ、こちらへ。

正妃、臥床の様で登場。ならびに遊行尼、また供奉衆は身分に応じて位置。

正妃　御出家様、面白いお話ですこと。さあ、その先は。

遊行尼　（目を配って）その先はと申しますと……（再び目を配り）後刻お話し致しましょう。これな

るはヴィディシャー国主の、お成りにござりますれば。

正妃 あれまあ、殿様が。（起立しようとする）

王 挨拶の儀とて御無理なさるな。——

異例のことと足輪を脱し　純金の台座に倚りてある　病苦に満てしおみ足を、　はた、
かくは申すそれがしを、　睦言（むつごと）の葉のお妃よ、　痛み入らしむべきにはあらず。　（六二）

正妃 上様、上様の御盛運を。

遊行尼 御勝利ありませ、陛下には。

王 （遊行尼に一揖（いちゆう）あって着座）正妃よ、痛みは何とか御辛抱になれるかな。

正妃 目に見えて妾（わらわ）は、快方に向かいおります。

道化、あたふたと登場、聖索で親指を括（くく）っている。

道化 助けて、助けて下され、あんた様。蛇に儂（わし）は咬（か）まれたあ。

一同、愕然。

王 やれ悲しや、悲しや。そなたは一体、どこをふらついておったのか。

道化 正妃にお目通りするんじゃからとて、型どおりの供花を調えに、儂は遊園林に行ったのじゃわ。

正妃 まあ、何と、何としよう。他ならぬ妾が婆羅門（ブラーフマナ）様の、生命（いのち）の危険の因（もと）となったとは。

道化 その林でじゃ、無憂樹（アショーカ）の花房を捥（も）ごうとて、右の手をのばしたのじゃわ。すると木の洞から出て来たは、蛇の姿した死神、そいつが儂を咬みおった。ほら、これ、咬み痕が二つあるじゃろうが。（見せつける）

遊行尼 「第一の処置は咬傷（こうしょう）部位の切除」、と申すではございませぬか。何はさておき、こなたにその処置を施さねばなりませぬ。

王 ——

「咬傷部位の切除、ないしは焼却、または傷口よりの瀉血（しゃけつ）——咬まれし直後の人々に　救
命対策は以上のごとし。」　（六三）

——今の場合に必要なるは、解毒専門医らの処置ぞよ。ジャヤセーナー、急ぎドゥルヴァスイッディ医師を呼んで参れ。

門番女 陛下の御命のごとく。（退場）

道化 おお、性悪の死神めに、儂は取りつかれたじゃあ。

王 弱気になるではないぞ。咬傷は、いずれ毒も抜けようから。

道化 怯（おび）えんでおれようもんか。ぶるぶるするぞお、儂の五体わあ。（蛇毒の回る勢いを示す所作）

正妃 まあ大変、病状が示すのは……皆のもの、こなたを支えてたもれ。（供奉衆、あたふたと道化を支える）

道化 (王を見据えて)のう、お前さんとは、儂は竹馬の友でさあ。息子に死に別れた儂の阿母にじゃ、どうぞ遠慮のうにな、好くしてやって下されや。

王 怯えるではないぞ。ほどなく医師が、そちに治療してくれようから。しっかり致せ。

門番女 陛下、御命を拝してドゥルヴァスィッディ言上致しますに——「むしろガウタマを当方までお運びこみいただきたい」——との由にございます。

王 さらば、こなたを宦官どもに引き担がせて、あれなる医師殿のもとへ届けるとせよ。

門番女 かしこまりました。

道化 (正妃を見やり)奥方や、生命があってもなかってもじゃ——これなる殿に仕えるうちに、儂があんたに働いた不届き——悪うは取らんで下されなあ。

正妃 そなたの長寿を祈りますぞえ。

道化と門番女、退場。

王 哀れな奴よ、生来こわがりで、名の読んで字のごとき「百発百中」医師なるに、その処置の必中を奴は信じられぬのじゃ。

門番女 (登場)殿、殿様の御盛運を。ドゥルヴァスィッディの言上致しますに——「水甕処方を施すにつき竜蛇の印章の準備が必要、さらば御調達ありたし」——との由にございます。

正妃 竜蛇の印章の入った指輪が、そら、ここにあるぞえ。後刻、妾の手に返してたもれ。

(指輪を授ける。ジャヤセーナー、所作あって受領)

王 ジャヤセーナーよ、処置の首尾については、いち早く消息を届けてくれい。

門番女 陛下の御命のごとく。(退場)

遊行尼 胸の知らせでは、ガウタマには蛇毒ございませぬわ。

王 さようであってくれればなあ。

門番女 (登場)殿、殿様の御盛運を。蛇毒の勢いがやみまして、ガウタマはたちまち常態に復してございまする。

正妃 あな嬉しや、妾は世の謗りを免れ得て。

門番女 他方、宰相バールハタカの言上には——「御政務につきお諮りすべき件が多々ござれば、拝謁の寵を乞い奉る」——とございます。

正妃 お出かけなさいませ、上様、政務の御完遂に。

王 正妃よ、このあたりは日が照りつけて暑い。只今のお労には、冷すのが宜しいのじゃ。さらば、臥床を他所に運ばせるとなされよ。

正妃 これ娘ども、上様のお言葉を執り行なうよう。

供奉衆 かしこまりまして。

正妃、遊行尼、供奉衆一同、退場。

王　ジャヤセーナーよ、隠れ道を通って遊園林に連れて参れ。

門番女　陛下、こちらへ、こちらへ。

王　ジャヤセーナーよ、ガウタマは望みの的に行き着いたろうな。

門番女　さようにございますとも。

王　――

　願わしきもの　手中にせんとて　用いある計略は　達成可能絶対の　策と心得てはあれど、事の成否になお五里霧中　臆して思案にくるるは　それがしが心。（六四）

道化　（登場）あんた様、あんた様の御盛運を。仕上がりやしたぜ、お前さんのお目出度の一切は。

王　ジャヤセーナーよ、下がってそちの役向きを怠りなく致せ。

門番女　陛下の御命のごとく。（退場）

王　ガウタマよ、マーダヴィカーはけちけちした女子なるに、それが詮議だても全然せずであったとな。

道化　正妃の印章入り指輪を見たからにゃ、何で詮議だてなぞしますものか。

王　いや、余は印章のことは申しておらぬ。――「あの子ら二人を釈放とは、いかがな仔細で。それも、正妃様の供奉衆を差し措いて、貴殿をお差し遣わしとはまたどうして」――と、彼

女めは問うはずであろうが。

道化　儂は問われましたとも。頭の鈍い儂じゃに、またしても、場に打ってつけの答えが浮かんだわ。

王　話してくれい。

道化　儂は言いましたじゃ――「運勢占い師どもが国王に言上するにゃ、『御身らの星位に凶兆がござれば、獄舎すべてに恩赦がなされますよう』と」――

王　（喜ばしげに）して、それから。

道化　――「そのこと聞いて正妃は、それもイラーヴァティー女御の気持をそこなわぬよう心されてじゃ、今回の釈放は王の計らいぞと思わせたいばっかりに、わざわざ儂を差し向けなさったわけよ」――と。こう儂が言うとじゃ、女子は「なるほどね」と納得して、事をかなえてくれましたわな。

王　（道化を抱擁して）友よ、余を愛しんでくれるのじゃな、そちは。――

　友人の　ためを見透す眼力は、知的資質に負うのみにあらず。微妙なる　成業の途を見出すは、加うるに愛情　あってのことぞ。（六五）

道化　急ぎなされや、あんた様。マーラヴィカーを朋輩ともども泉殿に待たせといて、儂はあんた様を迎えに参りましたのじゃけに。

王　（気づかわしげに）おぬしよ、あれに花摘む手元せわしい女子は、そちの親しき女御の側近チャンドリカーぞ。おや、近うにやって参るわ。身共ら、ひと先ずは、こなたの壁に隠れておろうぞ。

道化　おお、泥棒と色男にゃ、月明かりは禁物じゃて。

　両者、判断の通りに行動。

王　そちの親しき姫御前は、余をどのように待ちあぐんでおいでか。いざ、これなる窓穴によりて、ちと窺い見るとしようぞ。

道化　合点じゃ。（両者、見やりて立つ）

　マーラヴィカーとバクラーヴァリカー、登場。

バクラーヴァリカー　あなた、殿様にお辞儀なさいな――そら、傍に、後に、お見えの殿様に。

王　察するところ、余の画像を指して言うのじゃな。

マーラヴィカー　（嬉しげに）御身に跪拝し奉ります。（戸口を見据え、悄然として）まあ、あなたったら、私を騙して。

王　余は満足ぞ、これなる姫の喜ぶにつけ沈むにつけ。――

白蓮の日の出における、はた日暮れにおける、かの両様の趣を　美貌の乙女の顔は　寸時に帯びて呈したり。　（六六）

バクラーヴァリカー　いらっしゃるじゃないの、そら、壁画の殿様が。

両女　（平伏して）殿、殿様の御盛運を。

マーラヴィカー　あの時ったら、私あたふたしてたものだから、今日と比べて、殿のお姿を拝しても満足とは行かなかったわ――〔そら、あの壁画の中で〕私には、目もと御満足げな殿様と〔拝されます今に〕比べて。

道化　あんた様、聞かれたか。何ということ。これなる姫御をお前さんが〔やたら感激して〕見てたようにゃ、向こうはお前さんを見んかったわけじゃ。とあっては甲斐もないなあ。お前さんが若さを誇ってても――どっさり宝石を詰めてても、小箱自体にゃ得はないのと同じで。

王　友よ、好奇の念はあれども、そこは生来慎み深いのが女子というものぞ。見られい――

逢瀬はこれが初めての　男の姿を残る隈なく　つぶさに見たき思いしつつも、目は切れ

長の美女どもの　視線は自ずと斜に流れて、恋しの君の上に隈なくは　機能し得ざるものなるを。(六七)

マーラヴィカー　ねえ、あなた、この女性はどなた――殿様ったら、ことさらお顔をそちら側に振り向け、情に潤んだ眼差でそちらをしげしげと見ていらっしゃる――。

バクラーヴァリカー　そちら側に坐すのは、イラーヴァティー女御でしょうが。

マーラヴィカー　あなた、殿様ったら、愛想のないお方と私には見えましてよ――お局がた一同を差し措いて、女御お一人の顔ばかり見据えておいでなんて。

バクラーヴァリカー　(独白)絵の中の殿様を真に取って、この子ったら妬いてるのだわ。ようし、この子をちと嬲ってみよう。(声に出して)だって、あなた、こなたは殿様の寵姫ですもの。

マーラヴィカー　それじゃ私、何だとて今さら、心を労することがあろう。(嫉ましげに顔を背ける)

王　友よ、見よや、見よや。――

眉ひそむれば額なる　ティラカの印は千々に乱れ、上唇は震えつつ　嫉ましげなる顔をこなたに巡らし向けんとするは、「愛人不実」の状景とて　これまた師匠の薫陶に負う

艶やかなる所作の心得を、彼女の披露するかとも見ゆ。(六八)

道化　さあ、お前さん、愁訴かた準備じゃぞ。

マーラヴィカー　それもガウタマさんが、後に侍っていてでじゃないの。(再びそっぽを向こうとする)

バクラーヴァリカー　(マーラヴィカーを制止して)違います、違いますわよ。まだ怒ってなさるの、あなた。

マーラヴィカー　いつまでも怒っている私、などとおとりになるのなら、そら、また怒りがぶり返ってよ。

王　(近寄って)――

青睡蓮の眼の姫よ、そこもとは絵に描かれある　挙動に立腹し給うや。申されい、こは何たることぞ。そこもとの目のあたりには、これこの通りそれがしが　余人の用を兼ぬることなき　奴僕とて控うるにはござらぬか。(六九)

バクラーヴァリカー　殿、殿様の御盛運を。

マーラヴィカー　(独白)何と、私たら、絵の中の殿様に妬いてたのだわ。(恥じいる面持で、合掌の会釈をする)

王、恋する者の気後れを表わす所作あり。

道化　何でまた、あんた様、気のない風でいらっしゃる。

王　そちの親しき姫君には、信用ならぬがゆえぞ。

道化　これなる姫御前を、また何として、お前さん信用せんのかい。

王　聞かれい。——

視界の内に留まりては　その都度たちまち消え隠れ、両腕の中に入りてさえ　急に抜け去
る、不実の娘。逢瀬の幻覚かくあれば、恋の病に困じある余の　心はいかでか、我が友
よ、こなたに対し信倚し得んや。（七〇）

バクラーヴァリカー　あなた、殿様は何度となく幻滅なさったそうよ。だったらば御自身、信任に堪える人物との、証を立てねばなりませんわ。

マーラヴィカー　ところが薄倖の私といえば、殿様に夢でお会いするさえ、かなわぬことでありましたものを。

バクラーヴァリカー　殿様、この子にお答えを賜りませ。

王　——

答えを授くには及ばぬを。愛の炎てふ聖火照覧のもと　余は自身をば授けしぞ、そちの親
しき姫御前に——仕えらるべき主とてにあらず、秘事に仕うる僕とはして。（七一）

バクラーヴァリカー　有り難き仕合わせにございます。

道化　（舞台を回って後、急きこんで）バクラーヴァリカーよ、無憂樹の若葉を喰い荒らそうとしてるわ、鹿の奴めが。さあ、二人で防ぎ止めようぜ。（立ち去りかける）

王　という具合にぞ、こなたを守る件についても、遺漏なくあってほしいものじゃ。

道化　といった指示を、ガウタマともあろう者になさるのかえ。

バクラーヴァリカー　ガウタマ様、私は人目につかぬ所に立ってますから、あんたは門を番してちょうだい。

道化　好いとも。

バクラーヴァリカー、退場。

道化　この水晶の柱に、ちょいと凭れるとしよう。（そのようにして）ああ、上等の石ともなりゃ、膚触りの好いことよ。（眠りこむ）

マーラヴィカー、怖々と立つ。

王　——

拋り捨てませ、美しの姫よ、逢瀬の契りの怯えをば——そなたに情誼を尽くさばやと　幾
ぞ久しく願う男子に。御承諾あれ、今し余は　マンゴーの木とはなりたれば、いざ、そ

こもとは白藤の　蔓からませる営みを。　(七二)

マーラヴィカー　正妃様が心配で妾は、自分に嬉しいことも致しかねてございます。

王　心配には及ばぬぞ。

マーラヴィカー　（咎める語気で）心配なさらぬという殿様が、女御様の前での御様子を、妾は拝見しておりますものを。

王　――

異性に接して愛敬ある　挙措こそは、紅唇の姫君よ、　好男子らの服膺すべき　伝家の義務にはござらぬか。　されば、切れ長の眼の姫よ、余が一命はこれことごとく　そもじに寄する望みに係るを。　(七三)

さらば恩寵を賜れよかし、愛慕久しきこれなる輩に。（ひしと抱きつく）

マーラヴィカー、所作あって、これを避ける。

王　妙なるものかな、早乙女らが恋の険路に下り立つ様は。というは、この姫にして――

身をわななかせ手をば遮る――帯まさぐるに指せわしなき手を。　己が手は二つながらを　宛いて胸辺を覆う――無理強いの抱き受けなば。　睫毛長うして目許涼しき　顔を傾げて逸らす――口吸わばやと余がもたぐれば。　拒むと見せる擬態もて、かえって彼女はいち早く　余に満願の幸を全うすなり。　(七四)

イラーヴァティーとニプニカー、登場。

イラーヴァティー　ニプニカーや、本当かえ、チャンドリカーからそちに注進があったとは――「泉殿の露台にガウタマ様が寝てるのを見かけました」などと。

ニプニカー　でなければ私、どうしてこの旨を奥方様に申し上げたり致しましょうか。

イラーヴァティー　それじゃ現場へ出向こうよ――上様の親しいお仲間が蛇毒の難から助かったのを、お見舞するということにもなるから。

ニプニカー　言わずにすまされたことがあるようですわ、奥方様のお言葉には。

イラーヴァティー　それにね、壁画の中の上様に、妾はお詫びしようとも思うのよ。

ニプニカー　今さらに何でまた一体、択って好んでこんな仕方で、殿様に御愁訴なさいますの。

イラーヴァティー　馬鹿ね、そちは分からぬのかえ。あの絵の中でと同様に、今また上様は、あらぬ方へと心移りなさってるじゃないの。妾が今しようとするのは、儀礼に悖った先日の咎を拭う――ただそれだけのことよ。

ニプニカー　奥方様、こちらへ、こちらへ。

両女、舞台を回る。

腰元　（登場）奥方、奥方様の御盛運を。正妃のお言葉にございます――「妾には今さら、我意

を張る場合でもありませぬ。されば、そなたを多とする念を重ねて示そうがために、このたびマーラヴィカーを朋輩ともども、足枷禁固の刑に処しましたぞえ。もしそなたに御異存がなければ、上様に対しても、そなたのために妾から口をきいて進じましょうぞ」——と。

イラーヴァティー　ナーガリカーや、正妃に申し上げておくれ——「妾風情としましたことか、奥方様の御処置の上に出るなどとは。あえて御側近を成敗なさりまして、妾に有り難き思し召しのほどをお示し下さいました。そもそも奥方様にあらずして、どなたのおかげでございましょう、かく申しまする者の今日の栄えは」——と。

腰元　かしこまりました。（退場）

ニプニカー　（舞台を回り、見据えて）そら、泉殿の戸口の所で、市場の牡牛かなんぞのように、ガウタマが座ったまんまで眠ってますわ。

イラーヴァティー　ほんにまあ、ひどい格好。蛇毒の症状がまだ残ってる風なのかしら。

ニプニカー　顔色は優れて見えますが。それに、ドゥルヴァスィッディ医師の治療を受けたのですし、彼の身辺に、良くないことの御心配はいりませぬわ。

道化　（寝言を言う）マーラヴィカー姫さんや。

ニプニカー　聞こし召しましたか、奥方様。あの野郎ったら、寿ぎ口上の御祝儀にこなた様からいただくお菓子で、いつも腹をくちくしていながら、今の寝言ではマーラヴィカーの名なんぞをほざく始末ですわ。

道化　イラーヴァティーを上回る身になんなされや。

ニプニカー　とは、まあ、ひどいことを。蛇こわがりの似非婆羅門めを——そら、ここにございます、蛇みたいにひん曲った彼奴自身の棒杖——こいつでもって、こちらは姿を隠したまま、どやしつけてやりましょうよ。

イラーヴァティー　あん野郎なぞ、蛇に咬まれるがいいわ。

ニプニカー、木杖を道化の上に投げて落す。

道化　（たちまち目を覚まし）大変じゃ、大変じゃ、毒蛇が儂の上に跳びかかってきたあ。

王　（急ぎ駆け寄り）心配はいらぬぞ、いらぬぞ。

マーラヴィカー　（追いすがって）ちいと殿様、急に出られてはなりませぬ、蛇だと申しますゆえ。

イラーヴァティー　まあ、どうしよう、どうしよう。殿様が、こなた指して、駆けて来られる。

道化　（吹き出して）何だと、こりゃ木杖じゃねえか。それじゃに、儂ときた日にゃ——先ほどは野茨の棘で傷口こしらえ、咬まれた咬まれたと蛇に悪名を着せた——その罰当りが儂に起きたと思うたがな。

緞帳はね上げ、バクラーヴァリカー、登場。

バクラーヴァリカー　殿様、入られてはなりませぬ。この辺には動きの一筋縄ならぬ蛇が、おる

かと見えまする。

イラーヴァティー　（やにわに王に進み寄って）お望み支障なくかないましたか――めおと昼下りの逢引きは。

一同、イラーヴァティーを見て狼狽。

王　愛しき女御よ、これは前代未聞の御挨拶なるかな。

イラーヴァティー　バクラーヴァリカーや、果しおおせたわね、そちの誓うた限りのことは。

バクラーヴァリカー　奥方様、お宥し給わりませ。蛙どもが鳴きおればとて、天帝インドラ陛下には、大地に雨を施すことをやめたりなどなさいましょうか。

道化　ちいと待った、奥方や。あんた様の顔見ただけで嬉しゅうてじゃ、これなる殿におかせられては、平身低頭も黙殺という先日そちら側の仕打ちをば、水に流してお忘れじゃがな。ところが、お前さんはというと、いっかな御機嫌が直らんのじゃな。

イラーヴァティー　ええい、腹が立つ。といって、さて、どうして見せよう。

王　つまりはこれ、「謂れなしの怒り」と申すもの、およそそなたには似つかぬわ。――

姿秀でし女御の上よ、いつとてか汝が顔、謂れなくして瞬時だに　怒気を宿せしことありや。いざや女御、語られよ――月勢の変り目どきにもあらずして、惑星の蝕に月輪かげる　夜景の現出いかであるべき。　（七五）

イラーヴァティー　「謂れなし」とは、上様よくぞ申されましたわ。妾どもにあった運勢が他に移りました今となって、腹を立てたりしましたら、妾は笑いものになるばかりでしょうとも。

王　そなたは、またしても、あらぬ風にお取りになる。余はといえば、正真正銘、御立腹の因由が見当らぬ次第ぞ。なぜというに――

不届きの仕儀ありたるとても、祝祭のめでたき日々に　供奉衆の縛に就けるは、好もしからずと心得て余は、これなる両女の釈放を命じ、かくて両女は余の許に、跪拝の礼を捧げんと今　伺候し来たれるものなれば。　（七六）

イラーヴァティー　ニプニカーや、行って正妃に言上してたもれ――「妾は本日しかと見届けました、奥方様が敵側の一味でいらっしゃることを」――と。

ニプニカー　かしこまりました。（退場）

道化　（独白）とんだ災難が降ってわいたわ。檻から抜けたは良かったが、家鳩は牝猫の目に嵌まってしもうたがな。

ニプニカー　（登場）奥方様、たまたま出会いましたマーダヴィカーの申しますに、そもそもの謂れは……（耳語）……

イラーヴァティー　（独白）それで万事、辻褄が合うわ。似非婆羅門めが糸口つけた計略なのだ。（道化を見やり、声に出して）今回のこと、これなる情事担当大臣殿の御政略なのね。

道化　奥方や、政略書の一言半句でも儂に心得があったならばじゃ、これなる殿に仕官してなんぞおりますかいな。

王　(傍白)いかがすれば一体、この窮地から釈放の運びとなろうか。

門番女、急きこんで登場。

ジャヤセーナー　陛下、ヴァスラクシュミー姫が、手毬を追うてお走りのところ、出合いがしらの赤猿にひどく脅しつけられ、正妃のお膝に崩折れたきり、風にさらされた若葉のように打ち震えつつ、まるで何にもお気づきがありませぬ。

王　やれ悲しや、悲しや。恐がりなものぞ、年端の行かぬうちは。

イラーヴァティー　(急きこんで)早く、早く、上様、急いで姫を御介抱なされませ。心痛から起きる症状が、重ってはなりませぬ。

王　余が手ずから姫を介抱しようぞ。(急ぎ退場しかかる)

道化　(独白)でかしたぞ、やい赤猿、でかしたぞ。おめえに救ってもろうたわ、味方の側は。

王、道化、イラーヴァティー女御、ニプニカー、門番女――退場。

マーラヴィカー　正妃様を思えば、私の心は震える。この上どんな目に遭わねばならぬのか、私には今、分からないわ。

舞台裏に声。

――あら不思議、あら不思議。「足蹴の儀」から五夜が満たぬに、金色無憂樹は蕾をつけたわ。とりあえず正妃様に御報告しよう。――

両女。聞きつけて大喜び。

バクラーヴァリカー　元気を出すのよ、あなた。正妃様は約束を違えぬお方ですから。

マーラヴィカー　じゃ、あなた、私は遊園林のお庭番の後を追って参りますわ。

全員退場、第四幕終る。

第五幕

庭番女、登場。

庭番女　私が取りかかって来たのは、金色無憂樹に奉祀の儀とて、土塀と聖壇とをめぐらす作業。さあて、お役向きを果した旨、先ずは正妃様に御報告しよう。（舞台を回り）この上はマーラヴィカーに、運命の御慈悲が垂れますよう。ことほどさようでありさえすれば、あれまでに御立腹の正妃様とて、今回の無憂樹開花の件で御心も晴れ、玉顔麗しくおなりだろうから。ところで正妃様は、どちらにおいでかしら。（見やって）おやまあ、あれに正妃側近の一人――朱印を押した小箱かなんぞを持って――佝僂男が大奥の広庭から出て来るところだわ。先ずは、あの男に訊ねてみよう。

上述のごとき品を手にし、佝僂男、登場。

庭番女　サーラサさん、どちらへお出かけ。

サーラサ　マドゥカリカーや、明学道師範の婆羅門がたに御祈禱を頼む束脩じゃて、こいつを宮廷司祭卿のもとへ届けに上がるのじゃ。

マドゥカリカー　時に、御祈禱って、一体どんなわけで。

サーラサ　聞いての通り大御所様には、祭儀用神馬警護の大任を王太子に命ぜられたのじゃが、そのとき以来というもの、正妃様には和子の武運長久を願って、金子八百枚に上る束脩を然るべき向きに取らせられるのじゃて。

マドゥカリカー　時に正妃様は、今どちら、何してらっしゃって。

サーラサ　寿殿に着座なされて、ヴィダルバ地域から弟君ヴィーラセーナ殿の送って寄こされた手紙を、御祐筆連が読み上げるのをお聞きになっているわ。

マドゥカリカー　ところで、ヴィダルバ侯については、どんな消息をお聞きかい。

サーラサ　ヴィーラセーナ殿を長とする征討軍によって、ヴィダルバ国主は我らが殿に帰服するに到ったそうじゃ。かくて彼は遠縁に当る(競争者)マーダヴァセーナ公子を獄より釈放、そして使節をば――高価な宝物の荷あまたと、技能に長けた娘が大半というお女中衆とを、朝貢品として持たせて――我らが殿のもとに差し寄こしたとか。その使節が、いずれ殿様に拝謁となるのじゃそうな。

マドゥカリカー　じゃ、行ってらっしゃい。御自分の役向きお大事にね。私も正妃様にお目通りとしますわ。

両者退場、間幕終る。

門番女、登場。

門番女　無憂樹奉祀のことに御奔走の正妃様が、私に仰せつけられるには――「『妾は無憂樹の花の美景を、上様と御一緒に目のあたりにしたく存じます』と、上様に申し上げておくれ」――とのこと。で、先ずは、政所の玉座に出御中の陛下を、お待ちすることとしよう。（舞台を回る）

舞台裏にて。

吟遊詩人二名　あな嬉し、陛下には、刑杖一閃すればたちどころに、仇なす輩の頭を踏まえて坐すぞ。

詩人甲　――

時鳥鳴くの睦音に　配偶の歓を享けつつ、ヴィディシャー河の岸辺の園に　陽春を送ります君は、〔女神ラティの夫の君〕「肢体無し」てふ愛神の　肢体を帯びて具現せるごと。

君が軍勢の迫りなば、無敵象軍の綱痕著き　ヴァラダー河畔の木々もろともに　仇敵は君に垂れ伏してあり――おお、恩寵授与者なる君よ。（七七）

詩人乙　――

神に比すべき名君よ、クラタカイシカの地を巡り　両人物の行伝は、世の聡き文士らが

勇者に歓喜の一念もて　詩句に編みて留むるところ。　ともにヴィダルバ国主より、一は庸懲の師もてその盛運を、　他は城門の門のごと　重き四臂もてルクミニー女を、　奪い去りにし　君とヴィシュヌ〔クリシュナ〕と。（七八）

門番女　盛運ことほぐ声が上がって、殿様には座を立たれたらしいが、そら、こなたを指してお出でになる。私はと、しばし殿の真正面からは御遠慮して、ここな表露台の楼門に身を寄せておるとしよう。（一隅に立つ）

道化を伴なって王、登場。

王　――

およそ逢瀬の易からぬ　恋いしの姫に思い馳せ、　片や己が軍勢に　ヴィダルバ侯は雌伏と聞けば、　炎暑下たまたま驟雨に打たれし　蓮さながら余が心は　かつは悶えかつ快を覚ゆ。（七九）

道化　この点ではじゃ、儂の見るところ、あんた様は快適一辺倒におなりでしょうぜ。

王　どんな風にしてか。

道化　聞くところでは本日、ダーリニー妃がカウシキー学尼に言われたげな――「御出家様、そなたは美粧術の心得が御自慢なら、ひとつマーラヴィカーの身に、婚礼衣裳の着付けをして見せてたもれ」――と。そこで尼殿はじゃ、格別に熱上げて、マーラヴィカーを飾り立て

たというぞ。あれなる正妃様にはじゃ、あんた様の望みを、いつかはかなえて下さるはずじゃて。

王　友よ、それもあり得ぬことではないな――この正妃ダーリニーが、余の意向に添うてしてくれた、過去数々の所行を思えば。

門番女　（近寄って）陛下、陛下の御盛運を。正妃の言上にござります――「金色無憂樹(アショーカ)の花咲き出ましたる美景を、妾(わらわ)は上様御同席にて、目のあたりしとうございまする」――と。

王　正妃には既に、そちらにお成りなのであろうな。

門番女　さようでございますとも。正妃様には、大奥一同に対し各人の分に応じたお犒(ねぎら)いを賜り、さて、そちらをお出ましになりまして、マーラヴィカーを初めとする御自身の側近ともども、只今は陛下をお待ちもうけでいらっしゃいます。

王　（嬉しげに道化を見やり）ジャヤセーナーよ、先導致せい。

門番女　陛下、こちらへ、こちらへ。

一同、舞台を回る。

道化　（見やって）のう、おぬしや、遊園林の春の風情は、いささか若さが闌(た)けたように見えますな。

王　そなたの申されるごとくぞ。――

目のあたり　春鶏頭(クラヴァカ)の花は散り敷き、マンゴー樹は　たわわなる実の減じ行けば、季節の若やぎ爛熟を迎え　哀愁に心を切なからしむ。　（八〇）

道化　のう、あれに金色無憂樹(アショーカ)が、一面の花房で、満艦飾に盛装したようじゃ。御覧なされ、あんた様。

王　むべなるかなよ、この無憂樹(アショーカ)が花付けるを渋っておったのも――今に及んで、これこの通り、他に類(たぐ)いなき美を弥増(いやま)しにするとあれば。見られい――

先立ちて春の栄えを顕示せる　なべて無憂樹(アショーカ)の花蕾は、　今ぞ「足蹴の儀(ドーハダ)」をばおえたりし　この一本(ひともと)に移れるがごと。　（八一）

道化　のう、もう安心しても良かろうぞ。こちとらがこの通りやって来てるのに、ダーリニー妃はマーラヴィカーが側近に侍(はべ)るのをお許しじゃもの。

王　（嬉しげに）見よや、友よ、あれ見られい。――

それがし迎えて　あれに正妃は　品良く起立し給うぞ、愛しき姫に侍(かしず)かれつつ――妃を大地に喩(たと)えんか。これに侍く姫こそは　手に蓮とるを忘れてあれど　王の栄えを具現せる吉祥天女(ラクシュミー)かとぞ見ゆ。　（八二）

正妃ダーリニー、マーラヴィカー、遊行尼、登場。および供奉衆、身分に応じて位置。

マーラヴィカー　（独白）晴着の美粧が何ゆえかは察しがついても、やっぱり私の心は、蓮の葉に

乗った水玉のように揺れ震えるわ。それに、左眼がしきりにぴくつく。

道化　のう、おぬしや、婚礼衣裳で一際と引き立ってますがな、これなるマーラヴィカー姫は。

王　見まいでか、姫はあれに――

裳裾の垂れよう程々の　白絹衣を身に纏い　装身具とて控え目なれば、余には映ず――卯
月の夜に　月明昇らんとするの頃、靄去りし星数まばらの風情とぞ。　（八三）

正妃　（近寄って）上様、上様の御盛運を。

道化　弥栄えませい、奥方にゃ。

遊行尼　御勝利ありませ、陛下には。

王　御出家、それがし御挨拶つかまつる。

遊行尼　御所存の成就ありまするよう。

正妃　（微笑して）上様、妾らはこれなる無憂樹をば、御身が手弱女連を語ろうて逢瀬を忍ばれる館たるべく、按配致しておりまする。

道化　のう、お前さんは、御厚情が身に染みようぞ。

王　（恥じろうて、無憂樹の周囲を回る）――

もとよりこれなる無憂樹は、かくまでの栄誉さまざまを　妃より賜る資格あり――陽春精
女の御命には　取り合う色なき不遜ぶり、しかるをそなたの御尽瘁には　花もて敬意を表

す木なれば。

道化　のう、もう心おきなくじゃ、若さ溢れる――あれを見なされ。　（八四）

正妃　何をですって。

道化　金色無憂樹の花の美を、ですがな。

一同、着座。

王　（マーラヴィカーを見やり、独白）辛いかなよ、同席にして離別とは。――

「車輪」を名とする　鴛鴦の、余は雄鳥のごと、余が愛人は　さながら連れ添う妻鳥
ぞ。　我らの交わりを許さざれば、ダーリニー妃は　（鳥の雌雄を隔つ）夜陰のごときか。　（八五）

執事　（登場）陛下の御盛運を。宰相よりの言上にござる――「ヴィダルバ国主よりのかの朝貢品の内に、技芸職の女子二名がござりましたが、旅路の疲れはなはだしく身体軽快ならずと察しまして、両名には参内を差し止めて参りました。只今は陛下にお目通りも苦しからぬようになりおりまするが、つきまして陛下の御指示を賜りとうござる」――と。

王　両女を通すと致せ。

執事　陛下の御命のごとく。（退場の後、両女とともに登場）御両女、こちらへ、こちらへ。

女甲　（傍白）ねえ、ラマニーカーさん、ここの王宮は初めてなのに、私は参内する道々、胸の

奥底で心が和(なご)むのよ。

女乙　ジョーツニカーさん、私もそうなの。世の諺(ことわざ)に言うわね――「来たらんとするが吉か凶かは、胸中の具合が占う」――と。

女甲　というのが今、本当であってほしいわ。

執事　あれに陛下が、正妃ともども坐(おわ)しますぞ。御両女、参進なされよ。

両女、近寄る。マーラヴィカーと遊行尼、侍女両名を認めて顔を見合わす。

両女　（平伏して）殿、殿様の御盛運を。奥方、奥方様の御盛運を。

王　よくぞ参った。こなたに座すると致せ。

両女、王の命に従い、着座。

王　そなたら両名は、いずれの技芸に練達かな。

両女　殿様、歌舞の奥儀を究めおりまする。

王　妃よ、両女のうち、いずれか一名をお取りあれ。

正妃　マーラヴィカーや、ちょいと。見て御覧、そちには歌舞の朋輩として、どちらの子がお気に召すかえ。

両女　（マーラヴィカーを見て）おやまあ、姫様、姫様の御盛運を。（平伏して、マーラヴィカーともども、落涙）

一同、その様を見やる。

王　そなたら両名は何者じゃ、してこなたは何なのか。

女甲　私どもの姫様でいらっしゃいます。

王　いかがな次第でか。

両女　殿様、お聞き下さいませ。殿には征討の師を派してヴィダルバ侯を打ち拉(ひし)ぎ、彼の獄舎からマーダヴァセーナなる公子を御釈放に相成りました。その公子の、これなるは妹君にましまして、名をマーラヴィカーと申されまする。

正妃　何と、この子は王族の娘であったか。まこと妾(わらわ)といえば、白檀(びゃくだん)材を履物(はきもの)にという、凌辱沙汰をしでかしたわ。

王　ところで、これなる姫君には、いかがしてかような境遇とはなられたのか。

マーラヴィカー　（ため息ついて、独白）運命の定めでだわ。

女乙　殿様、マーダヴァセーナ公子が縁者（ヴィダルバ国主）の虜囚となられますや、公子の御家老スマティ様は、我ら供奉衆は後に残し、この姫様を秘かに国外へ連れ出されたのでございます。

王　かねて聞き及ぶところぞ、そのことは。して、それから。

女乙　殿様、それ以上は私ども存じませぬ。

遊行尼　その先は、運勢拙き妾が申し上げましょう。

両女　姫様、お声の調子はカウシキー様のようでございますが。

マーラヴィカー　当の御本人じゃないこと。

両女　行者の装いをしておいでゆえ、とてもカウシキー様とは思われませぬ。御出家様、跪拝し奉ります。

遊行尼　幸ありませ、御両女に。

王　何と、これなるは御出家に昵懇の者どもか。

遊行尼　さようにござります。

道化　さらば、今度は御出家がじゃ、ここな姫御の一部始終を、余すところなく話すとせい。

遊行尼　（悄然として）先ずはお聞き下さりますよう。——マーダヴァセーナの家老スマティこそは、妾の兄者人とお心得あれ。

王　了解した。して、それから。

遊行尼　御兄君（マーダヴァセーナ公子）の上にかの（虜囚の）悲運を見られましたるこの姫君を、兄者人（家老スマティ）は妾ともども連れ出し奉り、貴殿と誼みを結ぶべく意図して、ヴィディシャーに向かう隊商の一行に加わりました。

王　して、それから。

遊行尼　旅程の中途にて、商人連は幕舎を張ったのでございます。

王　他にどうなった、と仰せなのか。

遊行尼　すると、でございます——
箙の締紐　胸許を覆い、孔雀の尾羽　踵まで　垂れんとするを　身に帯びて、弓を手にし
て鬨の声あげ、殺到すれば抗すに難き　一隊の山賊　現われ出たり。（六六）

マーラヴィカー、畏怖の所作。

道化　姫御や、恐がるでないぞ。御出家の言うのは、とっくにすんだ話じゃて。

王　して、それから。

遊行尼　そこで隊商側の兵士らは、山賊としばし交戦に及びましたが、終には総崩れとなりましてござります。

王　御出家、もうその先は、何とも聞くに忍びぬぞよ。

遊行尼　そのとき妾が同胞は——
敵手の凌辱に怯えある　姫を危急より救わんとて、忠君一途、かけがえのなき　身命投じ
て主恩に報えり。（六七）

女甲　やれ悲しや、スマティ御最期かよ。

女乙　なればこそよ、姫様には、只今の身分とはなられましたか。

遊行尼、涙をぬぐう。

王　御出家、身命賭する武者の、さこそは世の習いにござる。御愁嘆には当らぬぞ――お兄上は、主君に受けたる俸禄を、実りあらしめられし次第なれば。

遊行尼　そこで妾は気を失いました。意識を取り戻しましたるところが、この姫の姿は見えなくなっておりました。

王　まこと御出家には、多大の辛酸を嘗められたことよ。

遊行尼　そこで兄の遺体を荼毘に付しましたが、以後幾度か傷心を新たに致しつつ、妾は当国に辿り着いて、黄衣一双を纏う身とはあいなりました。

王　これぞ世の心ある人士には、さもありぬべき途にてござるわ。

遊行尼　これなる姫はと申しまするに、山窩どもから〔貴方の司令官〕ヴィーラセーナ殿へ、ヴィーラセーナ殿から〔姉上〕正妃様へ、と渡っておりました。正妃の館に妾が参内を許されましたところ、姫をお見かけした――というのが話の結びにござります。

マーラヴィカー　（独白）殿様は一体、どうおっしゃるかしら。

王　おお、災厄は屈辱をもたらすものかな。何ゆえというに――

正妃の称をも受けるべき　これなる清き姫君が　下働きに使われるとは、　白絹衣が浴み
着の　用に充当されるがごときを。（六八）

正妃　御出家様、そなたはマーラヴィカーが名門の出であることをおっしゃらぬなど、理不尽なお仕打ちでしたぞえ。

遊行尼　めっそうもございませぬ。わけあればこそ妾は、非情一途に致したのでございます。

正妃　どのようなこと、そのわけとやらは。

遊行尼　この姫君につきましては、父君なお御在世のみぎり、神輿巡行の祝祭時にやって来ては運勢占いをなさる、とある修験者が妾の列席します前で予言されたのでございます――「この子は、一年限り奴婢の境涯を嘗めた後、似合いの夫に到り着くことであろう」――と。この必ず適中するはずの予言は、姫がそなたの足下に奉仕さるることを通じて、次第にその機が熟し行くものと察しましたれば、妾はひたすらその時の到来を待つにとどめて参ったのでございますが、それこそ適切な仕儀であったと心得まする。

王　いかにももっともぞよ、素知らぬ顔にてすまされたるは。

執事　陛下、余談に申しそびれましたる件にござるが、宰相の言上には――「ヴィダルバ国に関する施策は閣議にて審理完了致したるも、先ずは拙者、陛下の御意向を承りたく存ずる」――との由にござります。

王　マウドガリャよ、余は、かの地なるヤジュニャセーナ、マーダヴァセーナの御両所を首班とする、両頭連立王国を設立したき所存ぞよ。――

両名箇別にヴァラダー河の　北岸・南岸を統治すべし、　光芒の熱きと冷きと　日月両者
の併立し　昼夜を分かち統ぶるがごとく。（八九）

執事　陛下、それがしはこの旨を、閣議に伝達つかまつりまする。

王、指にて同意の合図。侍従、退場。

女甲　（傍白）あな嬉しや、姫様、お兄君が半国の王位に就かれますとは。

マーラヴィカー　兄上が生命の危険をお免かれになった、それだけで結構なこととせねばなりませぬわ。

執事　（再び登場）御勝利ありませ、陛下には。宰相の言上にござります――「さすがに卓抜の叡慮なるかな、閣議も正に同意見にござりました。――

二分されたる権勢を　両者それぞれに担いて行かば、　軛を分かち持つ輓馬両頭の　馭者
に対すると同様に、　君なる覇王の御統御に　服し留まることならん――互いに攻め合う
も異変とてなく。」（九〇）

王　しからば閣議に申し伝えよ――「この旨の実施かたを、司令官ヴィーラセーナに伝達すべし」――と。

執事　陛下の御命のごとく。（退場。進物を添えた書状を手に、再び登場）主命果してござる。さて、これなるは、大御所プシュヤミトラ陛下の御許より、進物を添えし玉翰の届きましたる次第。

陛下には、親しく御披見遊ばしますよう。

王、起立してうやうやしく進物を頂き、書状ともども供奉衆に手渡す。供奉衆、所作あって書状を開封する。

正妃　あらまあ、そちらの方にばかり、妾の心は向かいますわ。お舅様の御息災に引き続き、我が子ヴァスミトラの消息が先ずは聞かれましょうぞ。そもそも大御所様には、あの子を過分の大任におつけになったことでもあれば。

王　（着座して読み上げる）――「幸あれ。祝勝祭儀の場より、大将軍プシュヤミトラは、ヴィディシャーに在留の我が子アグニミトラ殿下を情愛こめて掻き抱きたる後、訓示に及ぶところあり。知悉ありたし――王者施行の祭儀に潔斎をおえし余は、ヴァスミトラの身辺に王族子弟百名を配して、彼を神馬警護者に指名し、向こう一年間にわたり自由行動を取らせるべく神馬を解き放ちたり。同馬はインダス南岸の堤を遊弋する間、騎馬の一隊に襲撃を受け、かくて両軍の大衝突とはなれり……」

正妃、傷心の所作あり。

王　何と、さような状況にあいなったか。（再び読み上げる）――

「時に剛弓の持主ヴァスミトラは　仇なす輩を打ち拉ぎ、　あわや強奪されんとすとき　余
が随一の駿馬を取り戻したり……」（九一）

正妃　これで息がつけました、妾の胸は。

王　（書状の残りを読み上げる）――「今や余は、往昔サガラ王の孫アンシュマットに負いしがごとく、孫の手により神馬を回収し得て、近く〔「馬祠」の大〕祭儀を営まんとしあり。さらば今、即刻、御身には旧怨を心より去りて、妻女ら同伴にて来たり祭儀に臨場あれ」――と。有り難き仕合わせぞよ。

遊行尼　あな嬉し、御子息の勝利に、御夫妻の栄えの弥増しますること。（正妃に対して）――

先にそなたを御夫君は　栄えある「勇者の妻」どもの　首位の座に付け給いしが、今このたびは和子様より「勇者の母」なる称号の　そなたがもとに参れりとかや。（六二）

正妃　御出家様、あの子が父親に似まして、妾は本当に嬉しゅうございます。

王　マウドガリャよ、仔象が象群の首領を真似た次第であろうか。

執事　陛下、この若君には――

勇武の発揮のかくありとても、我らが心に驚きを　もたらし給うこととてなし。けだし和子には御身てふ　高貴・不可侵の起源あり――水をしも焼く海底の火に、母の腿裂き生れ出し　アウルヴァ仙てふ起源あるごと。（六三）

王　マウドガリャよ、〔ヴィダルバ侯〕ヤジュニャセーナの義兄をも込めて、獄舎に抑留中の者すべてを釈放致せ。

執事　陛下の御命のごとく。（退場）

正妃　ジャヤセーナーや、メーラカー女御を初め大奥一同に、和子の消息を知らせてたもれ。

門番女　かしこまりました。（立ち去りかける）

正妃　ちょっと、お待ち。

門番女　（振り返って）御用にございますか。

正妃　（傍白）イラーヴァティー女御にはね、無憂樹の「足蹴の儀」を仰せつける折、妾がマーラヴィカーにした約束のことと、マーラヴィカーが名門の出であることとを伝えた上で、妾の口からの言葉として――「そなたのせいで、この約束が反古になったりはしませぬように」――と愁訴しておくれ。

門番女　正妃様の御命のごとく。（退場の後、再び登場）奥方様、和子の御勝利のことで大奥御一同は大喜び、御祝儀にと身飾りを下さるものですから、私はまるで装身具箱になってしまいました。

正妃　不思議でもない、妾ども一同に共通の栄えなのだから。

門番女　（傍白）奥方様、イラーヴァティー女御の申されますには――「正妃の権限を帯び給う御身には、至当の仰せ出で。いったん仰せ出されました初一念は、お違えになってはなりませぬ」――と。

正妃　御出家様、上様にマーラヴィカー姫を献上するという、（亡き御身の兄者人）スマティ殿の宿志は、そなたも同意であってほしゅう存じますが。

遊行尼　現在とても、御身があの子の御主人たるは変らず、されば彼女の身柄は御自由になさりませ。

正妃　（マーラヴィカーの手を取り）吉報をお聞かせ下さいました好箇の御礼の品とて、上様にはこれを御受納下さいますよう。

王、恥じろう所作あり。

正妃　（微笑して）お取り合い下さいませんの、上様には。

道化　ありゃまあ、人情を喰い物にする手合いが、やたらと恥ずかしがっているわいな。

王、道化を見つめる。

道化　いやさ、それとも、これなる殿は——正妃が自ら正妃の称を授けたら、そこでマーラヴィカーを受け取ってやる——とでもおっしゃるのかいな。

正妃　この子は公女ですもの、生れからして正妃の称は備わってますとも。繰り返して二度は要らぬわ。

遊行尼　などとは申されますな。——

我らが秘蔵の宝石は　宝石由来の保証書が　付いて初めて、気高き方よ、台座に嵌まって純金と　結ぶ資格を帯びまする。（九四）

正妃　御出家様、悪くは取って下さいますな。先刻は和子の栄えの話に惹かれ、つい思い到りませんでした。ジャヤセーナーよ、ひと走り行って白絹地を取っておいで。

門番女　奥方の御命のごとく。（退場の後、白絹を持って登場）正妃様、これにございます。

正妃　（マーラヴィカーに被衣をかけて）上様、はい、お待ち兼ねのもの。

王　身共の心の靡きあるは、そこもとの御下知に対してぞよ。（傍白）ああ到頭、手に入ったか。

道化　おやまあ、正妃の有り難き思し召しよ。

正妃、供奉衆一同を見据える。

供奉衆一同　（マーラヴィカーに近寄り）奥方、奥方様の御盛運を。

正妃、しげしげと遊行尼を見る。

遊行尼　正妃よ、このこと不思議ございませぬ、そなたには。——

主人思いの優妻たちは　恋仇をば受け入れてまで　夫に仕うるを旨とするもの——海に注ぐ大河は　他の川々の水までも　運び大洋に到らしむるを。（九五）

ニプニカー　（登場）殿、殿様の御盛運を。イラーヴァティー女御の言上には——「妾はあのとき儀礼に悖り殿に不埒を働きましたが、それも妾と致しましては、殿のお仕打ちに逐一見合った仕方で振舞うた次第でございます。殿には只今、宿願成就とはなられました。妾に対しま

しては、せめて御勘気解消の栄なりとをかたじけなく致しますよう」——との由にございます。

正妃　ニプニカーや、女御に申し上げてたもれ——「上様には、そなたの奉仕ぶりを、必ずやお認めになりましょうぞ」——と。

ニプニカー　有り難き仕合わせにございます。（退場）

遊行尼　陛下、御身との修好という兼ねての件では、今や宿願成就となりましたるマーダヴァセーナ公子と、妾は御身の御命によって再会を遂げ、もって目の果報を実現致したく存じまする。

正妃　御出家様、妾どもをお見捨てになっては困りますぞえ。

王　御出家、かの公子に宛てたる身共の書状中に、そこもとの辞と明記して、敬意表白の一句を添えさせると致そうぞ。

遊行尼　お二方の御愛顧のゆえに、これなる尼風情、この上は勝手を申せませぬ。

正妃　上様、仰せ下さいませ——この上とも妾、そなたに嬉しいこととて、何をして進ぜましょうか。

王　余に嬉しきこととて、差し当っては次のことのみぞ。——

怒りん坊の正妃殿、そこもと常に余に対し　明鏡止水の御心境もて　玉顔麗しく坐しませ

——そなたの恋仇あるにつけ、これだけは余　求めてやまず。民草の上に願わしき　悪

疫退散その他の幸は、アグニミトラの庇護ある限り　自ずと成らずに措くまじければ。（六六）

全員退場、第五幕終る。全篇終幕。

武勲(王)（ヴィクラマ）に契られし天女ウルヴァシー

登場人物　（男女別・登場順）

座頭
小頭
王プルーラヴァス　主人公。
馭者　戦陣間の王の副官。
天上楽人（ガンダルヴァ）チトララタ
道化マーナヴァカ　王の腹心。
吟頌詩人
神々の使者
バラタ仙の弟子甲ガーラヴァ
同右弟子乙パッラヴァ
執事ラータヴィヤ　後宮監督をも司る老人。
王の供奉衆
童子アーユス　ウルヴァシーの隠し子。
ナーラダ仙

天女衆
天女ランバー
同メーナカー
同サハジャニャー
同チトラレーカー　ウルヴァシーの親友。
同ウルヴァシー　女主人公——王の寵姫となるも一時失踪。
ニプニカー　正妃腹心の侍女。
正妃　カーシー国王の娘。
正妃の供奉衆
山窩女（キラータ）　王の払子（ほっす）係。
希臘女（ヤヴァナ）　王の武具係。
修験女サティヤヴァティー　ウルヴァシーの旧知。

第一幕

座頭 ヴェーダの究極をなす(ウパニシャッド)諸書にては、彼をしも叙して、天地を遍充し在る唯一者「原人《プルシャ》」と述べ―― 「主 神《イーシュヴァラ》」なる称号は、語音まさに字義どおり(能《よ》く統《す》ぶる者の意)にて彼に妥当、他の何ものをも指すことなく―― 解脱《げだつ》を望む人々は、生気《プラーナ》その他(五種の体風)を調御して、ひたすら心中に彼を追求―― とぞいう彼、熱誠傾け倦《う》まざれば感得するに易き「万古不易者《スターヌ》」、願わくは彼(シヴァ神)の御身らに無上至福をもたらされかし。(一)

祝禱終って。

座頭 (舞台裏を見やり)頭《かしら》よ、ちいとこなたへ。

小頭 (登場)親方、それがしこれに。

座頭 頭よ、御参集の客筋は、従来の詩人連の劇作となると、今までたくさんに御覧じゃわ。で、それがし本日は、『武勲《ヴィクラマ》(王)に契られし天女ウルヴァシー』と題する新作の劇を上演しようぞ。ついては配役の一同に申し付けてくれい、「各自の台詞《せりふ》に思い違いのないようにな」と。

小頭 親方の御下知《げぢ》、かしこまりました。(退場)

座頭 先ずは只今、殿方御一統様に申し上げまする―― 御機嫌奉伺《ほうし》の輩《やから》への お心づかいにてもあれ、いやさ妙《たえ》なる筋・人物を 御嘉納あってならば幸甚、これなるカーリダーサの作品に、心澄まして御清聴のほどを。(二)

(舞台裏に声)殿方ら、お助け、お助け下さいませ。

座頭 (耳傾けて)おや何としたこと、それがしの口上に引き続き、みさごの雌どもが苦しんでいるような声が中空に聞こえるぞ。(思い入れあって)こうっと、分かったわ―― ナラと親しき(一対をなす) 古聖賢(ナーラーヤナ)の 股より生れし天女(ウルヴァシー)が、カイラーサ山主(クベーラ神)に 伺候しての帰るさ、神々の仇敵(妖魔)どもに 途上半ばにて囚《とら》われたるぞ。されば今し天女《アプサラス》の群、かくは悲しげに泣き叫びあり。(三)

座頭退場、序幕終る。

天女一同、登場。

天女一同 殿方ら、お助け、お助け下さいませ。どなたか、神々のお味方―― いいえ、空の面《おも》を

お馳せになれるどなた様か——

緞帳はね上げ車乗の王、馭者ともども登場。

王　お哭き召さるな。それがしプルーラヴァス、日神への伺候より今し帰来せるところぞ。さらば近う寄って語られたい——そも何ものより、御身らをお助け申すべきや、を。

〔天女〕ランバー　魔神の暴威、よりでございます。

王　はて、魔神の暴威が御身らの上に、いかがな不届きに及びたるか。

〔天女〕メーナカー　お聞き下さいませ、大王様。——並外れた苦行を〔修するものあれば、彼の熱力積って我が主権を脅かすかと〕危惧なされますとき、〔苦行者の道心とろかす決め手とて〕天帝インドラ神が御使用のなよやかなる飛道具——容色自慢の吉祥天女をたじろかせ、天界の美を引き立たせる飾りなす——妾らの親友ウルヴァシー〔とは、正にさようの女性でございますが〕、その彼女が財富神のお館から戻って参ります途中で、とある妖魔の手にかかり、〔朋輩〕チトラレーカーともども虜囚の憂き目に会っております る。

王　不埒者めがいずれの方角に去ったかは、お分かりであろうな。

〔天女〕サハジャニャー　北東方へでございます。

王　ならば御傷心は解かれたい。御身らの朋輩衆を連れ戻すべく、それがし努めると致そうぞ。

天女一同　とは誠にもって、月種の王統に生れましたる君に、ふさわしきお計らいにございます。

王　ところで御身らには、それがしをいずこにてお待ち下されようか。

天女一同　ここ、黄金峰の頂きにて、と致しましょう。

王　馭者よ、北東方位に向け、歩度早めるよう馬どもを駆り立てい。

馭者　陛下の御命、かしこまって候。(指示のごとくにする)

王　(車の速度を精査しつつ)結構結構、今の車の速さなら、一足先き〔救助〕に飛び立った鳥王ガルダにさえ、それがし能く追いつけようぞ。寛仁の君〔インドラ〕に仇なす彼奴なんぞには、言うまでもないわ。というも、我が方たるや——

あれよ戦車の行く手には　密雲千々に砕けつつ　埃のごとく立ちて去り行き、　車輪の回転　輻の間に間に　別な一連の輻を生み出すと見え、　駿馬の頭に大采配　絵に描かれしがごと微動だにせず、　幟りの布は竿先きも　旗尻にても等しなみ　平らに張りて静止せり　——　車勢のもたらす風ゆえに。　(四)

車乗して王、馭者ともども退場。

ランバー　さあ皆さん、指定どおりの場所へ移りましょうよ。

天女一同、岩山に降り立つ所作あって舞台に留まる。

ランバー　あの王仙ならば、私たちの胸に刺さった鏃(やじり)を、きっと引き抜いて下さいましょうね。

メーナカー　あなた、変に疑ったりしては駄目よ。そもそも天帝インドラ神が、合戦近しとなるや、折いって地上界からお招きになり、常勝軍の先陣に部署なさいますのは、決ってあの方じゃありませんか。

ランバー　何はともあれ、勝利を博されますように。

サハジャニャー　（一瞬ふと歩みを止め）まあ皆さん、御安心なさい、御安心なさい。見えましてよ、あそこに、王仙の「月神御下賜(ソーマ・ダッタ)」〔の由緒ある〕戦車が、鹿紋章の軍旗を高々とひるがえして。だってあの方、目的を達してでなければ、ゆめ引き返しては来られますまいに。

一同、視線を上げて打ち眺める。

車乗して王、馭者、さらに、手はチトラレーカーに寄りすがって恐怖に目を閉じウルヴァシー、登場。

王　美女よ、気を確かに、気を確かに。

〔天女〕チトラレーカー　お気を確かに、お気を確かに、愛しの友よ。

王　小心の女性(にょしょう)よ、神々の仇敵〔妖魔〕に由来せる　危険は既に失せたるぞ、金剛杵(ヴァジュラ)に鳴る武
神〔インドラ〕の大御稜威(みいつ)　能く三界を守護し給えば。　さらば、いざ、これなる切れ長の目
を開かれよ——　蓮茎の暁どきに、大輪の蓮華(れんげ)を開くがごとく。　（五）

チトラレーカー　やれ悲しや、生きてる徴(しるし)は喘(あえ)ぐ息づかいしかなく、今もって正気に戻らぬとは。

王　よほど怯えきっておいでじゃ、これなる姫は。と言うも——
これなる女性の心たるや、か弱き組成は花梗に等しく、　このところなお動悸を止めず。
見よや、両乳のはざまに〔刷(は)かれ〕て〔し〕　喘ぎ高まる黄檀膏が、　物語りある動悸のほどを。　（六）

チトラレーカー　ねえ、あなた、しっかりして下さいな。これじゃ、天女ならぬ〔並の女〕かのように見えてよ。

ウルヴァシー、正気づいてくる。

王　やよ、常態に復しあるぞ、御身の朋輩は。
姿態すぐれし美女は今　内に昏迷ほぼ解けたれば〔その様いかにと譬(たと)えんか〕——　月さし
出づれば闇黒を　脱却し行く夜のごと、　煙あらかた打ち絶えし　常夜燈火の光焔のご
と、　堤の潰(つい)えて濁りしも　透明に復し行く恒河(ガンガー)のごと。　（七）

チトラレーカー　友よ、御安心なさい。神々の行く手を阻む無法者どもは、すっかり打ちのめされましたのよ。

ウルヴァシー　(両眼を開き)天帝インドラ様が、御稜威を発揮遊ばしてなの。
チトラレーカー　天帝インドラではなくて、天帝に劣らぬ御威光の、これなる王仙のおかげですわよ。
ウルヴァシー　(王を見やって、独白)いいことしてくれたわ、妖魔どもが。
王　(常態に復したウルヴァシーを、しげしげと見て、独白)そのかみ天女ら一同、ナーラーヤナ仙を誘惑すべく努むるうちに、こなた——仙の股より生れける息女——を目にするに及んで、たちまち恥じいらざるものはなかりし、と伝うるもむべなるかなよ。いやさ、おもんみるに、これが苦行者流の創出にかかるなどとは、あるべくもない話ぞ。というは——

　これなる女性の創出の儀に　造物主の役を担いしは、光輝を放つ月輪か、色情一途の愛
　神自身か、花を蔵せる春の精か。聖典読誦に感性鈍り、好奇の念は官能に背馳せる、往昔
　の聖賢(ナーラーヤナ)ごときが、いかで、これなる心とろかす　容色を造るを得んや。(八)

ウルヴァシー　ねえ、あなた、朋輩衆はどこなのかしら。
チトラレーカー　安全を保障し給う大王様が、ご存じですわよ。
王　(ウルヴァシーを見やりつつ)ひどく切なげな様におわす。——姫よ、御覧ぜられたい。

　たまさかにただ一度にはあれど、美女よ、視野に御身を留めたれば　眼も今や空しから
　ずとなん男——　彼とても御身失せなば、焦心絶え絶えとはならんものを。ましていわ

　んや言うもさらなり、友情しっとりと乾く間もなき　御身が朋輩衆におかれては。(九)

ウルヴァシー　(〔チトラレーカーに、〕傍白)品の良いこと、こなたの仰せは。いやさ、何の不思議がありましょう、月から甘露がしたたるとて。(声に出して)なればこそ、そを目にすべく妾の心は逸ります。
王　(手で指し示しつつ)

　体軀すぐれたる女性よ、あれに御身の朋輩衆は、黄金峰に寄り集い　御身の顔を見やりあ
　り　——蝕を脱せし月輪のごと、災厄まぬかれ清澄の　今ぞ立ち戻りたる顔を。(10)

チトラレーカー　まあ、あなた、御覧なさい。
ウルヴァシー　(慕わしげに王を見つつ)悩みも等しく、両の目で妾を呑みつくそうとする風情。
チトラレーカー　(かまをかけて)あら、どなたが。
ウルヴァシー　朋輩衆がよ。
ランバー　(嬉しげに)そら、王仙が近寄って見えたわ、チトラレーカーともどもウルヴァシーをお連れになって——(春の盛りに)お月様がヴィシャーカー星宿に寄り添われるかのよう。
メーナカー　(しげしげと見て)双つながら成りましてよ、私たちに嬉しいことが——そら、朋輩は連れ戻されたし、そら、大王様にはおつつがもなく。

サハジャニャー　ほんにおっしゃるとおりよ、破るに難きが妖魔らですもの。

王　馭者よ、件(くだん)の山頂に参ったぞ、車を降下せよ。

馭者　陛下の御命、かしこまって候。（指示のごとくにする）

王　（車輪の衝撃を示す所作あって、独白）やや、手荒な着地が、それがしに果報をもたらしたぞ。

けだし車の揺れたれば、　これ見よ、拙者の肩先は、　いさらい円きは車輪のごとき　美女の肩先に触れられたり――　〔シヴァ神に焼かれ灰と化したる〕　愛樹(カーマ)が新芽を息吹(いぶ)くかのごと　膚毛立つ異変を見せて。（一）

ウルヴァシー　（恥じろうて）ねえちょっと、向こうに身体をずらしてったら。

チトラレーカー　（薄笑いして）そうは行きませんよ、私は。

ランバー　おいで、皆さん、王仙に表敬いたしましょうよ。（天女一同、近寄る）

王　馭者よ、車を止めい――

焦心に気も絶え絶えの　眉うるわしき美女が今し、　焦心しきりの朋輩衆と――　陽春の美が蔓草(つるくさ)とのごと――　再び合一の幸を得るまで。（二）

馭者、件のごとくする。

天女一同　大王様には戦勝をもって一段の御盛運、おめでとうございます。

王　御身らにても、朋輩との会同あって大慶。

ウルヴァシー　（チトラレーカーに手を托しつつ、車より降り立ち）おいで、皆さん、ひしと私を抱いてちょうだい。朋輩衆に再会しようなどとは、私、夢にも望めなかったわ。

天女一同、急ぎ寄って抱擁。

ランバー　何はともあれ大王様には、百劫の久しきにわたり、大地を守護しましますよう。

馭者　陛下、東の方角に非常な車勢が響きを立ててござる。

してまた中空より何人か、　精錬純金の腕輪したるは　稲妻はらめる雨雲のごと、　今し山頂に降りて候。（三）

天女一同　おやまあ、チトララタ殿だわ。

〔天上楽人〕チトララタ、登場。

チトララタ　（王に面して立ち）天帝インドラを輔翼するに足る武辺宏大(ヴィクラマ)をもって、貴殿には一段の御盛運、大慶にござる。

王　やよ、天上楽人(ガンダルヴァ)の王者がお成りか。親しき友よ、よくぞ参られた。

両者、手を触り合う。

チトララタ　僚友よ、ウルヴァシーがケーシンめにさらわれし旨をナーラダ仙より聞こし召すや、百大祭の主神〔インドラ〕におかせられては、天上楽人の軍勢に天女奪還を下命し給うた。して途上にて我らは、吟遊詩人らの口から御身にかかる祝勝頌詞を聞きつけたれば、ここなる御身に目通りせんと参った次第ぞ。さらば貴殿には、これなる女性を奉じて、我らともども寛仁の君〔インドラ〕に謁見するとなされたい。まことや貴殿は、かの尊き寛仁の君の非常な喜びとされるところを、果されしことかな。御覧あれ――

往昔ナーラーヤナ仙が　嵐神群の統領〔インドラ〕に　捧げまつりしこれなる天女、こたびは貴殿なる盟友が　妖魔の手より奪回し　奉還の儀に及ばんとすとは。（一四）

王　などとは申されるな。お味方をなす者どもが　仇なす輩を打ち破るとて、そもこの金剛杵に鳴る　首領〔インドラ〕その方の武威にあらずや。　獅子吼のこだまだに山間の　岩屋に遍く延び行けば、能く象群を打ち拉ぐなり。（一五）

チトララタ　ごもっともの次第。げに高ぶりなきこそ、勇武際立たす錦上の花なれば。

王　只今は拙者、百大祭の主神〔インドラ〕に謁見の折にはござらぬ。これなる姫は、御身が代わって天帝の許にお届け下されよ。

チトララタ　貴殿の御意向、かしこまってござる。いざや姫がた、こちらへ、こちらへ。

天女一同、出立。

ウルヴァシー　（〔チトラレーカーに〕傍白）ねえ、チトラレーカーや、王仙は恩人なのに、自分では私、お暇言上が出来ないの。で、そなたが私の口になってちょうだい。

チトラレーカー　（〔王に、〕傍白）大王様、ウルヴァシーが申し上げますには――「大王様のお許しを得て妾は、大王様の御声誉を、いわば妾の親しき友としまして、天帝インドラの世界にお連れ致したく存じます」――と。

王　いざ立たれい、またお会いしましょうぞ。

天女一同、天上楽人ともども、中空に飛び立つ所作あり。

ウルヴァシー　（飛昇中断の所作あって）まあ大変、蔓草の小枝に引っ懸ってしまった、私の長い真珠の首飾りが。（ふり返って）チトラレーカーや、ちょっとこれ解いてちょうだい。

チトラレーカー　（薄笑いして）きつく引っ懸ったものだわ。私には解くのは骨と見える。ようし、一つ頑張ってみましょう。

ウルヴァシー　とまれ御自身のその言葉、忘れないでいて下さいね。

チトラレーカー、所作あって解き外す。

王　（独白）

これなる女性の足どりに　束の間の妨げ仕向けつつ、そなたは、蔓草よ、それがしに

嬉しいことを仕向けられしか。というは、それがし今し方、重ねて彼女を目にしたるなり—— そも、顔(かんばせ)を半ば巡(めぐ)らせ 秋波(ながしめ)走らす様なるを。 （一六）

馭者 陛下、

あれよあれ、 風神(ヴァーユ)の加護を帯びしとなん 御身の名だたる飛道具、神々の首領(おさ)〔インドラ〕に不埒(ふらち)なす 妖魔の輩(やから)を、塩水の 集(つど)える大海に投げ込みて後、戻りて御身が箙(えびら)に入れり—— 大蛇の洞穴に復帰せるごと。 （一七）

王 さらば車を近う寄せよ、それがし乗ろうほどに。

馭者、件(くだん)のごとくする。王、所作あって乗車。ウルヴァシー、王を見つめつつため息をつき、朋輩〔チトラレーカー〕ともども退場。チトララタも退場。

王 （ウルヴァシーの行く手を仰ぎ見つつ）ああ、我が恋は、得難きを望むことかな。

〔三歩もて三界を踏破せしてふ〕 生みの父〔ナーラーヤナ＝ヴィシュヌ〕の 中歩の域〔たる中空〕を 飛び立ちて昇り行く途次、 やよ、かの天女は力ずく 余が心をば身より引き去る—— 〔中空に昇りつつ〕白鳥の女王、一端の 喰いちぎられし蓮の根より 蓮糸を引き去るごとく。 （一八）

全員、退場。

第二幕

道化〔マーナヴァカ〕 （登場）やれやれよ、わしゃ何ともはち切れそう——およばれの馳走に喉元つまった婆羅門(ブラーフマナ)さながら、こちとらは王の秘密がつかえて——、人ごみの所じゃ己が舌を抑えかねるわ。じゃによって、かの貴き相棒殿が政所(まんどころ)の座から立たれるまで、人影まばらなこのあたり、天車閣宮殿(ヴィマーナ・ウットサンガ)のほとりで待つとしよう。（舞台を回り、止まって立つ）

腰元〔ニプニカー〕 （登場）カーシー国王の息女にまします正妃様の仰せには——「これ、ニプニカーや、尊き日神に伺候して戻られてからというもの、夫(せ)の君には何か放心の御様子とお見かけする。ついては、さしあたって、殿の側近マーナヴァカ先生から、御焦心の原因を聞き出しておくれ」——と。さて私、一体どうすれば、似非(えせ)婆羅門(ブラーフマナ)めを出し抜けるかしら。いやさ〔案ずるまでもない〕、まばらな草っ葉の先にとまった露玉同然、およそ奴めのもとでは、秘密が久しく留まることはないわよ。とにかく奴めを探すとしよう。（舞台を回り、見やって）おや、あれに、絵の中の猿公(えてこう)みたいな、妙に黙りこくって、マーナヴァカ先生がいらっしゃる。近う寄るとしよう。（近づいて）先生、御機嫌よろしゅう。

道化　貴女に清祥あらんことを。（独白）この腰元女郎めを見ると、王の秘密の一件が、心臓を突き破って飛び出すがな。（声に出して）ニプニカーよ、今時分は音曲の方のお役目があろうに、それを打っちゃってどちらにお出かけかな。

ニプニカー　正妃様のお言葉を体して、他ならぬ先生御自身にお目にかかるべく罷り出ました。

道化　何と仰せじゃ、かの貴き奥方様には。

ニプニカー　正妃様の申されますに——「いつとても妾にお力添え下さる先生なれば、妾が常ならぬ心痛に苦しむのを、見過ごしにはなさらぬ」——と。

道化　はて、ニプニカーよ、かの貴き奥方様に対し何か怪しからぬ儀を、相棒めが仕出かしたというのか。

ニプニカー　御主君におかせられては、御焦心の因となっている女子の名でもって、〔うっかり〕正妃様に呼びかけてしまわれましたの。

道化　（独白）何ちゅうことじゃ。かの貴き御方、自分から秘密暴露に及ばれたとは。こちらとて今さら、舌を抑えて辛い目することあるものか。（声に出して）なに、かの貴き奥方様に呼びかけて「ウルヴァシー」だと。彼女を目にして気が狂い、かの貴き御方様はとことん人悩ませなさるわ、かの貴き奥方様にばかりか——慰みごとに気乗りせずとて、こちらにまでよ。

ニプニカー　（独白）突破口を穿ったわ、私たち、御主君の秘密堡塁に。（声に出して）さしあたり、先生、正妃様には何とお伝えしましょうか。

道化　ニプニカーよ、かの貴き奥方に言上してたもれ——「先ずは拙者、相棒殿を蜃気楼から立ち戻らすべくあい努め、しかる後に正妃へ拝眉と致そう」——と。

ニプニカー　先生の仰せ、かしこまりました。（退場）

舞台裏に声。

吟頌詩人　——

世界の涯に到るまで、あれなる民草・生類の上に　闇質・夜暗の作動を排す——　御身
と太陽の職掌は、恪勤かく相等しと余ら覚えたり。　星辰の首長〔太陽〕が歩み止むるは、
蒼穹のさなかに〔正午〕一瞬時のみ、——御身とて気随におわしますは、〔八限、各九十分の
日課定まれる〕昼間〔唯一〕の〔自由時間〕第六限においてのみ。

道化　（耳傾けて）さあ相棒殿は、政所の座から立ち上がって、一路こなたにおいでじゃ。先ずは彼の傍に侍るとしようぞ。

道化退場、間幕終る。

鶴首悶々の王、道化と登場。

王　――

一目見し日よりこのかた、かの天界の美女　余が胸に入りこみてあり――　鰐鮫を旗幟に描ける　愛神の必中の矢に、通路の穿たれてし胸中に。　(二)

道化　(独白)何せこりゃ、お煩いも大変じゃて、哀れ〔正妃〕カーシー王女におかれては。

王　托した秘密を守る段に、そなた遺漏あるまいな。

道化　(憮然として独白)出し抜かれたか、わしゃ下女風情に。でなきゃ相棒殿が、こんな問いをすることないに。

王　何じゃ、そなた黙りこくって。

道化　こうまで舌を抑えてるんじゃが、こちとらは――そなたにでさえ迂闊に返事はしまい、というくらいに。

王　ごもっともと致そう。さて今、それがし、いずこに参れば気晴らしが出来ようか。

道化　大膳所に参りましょうぜ。

王　なぜまた台所なんぞへ。

道化　あそこで五種の喰い物が、材料一式ととのうて、さて味付けよというところを見てましたら、待遠しさは紛らして行けますがな。

王　かしこにて、そなたは、望みのものが至近とて心楽しかろうぞ。余はといえば、得難きを

求むる己が心を、いかで紛らし得ようか。

道化　そなたったら、かの貴き天女ウルヴァシーの、お目にとまったというのでしょうが。

王　であれば、どうだと申すのか。

道化　ならば彼女は得難うはない、とわしゃ推測しますのじゃ。

王　とは贔屓の引き倒し、に他ならずと固く心得よ。

道化　こちとらにゃ好奇の念が、こんな具合につのるんですが――かの貴きウルヴァシーとやらは容色にかけて、このわしが不器量にかけてと同じくらいに、無二無類なのですかいな。

王　マーナヴァカよ、身体部位の個々については描写およそ不可能、と彼女をば心得られよ。全般要約すればじゃ、聞いてくれい。

道化　しかと承りますじゃ。

王　――

友よ、彼女が姿態たるや――　身飾りの〔映え引き立たす〕装飾品、美粧術の〔極めつきなす〕上化粧品、〔「蓮なす顔」にはあらで「彼女が顔なす蓮の花」とこそ言いつべく〕比喩項を〔むしろ正しくは比喩対象に〕転じかねまじき逆比喩項。　(三)

道化　じゃによって、そなたったら天人風の情味をほしがって、〔天滴る雨液しか水は飲まぬという〕チャータカ燕の誓いを立てなさったと。

王　僚友よ、人気(ひとけ)なき所をおいて、絶え絶えの心には他の落ち着き場所なきものを。されば、そなた、遊園林への道を案内されよ。

道化　〔独白〕しようがないな。〔声に出して〕こちらへ、こちらへ、そなた参られませ。〔舞台を回り〕こりゃあ遊園林にうながされて、客人のそなたを出迎えに立ち現れたかのようじゃ――心憎(ダクシナ)しや南(ダクシナ)の風が。

王　〔見やって〕うってつけの属詞よ〔ダクシナとは〕、今し吹く風に対して。と申すは、この風たるや――

〔瑞々(みずみず)しき〕春咲き草(マーダヴィー)には蜜したたらせ、〔闌(た)けし〕冬咲き素馨(カウンディー)の蔓草を　あれ、舞踏にと誘いつつ、艶(つや)めきと心憎さ(ダークシニャ)を　併せ一身に体してあれば、まこと色男とは余に映ずなり。(四)

道化　正にこうでなけりゃならんわ、〔若いのと闌けたのとを控えて〕お前さんの御執心も。〔舞台を回る所作あって〕さあ、遊園林の入口ですぜ。そなた、おはいりなされ。

王　そちが先にはいれ。

両者、〔遊園林に〕入る。

王　〔前方を見やり〕僚友よ、余は推測を誤りしぞ――苦難への処方は遊園林へ入ることなり、などと。

焦心を鎮静すべく　余が急ぎ　遊園に入らんとするは、　人の河勢に押し流されつつ　なお水流に逆らいて　渡河に懸命の仕儀というべし。(五)

道化　どんな具合でかな。

王　――

得難きものの高望みより　抑止し難きは余がこの心、そを五つ矢の愛神(パンチャ・バーナ)は　従前とても抉(えぐ)りさいなむ。いわんや今においてをや――園林のマンゴー樹が、ほの白き古葉は南国(マラヤ)よりの　恋風にめくられ落ちて失せ、新芽のぞかす春ともあれば。(六)

道化　やたらと歎きなさんな。遠からぬうちにゃ件(くだん)の愛神が、かえってお前さんの伴侶(つれ)になって、望みをかなえて下さろうて。

王　婆羅門殿の〔祝福の〕辞、しかと拝領つかまつったぞ。〔両者、舞台を回る〕

道化　そなた御覧ぜませい、春の到来を告げる遊園林のめでたさを。

王　見まいでか、それがし、樹種の一つ一つに。けだし、ここなる園には――

鶏頭花(クラバカ)は、女の爪の〔マニキュアなせる〕鴇(とき)色を　頭部にて帯び、両側部にては色なお暗し。無憂樹(アショーカ)の蕾(つぼみ)は、紅(くれない)さし昇りて華やぎ、綻(ほころ)びを目睫(まぢか)に控えあり。マンゴーには新たなる花房、花粉わずかに刷(は)き初(そ)めたれば、先端に赤褐色を呈すなり――友よ、春の美〔女神〕は、破瓜(はか)期と妙齢　双つながらの中途に御座(おわ)す。(七)

道化 そら、あそこに春告げ草(アティムクター)の四阿(あずまや)が――水晶石の座板を備え、蜂ども殺到して落花しきりは――、さながら我が手で奉迎の手配をすませ、そなたのおいでを待つ風情じゃ。さらば先ずは、こなた〔の四阿〕に〔お成りの〕寵をつかわされませい。

王 そなたのお気に召すまま。(両者、〔板石に〕座す)

道化 いざ、そなた、これに安座なすって、目はあでやかな蔓草に魅了されつつ、ウルヴァシー恋しやのせつなさを晴らしなされや。

王 (ため息ついて)――

友よ、遊園の蔓草 細枝垂れて花咲くといえど、 それらに自得の境を得ず ――かつて
彼女が容色を見 甘やかされたる余が眼(まなこ)は。 (八)

されば策を考えてくれい、余が悲願成就となり得るように。

道化 (薄笑いして)金剛杵(ヴァジュラ)にても、大インドラ神が〔ゴータマ仙の妻女〕アハリャーに懸想なさる段にゃ――、こちとらとても、そなたがウルヴァシーに気も絶え絶えじゃ――、〔お役に立とうなどとは〕どっちも気狂い沙汰よ、さような件とあっては。

王 際立ちたる情愛はな、なすべき方途を見出さずにはおかぬものぞ。

道化 さあて、考えて見やしょう。だがな、やたら歎いて〔こちとらの〕精神集中を破っては下さるなよ。(沈思の様を演示する)

王 (〔右半身に痙攣の吉〕兆(きざ)が萌すを示唆しつつ、独白)――

満月の顔(かんばせ)なせる彼女 得やすきことはあるまじきに、今し曰(いわ)く言い難き 愛神の作動に
際会とは、 世にも奇(く)しき違いなるかな。 宿願成就が目睫(もくしょう)に 近づきあるかのごとくにて、
心たちまち安堵に到る。 (九)

希望を得たる様にてあり。

ウルヴァシーとチトラレーカー、天翔けりつつ登場。

チトラレーカー ねえ、どこへ行くの、わけも言わないで。

ウルヴァシー あなた、今さらお訊ねになるの――あのとき黄金峰(ヘーマ・クータ)の頂きでは私を、空飛ぶ歩みが蔓草の小枝で一瞬妨げられただけなのに、冷かし笑いなどなさったくせに。

チトラレーカー おや、王仙プルーラヴァス様のもとへ、お出かけだと言うの。

ウルヴァシー 今は私、そう心に決めましたの、恥も外聞もかなぐり捨てて。

チトラレーカー にしても、あなたは、前もって誰を〔使者に〕差し向けられたの。

ウルヴァシー 〔私の熱き〕胸中をですわ。

チトラレーカー もうこれ以上は私、返す言葉とてありません。

ウルヴァシー ならば、あなた、私に道案内してたもれ、行く途に支障が起りなどせぬよう。

チトラレーカー　あなた、安心してらっしゃい。だって〔今は〕私たち、尊き神々の指南番〔ブリハスパティ〕様が「負け知らず（アパラージタ）」という髷（まげ）結びの秘術を御伝授下さって、妖魔が手出しできぬようになってるのじゃありませんか。

ウルヴァシー　あなた、一部始終を私、思い出しましてよ。

天人衆の通い路〔なる低空〕に達して。

チトラレーカー　そら、あそこ――聖なる恒河（ガンガー）の水流はヤムナー河と会して清く、その水面（みずも）〔を鏡〕に己が姿を見つめているような〔のが王都〕プラティスターナ、その〔都に〕いわば挿頭（かざし）の宝珠なす王仙のお館――に私たち近づいて参りましてよ。

ウルヴァシー　〔見やって〕天国が〔地上に〕場所移した、とでも言うべきじゃありませんの。〔思案げに〕ねえ、ところで一体どちらにおいでかしら、窮する者にお情け深い方は。

チトラレーカー　そら、そこ、〔インドラ神の楽園〕歓喜苑林（ナンダナ・ヴァナ）の一隅かと紛（まが）う遊園林、に降り立てば分かりましょうよ。

両女、降り立つ。

チトラレーカー　〔王を見つけて、嬉しげに〕あらまあ、あなた、あそこに、あなたをお待ち受けですわよ――お月様が〔宵闇の中を〕一足先に差し昇って、月光〔姫との会同〕を待たれるかのよう。

ウルヴァシー　〔見やって〕ねえ、あなた、初めてお目にかかった時よりも今の方が、大王様には

一段とみめ美わしい御様子ね。

チトラレーカー　さもありましょうよ〔恋する目で存分に見る今は〕。では、さあ、伺候するとしましょう。

ウルヴァシー　先ずは私、身隠し被衣（かずき）に包まれたまま、あの方に寄り添って耳すますとしましょう。側近のお仲間と、人気（ひとけ）ないあたりで、何かしらお話し中だから。

チトラレーカー　あなたのお気に召すままに。

両女、件（くだん）のごとく実行。

道化　おお、思いついたぞ、手に入れ難い恋し女子（おなご）との逢瀬の策を。

王、黙然と座すまま。

ウルヴァシー　こなたの思（おぼ）し召しに浴しながら、件の女子は一体誰なのかしら、お高くとまったきりなどとは。

チトラレーカー　〔天女の千里眼で直ぐ分かろうものを〕どうしてまた真似なさるの、〔並の〕人間がすることを。

ウルヴァシー　神通力でたちまちに突きとめるのが怖（こわ）いの。

道化　なあ、こちとらは逢瀬の策を思いついた、と言うてるのですぜ。

王　ならば、いざ語られい。

道化　夢での逢瀬をかなえてくれる睡りを、そなた、当てになされませい。さもなくんばじゃ、かの貴きウルヴァシーとやらの肖像画を描いて、そいつをじっと見てなされや。

ウルヴァシー　（嬉しげに）勇気を欠く我が胸よ、さあさあ元気をお出し。

王　両案とも、あり得ぬ仕儀ぞ。——

これやこの余が胸は、愛神の矢筋を浴びてあれば、内深く鏃えぐりて疼き止むなし。いかで余は、夢に逢瀬を叶うとの　安き睡りを得べけんや。さてはまた、顔美わしき愛し女子を、画中に仕上ぐる由もがな、友よ、余が両の目に　涙はふり落つることなくしてはすまず。　（一〇）

チトラレーカー　あんた、聞えて。

ウルヴァシー　聞えたわ。でも、我が胸には充ち足らずで。

道化　こちとらの才覚は、そこまでじゃわ。

王　（ため息ついて）——

あくまでも苛酷なる余が心痛を　彼女は知らず。はたはまた、神通の力によりて　恋慕はつとに見え見えとの、　余をばかえって蔑むにや。かの人に逢わんとぞ思う　余が再三の望みをば　甲斐なくに萎れし様とはし給いて、五つ矢の愛神　御満悦は必定ぞ。　（一一）

チトラレーカー　あんた、聞えて。

ウルヴァシー　まあ、どうしましょう、私をあんな風にとっていらっしゃる。さりとて私、御前に出てお言葉返すことは出来ない。されば神通力で樺の葉をこしらえ、［それに刻書の文面］でもってお返事を果すとしたいわ。

チトラレーカー　私も同感。

ウルヴァシー　（所作あって刻書し、放り投げる）

道化　（目にして）くわばらくわばら、おお一体こりゃ何じゃ——蛇の脱殻みたいのが、あっしら

の目の前に落ちてきたあ。

王　（とくと見定めて）樺の葉に托したる文なるぞ、これは。

道化　なあ、こうじゃねえですかな――姿は見えねどウルヴァシーが、そなたの歎き言を聞きつけて、（自分の方でも）恋し心は同様と匂わせる文言を、書いて寄こしたちゅうのでは。

王　（などとは、）希望的観測に及び得ぬ域はなし（という仕儀ぞ）。（手に取って黙読、嬉しげに）友よ、明察なるかな、そこもとの推測は。

道化　書いてある文面を、聞かせてほしいものじゃ。

ウルヴァシー　先生、お見事、そなたさすがは通人でいらっしゃる。

王　聞かれい。（読み上げる）――

「御主君よ、そなたには、お分かりでもない妾めを　あれこれ忖度なさりますれど、もしや果して妾めが　恋しましますそなたに対し　御忖度のごとくにありますならば、――
（インドラ神の天上楽園）歓喜苑林の快き風さえ、天上花うち敷ける褥をも　（輾転反側）狼藉と化す妾めが身に、　とめどなく熱しとの様　――あろうことにござりましょうか。」

（二）

ウルヴァシー　さて今という今、果して何と語られようか。

チトラレーカー　語って余りありでしょうに、（やせ細って）蓮糸然のお手足が。

道化　やあれ、めでたや、腹ぺこのこちとらが（婆羅門供養の）お斎にありついたみたいに、そなたは大安心にありつかれて。

王　大安心、と言うにとどまろうか。――

木の葉に刻書されあるは、等しき思慕を窺わせ　婀娜なる文意を綴りてし　愛し女性の抒情歌ぞ。睫毛を上に仰ぎ見やれば、友よ、余が顔（＝口）は、　眼差し甘美なる彼女が顔（＝口）と、　吻合を遂げしかと覚ゆるを。

（三）

ウルヴァシー　とあっては私たち、情愛を正に等分し合ってるわけ。

王　僚友よ、指の汗で刻字がぼけてしまいそうぞよ。（代わって）保管を頼むぞ、そら、愛し女性の自筆文書。

道化　（受け取って）かの貴きウルヴァシー様がじゃ、そなたの望みに花持たせた末、実を結ぶ段

にゃ言葉を違える、てなこと今さらありますかいなあ。

ウルヴァシー　ねえ、お傍に寄るのが怖い臆病な胸を、何とか私しゃんとさせます間に、あなたの方が殿に見参して、私に似合った口上を述べておいてちょうだい。

チトラレーカー　かしこまりまして。（身隠し被衣を脱いで、王に近寄り）大王様の御盛運を。

王　（嬉しげに）御女性、よくぞ参られた。めでたき女性よ――

そこもと、かの朋輩と離れありては、さまで余を歓喜せしめず、聖なる両河の会点にて
かつて目にせしヤムナー河の、（場所変えて）こたびは恒河なきを見るごと。（四）

チトラレーカー　先ずは黒雲の帯が見え、あとから金色の稲妻が、という順序でございますに。

道化　（傍白）なに、ありゃウルヴァシーじゃのうて、姫の気に入りの侍女かいな。

チトラレーカー　ウルヴァシーは、叩頭跪拝して大王様に言上でございます。

王　何と仰せか。

チトラレーカー　「神に仇なす妖魔に発端の難儀に際しましては、妾はただただ大王様におすがり致しました。と申します妾は、殿を拝してより生じましたる恋に痛く難渋しますれば、重ねてまた大王様の御憐愍をかたじけなく致しますよう」――と。

王　温顔の女性よ――

そこもとは、見目うるわしき彼の姫が　焦心しきりと申さるるも、（こなた）プルーラヴァスめが　彼女のゆえに嘗めある痛苦は　気づかれずとや。愛神の　したり顔なる言い寄りは、等しく（我ら）双方に及びあり。――赤熱の鋼は　赤熱の鋼と　接着するにふさわしきを。（五）

チトラレーカー　（ウルヴァシーに近づき）さあ、あなた、いらっしゃい。私はね、あなたの方よりも（向こう様の方で）愛神の苛酷さがより一層と見て取りまして、今では（河岸を変え）、あなたに最愛の殿方の御使番に任じましたの。

ウルヴァシー　（身隠し被衣をかなぐり捨て）まあ大変、あなた簡単に私をお見限りとは。

チトラレーカー　（薄笑いして）今からほどなくに分りましてよ――（私たちの）どちらがどちらを打ち捨てることになるかは。ともあれ拝謁の口上をなさいませな。

ウルヴァシー　（恥ずかしげに）大王様には、勝利の御盛運を。

王　美女よ――

まことや、それがし、盛運の極みぞ、今し御身が余に向けて　（頼うだ君に対するがごと）
「勝利あれ」の辞を唱え給えば――　（天女衆の口よりは、仕えまつる主神インドラ」「千眼

紋」の君のほか、他の丈夫何人にも　絶えて寄せられし例なき辞を。（二六）

手を取って彼女を席に着かせる。

道化　御女性や、王の腹心なる婆羅門殿に、御会釈なさらいでか。

ウルヴァシー　（微笑して跪拝）

道化　貴女に清祥あらんことを。

舞台裏に声。

神々の使者　チトラレーカーよ、ウルヴァシーを急かされたい――

聖賢バラタが御身ら〔天女一同〕に　振りつけ給いし舞台演出、八種の情趣を宿しつつ　所作あでやかなる仕上がりを、風嵐群神の首領〔インドラ〕におかれては、四天王諸神をも伴のうて、本日台覧の御意向ぞよ。（二七）

一同、耳すます。ウルヴァシー傷心の所作。

チトラレーカー　あなた、聞こえて、神々の御使番が申されたこと。大王様にお暇乞いなさいな。

ウルヴァシー　私、口利く力もないの。

チトラレーカー　大王様、これなる輩は主持ちの身でございます。されば、大王様よりお暇を賜り、神々に対し落度なきよう身を持すべく念願つかまつります。

王　（〔たゆとう〕声音を何とか落ち着けて）御身ら両名の御主君にかかる御用向きに、それがし異を立つる者にはござらぬ。が、御記憶下されたい、かく申す輩を。

ウルヴァシー、別れの辛さを表出しつつ、朋輩ともども退場。

王　（ため息ついて）友よ、今や眼は無用のものかのごとくぞ。

道化　（〔預かった〕手紙を見せようとして）なんの、なんの、そりゃ……（と言いさして、独白）さあ大変、さあ大変、わしゃウルヴァシーに見とれてる間に、抜かったことか、あの樺の葉の付文がずり落ちたに気づかんかったわ。

王　そこもと、何を言おうとするのか。

道化　そなた、全身がっくりとなさるにゃ及びませぬぞ。どだいウルヴァシーは、あんたにぞっこん懸想してますじゃ。こなたに向けての思慕を、彼女は弛めはしませんわい。

王　それがしの内心もまた、さように示唆は致すのじゃ。けだし、立ち去るにあたり彼女は

――

主持ちの身はままならねば、せめてままなる胸の内を　――胸もとの　揺れ弾むにつけ

定かなる　烈しき吐息の力もて――　余に投げ托するがごとくなりき。（一八）

道化　（独白）こちとらは胸ピクピクじゃわ――今しも御前様にゃ、あの樺葉の文に言及は必定となろうとて。

王　さて今、何でもって眼を紛らわせたものかな。（思い出して）おお、樺葉の文をもて。

道化　（悄然の所作あり）やれ困った、見当らぬわ。ウルヴァシーの跡つけて行っちゃったわ。

王　何かにつけて迂闊ものよ、阿呆めが。そなた探さいでか。

道化　（立ち上がり）こっちの方じゃなかろうか。いや、こっちの方かな。（探しまわる所作あり）

正妃カーシー王女、供回りを従えて登場。

妃　これ、ニプニカーや、そちの申したはまことか――夫の君がマーナヴァカ殿を伴のうて、ここな蔓草の四阿に入られるのを、お見かけしたとは。

ニプニカー　私が奥方様に間違った言上に及びましたこと、かつてございましたろうか。

妃　ならばひと先ず蔓草に身を隠し、殿方の屈託ない物言いに耳すまして、そちの言い条がまことかどうか確かめるとしよう。

ニプニカー　奥方様のお気に召すまま。

妃　（舞台を回って）これ、ニプニカーや、あれは何だろうぞえ――ぼろ布みたいなのが、こちら

へ向けて南風に吹き寄せられて来るが。

ニプニカー　（うかがって）回るにつれて刻字がうかがわれますれば、樺の葉文でございます。あれまあ何と、奥方様の足環の端にひっかかりましたわ。（取り上げて）お読みしましょうかしら。

妃　先ずは黙読しておくれ。差し支えない中身なら、その上で聞かしてもらいましょうぞ。

ニプニカー　（件のごとくにして）こりゃ奥方様、例のうわさの一件かと見えまする。私の察しますに、殿様に向けてのウルヴァシー作詩、それがマーナヴァカ先生の不注意から、我らの手に入ったというわけでして。

妃　ならば妾は、その詩の文意を会得しましょうぞ。

ニプニカー、先に王の朗読した文（＝詩節一二）を、朗読する。

妃　これをそのまま御進物の品として、天女の情夫殿に見参するとしよう。（伴回りを引き具し、四阿に向け舞台を回る）

道化　やあ相棒殿、ありゃ何じゃろか――遊園林に隣る築山の外れを、風のまにまに漂うかと見えるのは。

王　（立ち上がって）陽春の親しき友にましますす尊き南の風神よ――

芳香を求むとならば、蔓草《つるくさ》の　かぐわしき匂いに充てる　花粉をば奪い去られよ。それがしが愛し女性《にょしょう》の　情愛こめし自書の手蹟を　いたずらに奪わるるとて、御身に何の益やあらん。けだし〔天女のかりそめに〕雌猿〔の境に堕ちてありし〕アンジャナーに対してはいささか求愛の体《てい》の見られしという　御身なればご存じのところならんを　――　恋に悩める者どもが　ようやくに身命を維持し得るは、係って心やりの効をもたらす　この種の品によりてなりとは。（一九）

妃　分ってますとも。

ニプニカー　奥方様、正にこの樺の葉文《はぶみ》を、探し回っての最中ですわ。

道化　やあ、一杯喰ったわ、孔雀の尾羽じゃった――萎れていく酔花《ケーサラ》の花みたいな〔褪《あ》せた黄の〕色合いをした――。

王　まったくもって余はもう駄目じゃ。

妃　（近寄って）夫《せ》の君、早まられますな。当の樺の葉文はこれに。

王　（狼狽して）やや、これなるは妃。よくぞ参られた、妃には。

道化　（傍白）悪いところへ参られた、と今はなったがな。

王　（傍白）友よ、ここで何と対処したものかな。

道化　（傍白）贓物《ぞうぶつ》もろとも取り抑えられた泥棒に、抗弁のしようありますかい。

王　（傍白）痴《たわ》けもの、今は悪ふざけの場合でないぞ。（声に出して）こは、妃よ、余の求むるところにあらず。今し余が探索に努めあるは、政務の文書なるを。

妃　もっともですこと、御自分の好い目を隠し立てなさるのは。

道化　御婦人よ、こなたにゃ早う食事を進ぜられい――〔錯乱もたらす〕胆汁過多を鎮め得るのは、おまんまじゃからな。

妃　ニプニカーや、旨《うま》いものだわね、婆羅門《ブラーフマナ》が仲間に息つかせる手際は。

道化　御婦人よ、分らいでか。御馳走にありつきゃ、誰だって一息つくわな。

王　馬鹿もの、そち〔の御託〕は否応なく、それがしを不届きものに仕立ておるわ。

妃　そなたに不行届きはござんせんとも。今の場合、不行届きは妾《わらわ》の方――御迷惑な見参に及び、そこもとの前に止まりましては。ニプニカーや、さあ、行きましょうぞえ。（怒りの所作あって立ち去りかける）

王　――

余こそはすなわち不届きものぞ。清澄の御気色に復してたもれ。バナナ樹の〔芯《しん》のごと　締

りて滑かなる〕腿なせる妹よ、狂乱を終息なさりませい。主とて仕ぅる方が　御勘気とあらば、いかでか仕ぅる僕　落度なしとてあいすみましょうぞ。（二〇）

妃の足下に平伏する。

妃　（独白）ゆめ妾は心軽々しく、御愁訴の手に乗ってはならぬ。だけれども、礼節のたしなみに関し〔己が只今の仕打ちを〕後悔しまいかと気づかわれるが。

王を振り払い、供回りを従えて退場。

道化　雨期の川〔の激流〕みたいに清澄はおろか、〔濁った（＝不機嫌の）まんまで〕行っちゃいましたぜ、お妃は。起き上がりませいたら。

王　（平伏から起き上がって）こうとなるのも理不尽にはあらず。見られよ――夫どものすなる愁訴は、上手口の幾百を算すとも　真情の潤いなくんば、妻女ら能くこれを看破して　彼女らが心に染むることなし　――人工彩色を施せる宝石の　〔自然なる潤いなければ〕、その道の目利き玄人筋に、おけるかのごとく。（二一）

道化　そなたにゃ今の場合、これでかえって好都合じゃて。〔ウルヴァシーに〕眼を病んだものは、〔怒りに燃える妃という〕燈明の焔が、まん前にあっちゃ堪らんがな。

王　などとは申すまいぞ。それがしウルヴァシーに思いを寄するとはいえ、妃に対しての敬意は毫も変らぬを。さりながら、〔それがしの〕平伏を〔彼女が〕無下に斥けたとあれば、妃に対して余は自若の風を持して参ろうぞ。

道化　待った、待った、そなたの自若ぶりは。腹ペコ婆羅門の生命をこそ、どうか持して下されや。大体おぬしにゃ、水浴・食事をなさる定めの時刻ですぜ。

王　（上空を見やって）日も半ばが過ぎたわ。さればこそ――
暑がりて孔雀は、樹木の根方に周らされたる　冷たき溝床にうずくまりあり。蜂は〔平素、香りなしとて歯牙にもかけぬ〕金雀枝の蕾、上端に孔を穿ちて、内に潜めり。鴨は熱したる水中を離れ、岸辺の蓮に寄りつきてあり。あれまた、遊技場にありては、籠中の鸚鵡渇きに困じて水を催促。（二二）

全員、退場。

第三幕

バラタ仙の弟子二名、登場。

〔弟子〕甲　パッラヴァ君、お師匠様は大インドラ神の宮殿にお出かけの折、床机もちの〔随行〕役を君に振り当てられ、私の方は〔お館の〕聖火炉を見張る〔留守居〕役を仰せつかった。で、お訊ねするのだが、神々の観客御一同には、〔我らが〕師父殿の演出〔の出来映え〕に御満悦であったろうな。

〔弟子〕乙　ガーラヴァよ、わしゃ知らん、御満悦じゃったかどうかは。ただし、かの弁才天女作詩『吉祥天女の婿選び』でウルヴァシーは、様々な情趣の表出に余念なく打ちこんではいたわ。

甲　君の口裏には、ヘマなことが籠るかのようだが。

乙　図星よ。ウルヴァシーたらそこで、うっかり台詞をトチったのじゃ。

甲　はて、どんな風にか。

乙　吉祥天女の役を演ずるウルヴァシーに、〔後見の刀自〕水天妃に扮するメーナカーが問うことにゃ――「姫よ、こなたに御参集の方々は、三界に丈夫の名も高きお歴々、〔すなわち〕天空方位の守護神がたに加えて豊髪者〔ヴィシュヌ神〕殿。さて、いずれの御方に、そなたは情こめて御執心かな」と。

甲　して、それから。

乙　すると彼女の口からは、「至高の丈夫〔ヴィシュヌ〕に」と言わにゃならんところを、「プルーラヴァスに」と声が出てしもうたのじゃ。

甲　なるようにしかなさぬが身体器官か。師父殿は彼女に御立腹ではなかったのかな。

乙　お師匠様からは呪いをかけられたが、大インドラ神の方からは、かえって有り難い思し召しに浴したのじゃ。

甲　はて、どんな風にか。

乙　「そちは余が振付けを無にしたる以上、天上界にとどまることあいならぬ」、というのがお師匠様の呪い。ところが城塞破砕者〔インドラ神〕の方は、恥じいってうなだれるウルヴァシーを見て、こう仰せじゃった――「そちが想いを寄する王仙は余が戦陣の僚友なれば、彼に嬉しき儀を取り計らうとしようぞ。さらばそちは思うがままプルーラヴァスに侍ると致せ、彼が継嗣〔の成人〕を見届けるまでは」と。

甲　さもありなん、余人の心裏お見透しの大インドラ神におかれては。

乙　（太陽を見やって）話にかまけ、お師匠様の沐浴時刻を犯してしもうたぞ。さあ参れ、師の側近に供奉するとしよう。

両名退場、間幕終る。

後宮執事、登場。

執事　――
一家の長は誰とても、壮年期には稼ぎに奔命、それより後は息子らが　肩代わりして荷は軽く　安息の境に向かうものなり。しかるを、これこのとおり、身共の老境はといえば日々に腰曲げ身をへつる　宮仕えなる牢獄よ。婦女子扱うお役向き、ああ辛（つら）いかな辛いかな。　（一）

（舞台を回り）斎戒を修しします〔正妃〕カーシー王女様の仰せつけには――「願行に有終の美をなすべく妾（わらわ）は、〔かねてよりの〕勘気を打ち棄てて、先にはニプニカーの口を通じ大王様のおなりを乞い奉った。同じ旨を〔重ねて〕そちは、妾の語とて言上してたもれ」――と。先ずは今、晩禱の儀をおえられた大王様に謁見しようぞ。（舞台を回り、打ち眺めて）王宮にあっては、日の暮れ方のたたずまい美々しきことよ。というも、こなたにては――
孔雀らは　夜の眠気さして懶（もの）うげ、止木（とまりぎ）に彫りこまれたるがごと。　軒端は集（つど）える鳩の定かならず、窓格子を洩れ出ずる香煙と紛れ。　後宮仕えの刀自（とじ）衆は　日課の務めに一心不乱、　花撒（ま）き献じて浄めたる　要所要所に　宵を寿（ことほ）ぐ燈明の　光焔高きを配置中なり。　（二）

（舞台裏の方を見て）おや、折しも陛下には、正にこなたへ出御なるぞ。――
供奉の侍女らが手に捧げもつ　松明（たいまつ）に囲まれ、あれなる君は　――〔インドラに〕翼もがれし〔という〕こともなく　行動自在の大山が、　斜面に沿うて金雀枝（カルニカーラ）の細木　花盛りなるか
――とぞ見ゆ。　（三）

上述のごとき王、道化と登場。

王　（独白）――
昼間は職務に焦心も紛れ、さして苦もなく余は過ごせしも、気散じなければ三更の　長々しき夜をばいかで送らん。　（四）

執事　（近寄って）陛下の御盛運を。陛下、正妃の言上にござる――「宝玉楼の頂きにては、月の眺め格別にございます。陛下には、かしこにおなり遊ばして、月輪が〔最愛の星宿〕ローヒニー女と結ばれますまで、お待ちのほどを妾は願い奉りまする」――と。

王　妃に言上あれ、「そこもとの望むところを」と。

執事　かしこまってござる。（退場）

王　侍女よ、妃とのたびの挙は、果して正真正銘、願行のためのものであろうか。

道化　それよ、わっしの察するところ、妃にゃ後悔の念が起きて、殿御の土下座を無下にした咎を、願行にかこつけて拭おうとの魂胆じゃ。

王　そなたの申すはもっともぞ。何ゆえとならば——

気位の高き婦女子は、〔宥し乞う夫の〕平伏はねつけて後　心は悔いに悶えあるとも、夫の内々の愁訴には〔応ずるを〕恥じて躊躇うが常なり。（五）

さらば宝玉楼の頂きへの道を案内せよ。

道化　こちらへ、こちらへ、そなた参られませ。これなるは恒河の〔清き〕河波にも似た水晶の階、これをたどってそなた、宝玉楼に昇りませい。

王　そなたが先立って昇れ。

一同、階を昇る所作あり。

道化　〔見やって〕やあ、月の出も間近に違いねえ。東方〔女性〕の面は、暗闇が失せるにつれて眺め好しなに見えれば。

王　そなた、よくぞ申された。——

東山に潜める月の光芒に　夜暗の遠く打ち払われしとき、〔黒髪梳いて〕髷束ねたるかと見えれば　余が両の目を魅了するなり　——萌黄軛馬〔の名にし負う　インドラ神〕の守護下なる〔東の〕方位の面は。（六）

道化　あーれあれー、やあ、氷砂糖にそっくりのが差し昇ったわ、再生族の統領〔ソーマ＝月〕があれに。

王　〔笑み浮かべて〕喰い意地はった男には、何かにつけて気になるのは食物ばかりか。〔合掌跪拝して〕尊き夜闇の主——

太陽に宿り沈めば　善男連〔に新月祭〕の祭事を促し、甘露液滴らせては　神祇・祖霊を足らわせ、　夜には蔓延る闇を退治し、　ハラ大神〔シヴァ〕の髻に　身を寄せて座す御方

——〔月神〕に帰命。（七）

道化　〔月種一門の〕そこもとが御先祖〔に当るお月〕様は、〔これなる〕婆羅門を口寄せ役にしておいでじゃが、その御方のお許しを得て着座しませい。こちとらも安座としますからな。

王　〔道化の語を受け容れて着席、供奉の一同を見やり〕月光いと冴えたれば、松明の二重手間には及ばぬぞ。方々、休息をとるとされたい。

供奉衆　陛下の仰せのままに。〔退場〕

王　〔月を打ち眺めて〕僚友よ、妃の来着は小半刻の後ぞよ。さらば人気なき所にて、余は己が実情を申し聞かせよう。

道化　そのことなら〔聞くまでもなく、憔悴ぶりからして〕一目瞭然ですがな。それでも、〔女子の方に〕ああまでの慕情が見て取れれば、望みの緒で身が支えられるわけよ。

王　まことさようぞ。さりながら、烈しきは余が心の疼き。――

荒岩の狭間に勢い殺がれ　河流の百重に裂くるがごとく、　逢引きの幸を阻まれ　恋し思いは百重に増すを。　(八)

道化　衰えて行く肢体でもって、おぬしは男前一段と見えるにつけて、好いた人との逢瀬も遠くはない、と拙者は見ますがな。

王　(吉兆を覚える所作あって)僚友よ――

望み生む言辞によりて　そこもとのなすと等しく、　望み生む痙攣によりて　今しこの右の腕は　悩みの重き余を力づけあり。　(九)

道化　婆羅門様の言葉、よも違うことあるべからずじゃ。

王、望み取り戻したる様にてあり。天車を駆ってウルヴァシー、愛人の許に忍び行く女子の装い、チトラレーカーと登場。

ウルヴァシー　(己が姿を見やって)ねえ、あなたのお気に召して――装身具の飾りは減らし藍色の薄絹を羽織った、(人目を避ける)このアビサーリカー姿は。

チトラレーカー　褒めるに言葉の才覚が、私にはつきませんわよ。でも思いますの――「ああ、私がプルーラヴァス王であったならなあ」――と。

ウルヴァシー　ねえ、愛神のあなたへの仰せつけがこうなのよ――早く私を連れて行ってちょうだい、あの素敵な方のお住居に。

チトラレーカー　そら、もう近づいてるじゃありませんか、あなたの最愛の御方の――(財富神の住居)カイラーサ山の頂きが(地表に)移されたかと見える――宮殿に。

ウルヴァシー　では、あなた、一つ神通力で探って下さいな――私の心を奪った盗賊めはどこか、して何をなしつつあるか、を。

チトラレーカー　(思い入れあって、独白)よおし、こなたをちょっとなぶってやろう。(声に出して)あらまあ、想いの様に得られた愛し女子との逢瀬の幸を味わいつつ、悦楽に格好な所柄にいらっしゃる。

ウルヴァシー　(悄然たる所作)

チトラレーカー　おぼこさんたら、一体どう取り違えてるの、「愛し女子との逢瀬」について。

ウルヴァシー　(吐息つき)疑ぐりたがるの、不調法な私の胸は。

チトラレーカー　(見やって)そら、あそこ、王仙には朋輩だけを伴のうて宝玉楼においで。さあさあ、御方に近う伺候しましょう。

両女、降下着地する。

王　僚友よ、夜とともに恋の労は闌けり行くぞ。

ウルヴァシー　意味定かならぬ今のお言葉に、私の胸は震えてなりませぬ。身を隠したままで、あの方の屈託ないお喋りを聞くとしましょう――私たちの疑念に決着が付くまで。

チトラレーカー　あなたのお気に召すまま。

道化　この甘露液はらむ月の光を、〔痛み止めに〕召しませったら。

王　僚友よ、この種のものの役立つところにはあらず、只今の苦悶は。見られい――

瑞けき花の褥にあらず、月光にあらず、全身に　刷きたる白檀膏にもあらず、はた宝玉の頸飾りにもあらず、我が恋の疼きを一掃し得るは　――かの天上の女性なるか。さにあらざれば、人目しのびて　彼女にまつわる談まじえなば、疼きを軽うすることを得んか。　（一〇）

ウルヴァシー　我が胸よ、そなたは私を打ち棄てて、こなたに移り添われたが、今こそ果報が得られたことね。

道化　そうともさ。のう、こちとらだって、甘味乳酪とマンゴーが得られねば、その名をさん

ざ口にして求め、何とか息ついて行くのじゃからな。

王　僚友よ、余はかように心得るぞよ――

チトラレーカー　お聞きよ、欲ばりさん、聞こし召され。

道化　はて、どんな風にかな。

王　――

車の揺れたれば彼女が肩に　押しつけられしこの肩先は、　これなる身にありて独り自得。　残余の部位は〔いたずらに〕大地の負担〔をなすのみなるを〕。　（一一）

ウルヴァシー　さあ今、この上は遅疑しまい。（がばと近寄り）あれまあ、チトラレーカーや、私を眼前にしながら大王は気のない風でいらっしゃる。

チトラレーカー　（薄笑いして）慌て者たら、身隠し被衣を脱いでないじゃないの。

舞台裏に声。

奥方様、こちらへ、こちらへ参られませ。

一同、耳すます。ウルヴァシー、朋輩ともども悄然の体。

道化　くわばらくわばら、妃が寄って来たわ。されば、おぬし、無言の行を抜からずにな。

王　そなたも何喰わぬ顔しておられよ。

ウルヴァシー　ねえ、今はどうすれば好いの。

チトラレーカー　焦ることないわ、私たちの姿は見えぬのだから。妃はといえば、斎戒の装いをして見える。であれば、このあたりに長くは留まられますまい。

供奉衆に献供の品を持たせて、王妃登場。

妃　（月を打ち眺めて）これ、ニプニカーや、〔愛しの〕ローヒニー星宿と結ばれて一段と御立派なこと、尊き鹿紋章〔の月輪〕におかせられては。

腰元　奥方様と御一緒なされば、殿にも格別の御気色とはなりましょうに。

両女、舞台を回る。

道化　（目にして）やあ、このたびは妃、わっしの目には殊勝げな様と見ゆる——〔婆羅門供養の〕

お斎を下さろうとてか、それとも願行を名目に、そなたへの怒気を解いたのか、そこんところは分からんにしても。

王　（笑み浮べ）どちらも筋は立つものの、後に申された方が余には至当と覚ゆるぞ。というは、これなる女性におかれては——

白絹の衣をまとい、身飾りは吉祥の印のみ、浄き箒草の新芽を挿頭し、余に御機嫌は麗わしと見ゆ——　願行を名として、高慢の挙動一擲せる姿よりしても。（二）

妃　（近づき）夫の君の御盛運を。

供奉衆　殿様の御盛運を。

道化　貴女に清祥あらんことを。

王　妃よ、よくぞ参られた。（手を執って着座させる）

ウルヴァシー　ねえ、あなた、当然のことね、こなたが妃の称をもって遇されるのは。貫禄からして〔インドラ〕神妃サチーに少しも引けを取りませんもの。

チトラレーカー　御立派、さすがはあなたの物言い、妬みの色はこれぽっちなくて。

妃　夫の君の驥尾に付しまして妾は、とある願行を全うせねばなりませぬ。さらば小半刻の間、御迷惑をお忍び下さいませ。

王　などとは申さるるな。迷惑はおろか、実に有り難き仕合わせぞよ。

道化　（婆羅門供養の）お斎があるからにゃ、こんな迷惑も再々あってほしいものじゃ。

王　して当の妃の御願行は、名を何と申すかな。

　妃、ニプニカーの顔をうかがう。

ニプニカー　殿様、「愛人宥和」と申します。

王　（妃を見やって）さようならば――

　多幸なる御方よ、そこもと今次の願行によりて　蓮茎のごと繊弱の身軀を　萎らせ給うは由なし事ぞ。そこもとの歓心を翹望してやまぬが奴僕輩なるに、などてまた輩の歓心をそこもと買わんとし給うか。　（三）

ウルヴァシー　何て大層な、これなる方にあの人の鞠躬如ぶりたら。

チトラレーカー　まあ、おぼこさんたら。都人ともなれば、情愛を他に移したとき、礼譲ひときわ入念になさるものなの。

妃　夫の君にかくまでの仰せを誘うとは、これぞ只今の願行の効験にございまする。

道化　止まられい、殿御は。結構なお言葉に、異を立てちゃあいならんが。

妃　娘ども、献供一式を届けてたもれ。宝玉楼に降下します月の御足に、妾は礼拝を致そうほどに。

供奉衆　妃の仰せ、かしこまりまして。供物はこれに。

妃　（所作あって花その他を捧げ、月光を拝んで）これよ、ここな献供の甘団子は、マーナヴァカ先生に取らせてたもれ。

供奉衆　妃の仰せ、かしこまりまして。マーナヴァカ先生、さ、これはあんたに。

道化　（甘団子の椀を受け取り）貴女に清祥あらんことを、そなたの断食に実り多かれ。

妃　夫の君、しばしこなたへ。

王　これに候う。

妃　（王に拝礼の所作あり、合掌・平伏して）ここに妾は、ローヒニー星宿と鹿紋章の月輪との神格御夫妻を証人として、夫の君の御和解を乞い申すらく――「今日以降、夫の君が望まれかつ夫の君との逢瀬に逸る女性あらば、彼女に対し妾は友愛の絆をもって振舞わんことを誓う」

――と。

ウルヴァシー　あれまあ、あの方のお言葉は主旨が那辺か分からぬが、でも私の胸は安心感で晴々して来ましたわ。

チトラレーカー　大度・貞淑の妃より晴れてお許しあれば、あなたには愛しい方との逢瀬が、支障なくかなうことになりましょうよ。

道化　（傍白）上手の手が漏れて魚に逃げられると、諦め顔して漁夫のほざくことにゃ――「わしゃ〔これで不殺生の〕法徳が得られよう」なんぞと。（声に出して）御女性や、あれなる殿御はどうでも好いのかな。

妃　痴け者めが。妾といえば、自身の幸を切り上げてまで、夫の君を五体満足にして進ぜようと存ずるを。それからしても、ちと思っても見るがよい――〔妾にとって彼が〕愛しの君であるかないかは。

王　――

それがしを他に譲らるるか、はたまた奴僕として留め給うか、そはそこもとの御自由に属す。さはあれど、それがしは――気づかいの過ぎたる妹よ――そこもとの疑わるるがごとき男子にてはあらず。（四）

妃　であろうがあるまいが、そちら様の勝手。とまれ「愛人宥和」の願行は、型のごとくに完

了しました。さあ、娘どもや、立ち去るとしましょうぞえ。

王　愛しの妹よ、はやもう打ち棄てて立たれるとあっては、それがし宥恕を賜わったことにならぬを。

妃　夫の君、妾は斎戒をかつて破ったためしござりませねば。

妃、供奉衆ともども退場。

ウルヴァシー　ねえ、あなた、王仙は愛妻家でいらっしゃる。だのに私は、〔あの方に捧げた私の〕胸を引き戻すことが出来ないの。

チトラレーカー　あなた、失望して引き下がるおつもりなの。

王　（座席に近づき）僚友よ、妃は遠くには立ち去っていまいな。

道化　心配せずに話しなされ、おぬしが言いたいとおりを。何ともならぬと見限れば、医者が病人にするみたいに、そなた様を早速に手放されたのじゃわ――御女性は。

王　願わくはウルヴァシー――

ウルヴァシー　――今こそ望みを達しますよう。

王　――
余が愛しの彼女、隠れ潜みて、せめて足環の音なりと　余が耳の辺に落さるるか、さなくば背後より足忍ばせて寄り、蓮なす掌をもて　余が両眼を目隠しされよ。今ぞこの高楼に降り立てど胸騒げば足渋る彼女を、如才なき朋輩におかれては、一歩一歩と引き立てて　余が傍らにお連れあれ。(一五)

〔両女、身隠し被衣を脱ぐ〕

ウルヴァシー　ねえ、あなた、先ずはあの方のお望みを達するとしましょう。(背後から寄って王の両眼を目隠し、チトラレーカーは道化に目配せ)

王　(所作あって手触りの快感を示し)僚友よ、ナーラーヤナ仙の腿より生れし腿美わしの彼女は、これここに御座すぞ。

道化　どうして、そなた、お分かりかな。

王　かくなれば分からいでか。――
恋に苦しむ余が肢体を　手触りもて癒し得る女性、他に誰かあるべき。夜咲きの蓮の息づくは、日射しにはあらずして　独り月光に浴してなるを。(一六)

ウルヴァシー　(両手を〔王の目から〕離して立つ。つと近寄って)大王様の御盛運を。

王　美女よ、よくぞ参られた。(半座を頒ち着坐させる)

チトラレーカー　連れ立たれましたる殿は、お仕合わせでしょうね。

王　そはもとよりのことにござらぬか。

ウルヴァシー　(〔チトラレーカーに〕)ねえ、あなた、妃が大王様をお譲りになったからこそ、私は寵を競う女御さながら、殿のお身体に触れることとなりましたのよ。差し出がましい女子とは私を取らないで下さいね。

道化　何じゃと、手前ら二人は日暮れ時から〔ずっと、一部始終を聞きながら〕ここにおったのか。

王　(ウルヴァシーを打ち眺めて)――
妃の譲渡せるところとて　ようやくにこれなる余が身に対し　只今の挙に及ばれしとなら、かねては何人の許し得て、そこもと、かくは余が胸を　盗み奪いて去られたりしか。(一七)

チトラレーカー　お連れ様、あれ彼女は二の句ございません。ここのところは妾の言上を聞いて下さいませ。

王　謹んで承ろうぞ。

チトラレーカー　春に続いて夏季ともなりますれば、妾は日神に奉仕のお役目がございます。されば、これなる妾の親友が天界恋しの思いに困じませぬよう、何とぞお振舞い下されませ。

道化　天界なんぞに、想いを繋ぐこと何あるものか。あそこじゃ〔神々という住人ども、〕飲み食いすることものうて、ただもう眼は瞬きもせず、魚みたいでいるのが落じゃて。

王　多幸なる御女性よ、——

天界は幸い言辞を絶したるの境なれば、そを忘れしむること　何人の能くするところぞ。
されど今し地上なる彼女には、他の女性いずれとて共にし得ざる〔かかりきりの〕奴僕とて
プルーラヴァスの在るを。　(一八)

チトラレーカー　有り難き仕合わせにございます。さあウルヴァシーや、心を強うして私にお暇を取らせてちょうだい。

ウルヴァシー　(チトラレーカーを抱きしめ)あなた、私を忘れないでね。

チトラレーカー　(薄笑いして)私の方からこそお願いだわ、お連れと御一緒のそちら様に。(王に跪拝して退場)

道化　そなたには念願成就して弥栄、おめでとうござる。

王　今し余の栄えたるや、こうぞ。見られい——

詔勅の刻書は〔これに額ずく〕諸侯連の宝冠を　鏤むる珠玉の色に染み、大地をこぞって唯一の　傘下に収むる覇権をば、得たればとてにはむしろあらずして、友よ、これなる御女性の　脚下に侍して御命を仰ぐ　願わしき奴僕の分際を　今こそは得たりとてぞ——我

は満悦。　(一九)

ウルヴァシー　今のお言葉に勝って懇ろの辞を、申し述べんとて妾には才覚つきかねまする。

王　(手もてウルヴァシーを支え)おお、宿望成就は事態逆転をいや増すことよ。——

兎を宿す月輪の　かの光芒はそのままに　今や〔悶えを誘うことなく、かえって〕余が身を安らわせ、かの愛神の矢はそのままに　今や〔痛苦にはあらずして、かえって〕余が上に加護をもたらす。　美女よ、そこもととの逢瀬は、暴戻苛酷のごとくなりしものを逐一　余が意に添うの様となすなり。　(二〇)

ウルヴァシー　妾は参るのが遅れまして、大王様に不届きは申しわけございませぬ。

王　などとは申されるな。——

得がてなるあげくになりし幸いこそ　情味ひとしお優るものなれ。けだし木蔭の安らぎに資するは　炎暑に困ぜる人において格別。　(二一)

道化　のうのう、宵の口に結構な月の〔光芒〕おみ足は、存分に頂戴したわな。おぬしには、さあ、御寝所入りの時刻じゃて。

王　さらば、そこもとの友なる女性に道案内されよ。

道化　こちらへ、御女性、こちらへ参られい。

一同、舞台を回る。

王　美女よ、今や余の望みはこうぞ。

ウルヴァシー　どのようなお望みで。

王　――

かねては願いのかなわざる余に、三更の夜の過ぎ行くは　長々しきこと百倍と覚えたり。
さりとては、そこもとの逢瀬を契るに際し　もし夜の経過に変りなくんば、眉美わしの御
女性や、自得の境に余は浸り得べきを。　（三）

全員、退場。

第四幕

〽仲良しの友にはぐれて気落ちして、雌白鳥は連れの一羽と　せんすべ知らず啼きかわ
します、日射しに触れて紅蓮開いた　こよなき池の水の面で。　（一）

〈天女二名の登場を告げる囃子唄〉

サハジャニャーとチトラレーカー、登場。

チトラレーカー　〈登場に続き、足拍子ふんで四方を打ち眺め、独唱〉――

〽仲間を案ずる痛みに暮れて、こよなき池の水の面では、情こまやかな二羽の雌白鳥
目は涙たばしり打ち嘆きます。　（二）

サハジャニャー　（憮然として）ねえ、チトラレーカー、貴女の顔の色艶は萎れ行く蓮みたいに黒ずんで、御気分すぐれずと思わせる。ついては気の晴れぬわけを私に聞かせてちょうだい、貴女の悩みを私も共にしようほどに。

チトラレーカー　（悲しげに）ねえ、あなた、天女仲間での順番が回って来て尊き日神に奉仕しますうち、「ああ春祭の時節となった、仲良しの友がいないままで」と思えば、私やたらと遣

瀬のうてなりませんのよ。

サハジャニャー　そりゃもう、お二人さん相互の愛情のほどは、百も承知だわ。で、どうなの。

チトラレーカー　で、ここのところ、何か変った仔細でも起こってはいまいかと、私は念力を込めて見ましたら、とんでもないことが分かったのです。

サハジャニャー　えっ、そりゃどんな風なこと。

チトラレーカー　ウルヴァシーは、天佑を保有し政務の責を閣僚に委ねられた王仙の君と同道して、カイラーサ山頂なる香酔林へ遊楽に赴いた、とのことですの。

サハジャニャー　（もったいぶって）ねえ、そうした名勝の地での悦楽こそ、まこと悦楽と申すべきもの。で、それから。

チトラレーカー　さて、天上恒河の流下するそこな岸辺で、砂山つくりの遊びをしていたのが、驃軽半神の娘で名をウダカヴァティーと申す者。この童女に王仙の君がしげしげと見惚れておられたとて、腹を立てましたのよ。私の仲良しウルヴァシーたら。

サハジャニャー　あの人は根が短気、しかも〔王仙に〕ぞっこん首ったけ、とあってはここは運勢次第ね。で、それから。

チトラレーカー　して、殿の愁訴は受け付けぬまま、師父〔バラタ仙〕の呪いに心ほうけた彼女は神様の禁令を失念して、女人の近寄ってはならぬ童貞神の森に入りこんだのです。入るやたちまち彼女の姿は、森の外れに生いてある蔓草に変ってしまいましたの。

サハジャニャー　（愁いげに）何にしても、運命のままにならぬことってないものね。あれほどまでの情愛が、打って変った首尾を迎えたとは。で、それから。

チトラレーカー　それからというもの、殿の方も、最愛の女性を当の森に探し回るうち、気がふれてしまわれて、「ウルヴァシーはこちらだ、あちらだ」といっては日夜を過ごしておいでなのです。（空を打ち眺め）ところで、何不足ない人々にすら遣瀬ない思いもたらす雨雲が、そら、立ち昇って参ります今は、私の思いますに、彼には手の施しようもなくなることでしょうよ。

〈たちまち起こる囃子唄〉

〽仲間を案ずる痛みに暮れて、こよなき池の水の面では、情こまやかな二羽の雌白鳥　（三）
しとどの涙に濡れ嘆きます。

サハジャニャー　あのように器量すぐれた方々が、いつまでも不幸な目に会われることはありません。つけても私の思いますに、恩寵の証となるような出会いの手掛りが、きっと何か生じましょうよ。（東方を打ち眺めて）さあ私たち、差し出で顔なる尊き日神に、奉仕することと致しましょう。

〈たちまち起こる囃子唄〉

〽不安に心は疼きつつ　仲間に会いたやの一念しきり、蓮咲けば魅了しやまぬ　こよなき池を、雌白鳥は　ひねもす遊弋するのです。　(四)

両女退場、間奏終る。

〽大きな象の王様は、愛し牝象とはぐれての　心狂いに窶れも著く、森の茂みに分けて入ります――まつわる木々の花と若葉に　生得の巨体は飾られて。　(五)

〈プルーラヴァスの登場を告げる囃子唄〉

中空を凝視しつつ、狂乱の体にて王、登場。

王　(怒気をこめ)やい待った、待った、性悪の羅刹め。余が最愛の女性を連れて、汝はいずこに向かうか。(見やって)やや、山頂より空中に飛び立ち、矢を雨と余に注ぐか。(土塊を手に取り、打ち掛かろうと駆け出し)――

〈とたちまち足拍子ふみ、四方を打ち眺めるところで、囃子唄〉

〽愛しい雌鳥を思うせつなさ　胸に逼って参りますれば、こよなき池の水の面に、若き白鳥は翼はばたき　目は涙たばしり嘆きおります。　(六)

(とくと見定めて、悲しげに)何としたことか――

湧き立ち初めし雨雲が　今し凝集せるものぞ、甲冑に身を固めたる　驕慢の羅刹にはあ

らず。　こは遠く　虹の延びたるぞ、引きしぼられし　弓などにてはあらず。　今また鋭く烈しきは　篠つく驟雨、矢筋の相次ぐにはあらず。　試金石に刷きたる金の筋かと　艶やかなるは稲妻ぞや、余が愛しのウルヴァシーにはあらず。　(七)

(失神して倒れ伏す。〈足拍子ふみ〉立ち上がり、ため息ついて)――

〈独唱〉

〽鹿のごと目もと優しい女子をば　とある羅刹が攫うかと、それがしは見てとった――鮮かな稲妻はらむ　黒ずんだ夕立ち雲が、雨降り注ぐに到らぬうちは。　(八)

(悲しげに考えこみ)それにしても彼女、一体どこへ行ったのかな。――

怒りに任せ、神通力もて　身を隠してありや。　否、怒り長びかす女子にてはあらず。　天上さして飛び立てるか。　否、否、余への情愛に　彼女が心はしとどなれば。――

(憤怒の形相にて)――

神々に仇なす輩とても　余が面前なる彼女をば　奪い去るの力はなし。　しかるを彼女、余が両眼の　絶えて及ばぬ域に去るとは、何たる運命の仕業かな。　(九)

(〈足拍子ふんで〉四方を打ち眺め、ため息とともに落涙)哀れや、運勢が顔背けたとなると、一難また一難の相伴なうことか。というは――

今ぞ突如として余に起こりしは、かの愛しき女性との　よに耐え難き別離の悲境。そも、

瑞々しき雨雲の　湧きて昇れば、　炎暑まぬかれて日々は　快適たるべき折なるに。　(一〇)

〈たちまち起こる群舞に、王は独唱〉

〽控えおろう、雨雲よ、何たることを汝は仕出かす、しとど篠つく夕立が　四方の面に垂れこめるとは。やいよ、もしやそれがしが　大地をさまよい歩くうち　愛し女子に会うともなれば、それならそれで汝が仕打ちを　それがし何であれ忍ぼうぞ。　(一一)

〈(群舞に合せて)考えこみ〉心に悩みの炎熱が募り行くのを、〈制裁もせず〉いたずらに看過するとは余の手落ちか——古聖賢の仰せにも「時季のめぐりは王者の方寸に由る」とあるからには。さらば余は雨雲の時節に、差し止めを下知せずにおかいでか。〈ほくそ笑んで立ち上がり、「古聖仙の仰せにも云々」の句を口ずさんで〉ようし、差し止めを下知しようぞ。——

〈たちまち起こる群舞、囃子唄〉

〽香りに逆上せた蜂どもの　さんざめく歌声と　郭公鳥なる楽器の類が　奏でられるのとに合わせ、風にそよぐ若葉の叢を　手振りとて繰り出しながら、あでやかな趣向さまざまに　如意宝樹が踊ります。　(一二)

〈これに合わせて王の独舞あり〉

いやさ、差し止めは下知しまいぞ。雨季の徴がそのままに、余が王権の徴をなす今とあらば。——

〈微笑して、「香りに逆上せた云々」と繰り返し舞い〉

いかにと言えば——

洩れ出ずる稲妻は　黄金の垂絹をなして美々しく、雲こそは余が玉座の天蓋。ニチュラ樹は花房を〔余が頭の上に〕払子然とは揺るがせてあり。暑気絶えたればとて一段と声音鋭く、孔雀はすなわち頌徳の伶人。しとどの雨をもたらすに　懸命げなる山々は、多大の財貨を献ずべく　忠勤競う商人連よ。　(一三)

こうっと、王位の尊厳ぶりなど喋々しても始まらぬわ。先ずはこれなる森の中に、愛しき彼女を探すとしよう。

〈群舞再開、語りが終ると囃子唄〉

〽好いた牝象のおらぬまま　悩みは更に募り行き、別離の嘆きに伴のうて　のそりのそりと挙動は鈍く、象群の首領はあげくには　歩みもあえずとなりました——花咲き乱れて派手やかな　お山の森の只中で。　(一四)

〈(とたちまち足拍子ふんで舞台を回り)打ち眺めて、嬉色を浮かべ〉あれよ、あれよ、余が決意のほどはいや増すに到ったぞ。何とならば——

これなる若きカンダリー樹、咲く花に縞条赤く水気はらめば、怒りて内に涙湛えし　彼女が両眼を余に想わしむ。　(一五)

このあたりを通ったはずなどと、いかなればとて余は御女性(にょしょう)が上を判じ得ようか。――
雲の注ぐ雨に白砂の　湿りてし森の平地にあれば、仮に肢体のめでたき彼女〈天女にはあらで人のすなるがごとく〉両の足もて地表に触るる　ことありとせばや　――さもあらば彼女の　臀(いさらい)重うして踵(くびす)方の沈める　可愛(かわ)ゆき一連の足跡が、染みし臙脂(えんじ)の印(しる)も著く　余が目に止まることもあるべけれど。（一六）

(〈足拍子ふんで〉舞台を回り、打ち眺めて嬉色を浮かべ) あれよ、あれよ、見つかったぞ証跡が――
怒りやさんの道行を推量する手懸りが。――
これなるは臍(ほぞ)深く凹める美女の、唇の　紅(くれない)奪い　滾(たぎ)り落つ涙の跡著(しる)く、鸚鵡(おうむ)の胸膚(むなはだ)に似たる黒地の　乳房覆いの薄絹ぞ――　憤怒に歩みの縺(もつ)れるにつれ　ずれて落ちしは疑いなし。（一七）

こうっと、先ずは取り上げて見ようぞ。(舞台を回り、とくと見定めて落涙) 何たることぞ、これは、天道虫(てんとうむし)の群がった瑞々しい芝地であったのか。さらば余は、この林中にあって、いずこより愛しき妹(いも)の消息を仰ぎ得ようぞ。(目に止めて) おお、これなるは、夕立に息づいた山際の岩に登り立ち――
烈しき向かい風に尾羽は踊り、鋭きケーカーの声音(こわね)の宿る　喉元を遠く上に伸ばして、孔雀は雨雲を打ち眺めあり。（一八）

(近寄って) 彼奴(きゃつ)に訊ねて見ようぞ。

〈たちまち起こる囃子唄〉

〽急にげんなりしちゃったわ、敵を防がにゃならぬ身が――誇りに気負うた逸(いち)の象というに、何より愛しい牝象(めす)と　会うて見たやの一念でして。（一九）

〈囃子唄の一方で、群舞。王、独唱〉

〽孔雀よ、余はそちにお願いじゃ。ここな森をさまようちに、ひょっとしてそち　余が愛し女子(おなご)を見かけたならば、そのこと余まで報せてくれい。いいか、ようく聞くのだぞ――月かと紛う顔(かんばせ)に、歩みは白鳥のごとしゃなりしゃなり――これを目印にせば、そち気づくはず。いいな、余はそちに頼んだぞ。（二〇）

〈群舞に合わせ王、坐りこみ合掌して〉

頸青く目尻の白き孔雀鳥よ。これなる森にてそこもと――頸を伸ばして余を待ち望み
目は切れ長に見栄(みば)え良き――女性を見かけしはずなるを。（二一）

〈群舞に合わせて打ち眺め〉

何としたこと、返事も寄こさず踊り出したわ。

〈群舞再開〉

奴は一体、何が嬉しゅうて踊るのかな。ははあ、分ったぞ。――

微風にそよぎ乱るる　濃くも眩しき奴の尾羽は、余が愛しき妹の消え失せたれば、今ぞ無敵の独擅場となりたり。　黒髪めでたき我が妹の　花を挿頭せる髻にして、相愛の戯れに結い目はほぐれ　解けて流れてあらんには、かの孔雀はた如何となすや。（二二）

ままよ、他者の災厄を奇貨となす輩には、それがし問いかけは致すまい。

〈足拍子ふんで四方を打ち眺め〉

おや、こちらには、炎暑が終って発情の火がついた郭公鳥の雌が、木苺の小枝にとまっているわ。あれは、〔己が卵を他の鳥に孵化させるなど、〕鳥どもの中でも要領の良い類よ。ひとつ、あの雌鳥に訊ねてみよう。

〈たちまち起こる囃子唄〉

〽剽軽半神の森に居着いて、苦しみに涙の川を流し出しつつ　胸中の喜びは遠く遥かに打ち去りやって、天の高みを測るがごとく　さまよいまするは象の王。（二三）

〈囃子唄終って群舞〉

おいおい、こらこら――〈王、独唱〉――

〽囀りやさしく愛らしい、天上の森も意のままに　遊んで回る雌郭公よ。もしや、そなた、ひょっとして　何にもまして余に愛しい　女性を見かけられたなら、そのこと余まで報せておくれ、郭公の雌鳥や。（二四）

〈王これを独舞した後、足拍子ふんで近づき、両膝ついて〉

雌鳥殿――

そこもとを世の粋人連は　恋を取り持つ遣手とぞ言う。そこもとは、なびかぬ女子の気位の　高きを挫く必中の矢。何にもまして愛しき　彼女を余がもとに連れ来るか、恋しき彼女の居り場所に　今すぐ余をば連れ行くか、声音やさしきそこもと、いずれかに取り計らって下されい。（二五）

〈左方にわずか身をかしげ、虚空に向けて〉

え、そなた、何と仰せか。「そこまで首ったけの貴方を、どうしてまた御婦人は、打棄って行ってしまわれたの」だと。そなた、聞いて下されよ。――

立腹してぞよ、彼女は。されど一方、立腹の因の当方にありしとは、一度とても余に心当りなし。つまりは、女子が情事において　情夫を踏んづけの仕打ちに及ぶは、ことさら愛情のつまずきを　前提とするものにはあらず。（二六）

〈困惑の体にて坐りこみ、次いで両膝つき「立腹してぞよ云々」と朗詠、見やって〉

何としたこと、話の腰を折ったまま、雌鳥は己が仕事にのみ介意しあるわ。いやさ、かく申すももっともぞよ。――

他人の悩み大ならんとも　我においてか涼しとは、世人の言の至言なるかな。というも

難境に　際会せる余の言い寄りを、あれよ発情に盲いたる雌鳥は　一顧だにせず、大ぶりの木苺の木の　熟れしばかりなる果実をば　唇に接吻さながら　吸い始めしと見ゆるにつけて。（二七）

さらばことほどさようなれど、愛し我が妹のごとく声音涼しとて、かの雌鳥に余は腹を立てまい。そなた、お仕合わせでな。みどもは参るぞ。

〈立ち上がって足拍子ふみ〉舞台を回り打ち眺めて。

おや、木立の南の方に、愛し我が妹の足踏みを思わせる足環の音がするぞ。先ずは、あの音を追うとしよう。

〈王、舞台を回れば、囃子唄〉

〽最愛の牝とはぐれて顔窶れ、絶え間ない涙の雫に目は霞み、耐え難い悩みに足どり縺れ、発熱きつぅて肢体燃え、層一層と心は疼き――森さまようは象の王様。（二八）

〈歌に合わせて群舞。とたちまち王、足拍子ふんで四方を打ち眺める。――囃子唄〉

〽愛しい牝象と生き別れ、きつい憂いの火に焦されて、涙の雫に眼は霞み――逸の象は、途方に暮れて、さまよいまする。（二九）

（悲しげに）ああああ、やれ情けなや。――

四方の空の　雲に暗きを見てとるや、〔雪山の〕マーナサ池に〔帰り行く　時こそ来たれと〕心逸りて、大柄の白鳥ここに啼くなり――足環のさんざめきにはあらず。（三〇）

こうっと。マーナサ池へと逸り立つあの鳥どもが、ここな池から飛び立たぬ間に、愛しき妹の消息を奴らから仰ぐと致そう。

〈足拍子ふんで近づき、両膝ついて〉

のうのう、水鳥の王者よ。――

マーナサ池への帰郷、そこもと、しばし後にとされよ。道中の糧食とての蓮茎は　とまれ口より離し　あらためて銜え直されたい。先立ちては、愛し女性の消息告げて、それがしを　憂いより救うてたもれ。――心ばせ善き人士には、言い寄る人の役に立つこそ己が為より重しとなん。（三一）

（横目でうかがい）やや、奴は顔上向けて天を仰ぐ目つきからしても、明らかに「こちとらは旅に心はやって、女など見かけなかったぞ」と申しておるわ。

〈王、坐りこめば、群舞起こる〉

〽やいやい白鳥、隠し立てするか。〔歌節中断〕

〈王は独唱・独舞して立ち上がり〉

眉まろやかに美わしき　余が愛し女性の、池の堤にて、白鳥よ、そちが目に入らざりしとせば、陶酔に千鳥足なる　彼女が歩みことごとくをば、盗人よ、そちいかにして学び取り

しか。

〈群舞再開。王、独唱〉

〽足どりの真似を見れば、余の目に狂いはないものぞ。〔歌節中断〕 (三二)

〈群舞に合わせ、近づいて合掌〉

白鳥よ、余に恋人を差し戻せ。そちは彼女が歩みぶりを　奪いたるなり。――けだし被告は、〔物件の〕一部につきて　〔不法所有の〕確認されしとき、係争物件〔全体〕の　返却に及ぶべきものぞ。 (三三)

〈群舞再開〉〔歌節再開〉

〽何時のことか、その艶やかな歩みぶりを　汝が学び取ったのは――臀の重みに動きの鈍い　彼女を汝が見かけたのは。 (三四)

〈群舞再開。王、「白鳥よ、余に恋人を云々」と朗詠、足拍子ふんでしげしげと見〉

〈苦笑して〉「こりゃ盗人を成敗なさる王様じゃ」と恐れをなして、奴は飛び立ってしもうたわ。先ずは、森を踏み分けて、別な開豁地に出るとしよう。

〈足拍子ふんで〉舞台を回り、打ち眺めて〉おや、愛し妻鳥と連れ立った鶩鶩がいるぞ。先ずは奴めに訊ねてみよう。

〈たちまち起る囃子唄、次いで群舞〉

〽葉ずれの音に心とろかせ、めでたき木々の若枝は　花も盛りの森の中、さまよいまするは象の王様――愛し牝象とはぐれ狂うて。 (三五)

〈王、独唱〉

〽牛黄のクリーム色した鶩鶩よ、身共に言うておくれよ、な　――ろうたき身共の奥方が　池辺で遊んでおるのをば、そちはお見かけなかったか。 (三六)

〈群舞に合わせ〉近寄り、膝ついて――

車輪〔チャクラ〕を名乗るそこもとよ、　これなるは、戦車駆る身の武士、臀円きは車輪のごとき　美女に去られてし今　空しき望みの千々に暮れて、そこもと〔の縁〕を頼りに下問致すぞ。 (三七)

――「誰ぞ、誰かな」とばかり申しおるわ。此奴には余が分らぬと見える。――母〔イラー〕方にては日神〔ミトラ〕、父〔ブダ〕方にては月神〔ソーマ〕、それぞれを祖父にいただき、――自らは〔天女〕ウルヴァシーと大地〔女神〕と　双つながらに選ばれし主ぞ。 (三八)

――何と、黙りこくっておるわ。ようし、ひとつ奴めをば咎めて見ようぞ。〈膝ついて〉ここは己が身より類推して、振舞われるが至当なるを。というは――

そこもとは妻鳥が　池の蓮葉に身隠れたるのみなるを、遠く離れしと心得て傷心しきり、啼き叫ぶにはあらざるか。　妻女に対する情愛ゆえに　離別に怯ゆるはかくまでの御身な

るに、余が離別に困ずるのとき　何ぞかくは情のつれなき――事態の報に顔をそむけて。　(三九)

(坐りこんで)何にしても、これ身共が逆運の仕儀に他ならぬわ。先ずは、森を踏み分けて、別な開豁地に出るとしよう。

(一歩して立ち止まり)こうっと、しばらく行くのは見合わせた。(〈足拍子ふんで〉舞台を回り、打ち眺めて)おお――

今し余を控え止むるは、これなる紅き蓮の花ぞ――蜂のざわめき内に籠りて。　余が紅唇を吸いて囓まんか、抑えし悲鳴の洩れ出ずる　彼女が口許さながらに。　(四〇)

〔軽々に〕ここを立ち去って後悔することのないよう、紅蓮に侍する蜂の奴めに、言い寄りを致してみようぞ。

〈この間に囃子唄〉

〽いちどきに　高まり断たれましたるだけに、純愛の　情味いや増す恋のまにまに、あれよ若き白鳥は　池に戯れ気を遣りまする。　(四一)

(〈身振りあって〉坐りこみ、合掌して)――

うっとりさせる眼差の　かの美女が消息を、　蜂よ、告げ給えかし。　いやさ、お見かけではなかったな、姿秀でし余が愛しの妹を。――　かぐわしき彼女が口の息吹きの香を　そこもと仮に吸いしとなら、たかがこれなる蓮ごときに　そこもとの熱中あろうものかよ。　(四二)

(〈足拍子ふんで〉舞台を回り、打ち眺めて)あれに象の王者が、牝象と連れ立って、ニーパ樹の幹に鼻を寄せかけているわ。愛し吾妹の消息は、彼から入手できようぞ。先ずは近寄るとしよう。

〈囃子唄、起こる〉

〽森のさなかで、牝象とはぐれ　悶えます方〔象王〕はといえば、〔身熱に酔液の乾上がった〕　こめかみから蜂どもが　〔もはや用なしと〕飛び立つ構え。　(四三)

(〈この間に王は〉打ち眺めて)いやさ、今しばらくは、近寄る折柄ではあるまい。――

最愛の牝象の鼻先きによりて　捧げらるるは〔大好物〕サッラキーの蔓枝――新芽吹出でしばかりにて　汁液の香ぐわしきは美酒のごとき――、先ずはこれを食るとされよ。　(四四)

(〈身振りあって〉打ち眺め)おお、彼は食事をすませたわ。ようし、傍に寄って訊ねてみよう。

〈たちまち起る群舞、合わせて王は独唱〉

〽わしゃおぬしに訊ねるぞ――嬉々とした牙の一突きで　美事な樹をほふる美事な象よ――言うておくれ。輝き月をも遥かに凌ぐ　愛し吾妹が、目の前を　過ぎて行くのを見かけたかな。　(四五)

(二歩前に乗り出して)——

微かなる睦音を洩らす象群の主よ、新月の弦かと見ゆる手弱女が　女郎花の黄に髪は斑ら——(天女とて)青春不易、見目こころよく——、そこもとの視界遠くに　ありたるとよな。（四六）

(嬉しげに耳傾けて)あああああ、この低き喉元のうめきは、愛しき妹を見しと告げて、全き安堵を余にもたらしたるぞ。しかも余がそこもとに対する友愛は、属性を共にするがゆえに一層のものあり。——

余をば指して世人は　大地守護者中の統領と称し、御身は(名を大地にちなむ)象族の覇王たり。御身には、求め寄る蜂どもに対し　たわわなる発露の絶ゆるなき　酔液あれば、求め寄る赤貧の徒に　余が施しもまた然るなり。秀れし妻妾の数あるうちに、余にありてはウルヴァシー、そこもとにありてはここなる牝象　こそが最愛の女性。——そこもとの万端は余に似てあれど、さればとてそこもと、愛しき妹との別離にかかる　辛労のみは嘗むることなかれ。（四七）

さらばじゃ、御身に多幸あれかし。

(〈足拍子ふんで〉舞台を回り、打ち眺めて)やあ、あれに見えるは「香渓岳」と呼ぶ格別に結構な、天女らが好んで訪れる山ではないか。願わくは姿良き彼女が、この山の裾野で見つかるように。(舞台を回り、打ち眺めて)何と、暗闇になったわ。ままよ、稲妻が照し出せば余の目も利こうぞ。やや、余が積る罪障の因果か、雨雲の隆起に稲妻はなし、となったではないか。さはあれど、かの岩山に訊ねずしては、余は引き下がるまいぞ。

〈たちまち起こる囃子唄〉

〽森の茂みに隠れても、御覧なさいな、猪は——おっかない爪を伸ばして　地面を穿ち　余念なく、自分の仕事に懸命で　あちこち這いずり回ります。（四八）

裾野の広き山岳よ、ここなる御身が森の内　愛神の館なすあたりに、両の乳房の合間は狭く　節々の凹みふくよか　臀円き御女性が、寄りついて在わしまそうが。（四九）

何と、黙りこくったままじゃ。距離が遠くて聞こえぬのかな。ようし、傍に近寄り問うてみよう。

〈たちまち起こる群舞、王は独唱〉

〽水晶岩の河床に渓流は無垢　種々の花の織りなす宝冠いただき　天人の雅歌に心を魅する山、最愛の吾妹に会わせて下され。（五〇）

ありとある山々の統領よ、めでたきこの森の外れにて、総身美わしき女房の　みどもとはぐれたる者が、そこもとの目に入りたるか。（五一）

(そのままに木霊するのを聞きつけ、耳傾けて嬉しげに)何と、語順そのままに、「〔……そこもととは

ぐれたる者が、みどもの」目に入りたるぞ」と言うておるわ。ようし、しかと見定めようぞ。
（四方を打ち眺め、憮然として）何だ、こりゃ余自身の声が、谷間になびいての山彦じゃわ。
（失神卒倒、やがて起き上がって坐りこみ、悄然として）あああ、余は疲れた。しばし、この谷川の岸辺で、涼しい波風に当たるとしよう。（〈足拍子ふんで〉舞台を回り、打ち眺めて）降ったばかりの雨水に濁る、この水流を目にすれば今、余は艶な気持を覚えることよ。というは――

〽逆巻く波は顰めたる眉、立ち騒ぐ鳥の列なりは〔鈴垂れし〕飾り帯、ふとした夫の〔重意―岩にせかれし〕つまずきを　幾度ともなく思い返し〔重意―乗り越え〕ては　曲りくねって歩むとあらば、――癇癖の強き彼女が、これなる川に化しあるは必定。（五二）

こうっと、先ずは彼女の御機嫌を取り結ぼう。

〈直ちに王、独唱〉

〽これこのとおりの平伏に免じ、静澄に復して下されい、余が最愛の女性なる川よ――
つれない鳥ども立ち騒ぎ、羚羊は天下る聖恒河の岸に憬れ、群なす蜂の音さんざめく川よ。（五三）

〈同じく独唱の間に、群舞起こる〉

〽河水の集う大海原は　映る雲影が手足さながら　目も鮮やかに舞いを舞う――東風に打たれて騒ぐ波柱　振り上げられた腕のごとく、鵠の鳥に紅殻貝は　装身具とはなっ

て美々しく、根を求め象・鰐鮫の群がった　青蓮を衣裳にまとい、岸に砕ける逆浪に手拍子とりつつ。――ようやくに訪れた雨雲の季節は、伸び敷いて十方を鎖す。（五四）

（〈群舞に合わせて〉近寄り、両膝ついて）――

そこもとに情を注ぐや固く、意を迎うべく言辞に気配り絶えず、背信沙汰なぞ思いのほかなる　それがしが側に、そこもと一体　いかなる落度を認めらるるや――癇癖きつき御方よ、鞠躬如の余輩を捨て給うとは。（五五）

何と、黙りこくったままじゃ。いやさ、こりゃ正真正銘の川、ウルヴァシーではないわ。そもそもさようでないならば、プルーラヴァスを打ち棄てて、大海への恋路に走ったりするものかよ。ところで幸福というもの、幻滅に安住しては得られまい。こうっと――目許美わしき彼女が、あのとき余の両目より消えた、当の地点に戻るとしようか。（舞台を回り、打ち眺めて）こなたに坐しある羚羊に、先ずは愛しき妹の消息を求めよう。

〈歌節合唱〉

〽瑞々し　花房たわわの如意宝樹をめぐり　睦音微かな郭公の　囀りさんざめき心を奪う〔インドラ神の　天上楽園〕歓喜の森を、〔主神の乗御〕アイラーヴァタなる象の王者は、愛し牝象と隔てられたる　悲哀の炎に悶えさまよう。（五六）

（両膝ついて）――

黒く斑らの膚艶なせる　これなる鹿は、さながらに森の女神が　森〔という己が身〕の美を検閲せんと　走らせし流し目のごと。　（五七）

（見やって）——

他のものには目もくれずして　今し彼が見つめる先は、傍らに来たらんとする途次　乳房をふくむ仔鹿によりて　歩み妨げられし牝鹿の姿。　（五八）

〈上歌に合わせて王は独舞、続いて群舞起こり、王は独唱〉

〽空色に映ゆる林中を　さまよい歩く間にそこもと　見かけたろうが——腰の重みに懈怠げな、胸の辺は豊かに高くかつ締り、肢体は細く、白鳥のごと歩み緩やか、あどけなき目は鹿のごと、青春不易の美わしき天女を。——さらば、別離の大海中に　溺れる身共を救い上げてよ。　（五九）

（近寄って、合掌し）もうし、鹿の統領よ——

そこもと、森にて、愛し吾妹を　見かけられしにあらざるか。彼女を見分くる手懸りを、そこもとに伝えようぞ、聞き給え——　そこもとに連れ添う牝鹿　伸びて大きな目をなしあるが、恵まれし天性の彼女また　正にさようの容姿とは見ゆ。　（六〇）

（見やって）何と、余が語には一顧だにせず、妻女に顔向けたままじゃわ。何かにつけてもともの次第よ——運勢の拙なければ、侮りを招くのみなるぞ。先ずは森を踏み分けて、別な

開豁地に出ると致そう。

（舞台を回り、打ち眺めて）おお、彼女が道程をうかがわせる手懸りが見つかったぞ。——

〔雨季の今は花も盛りの〕　紅カダンバ樹があれに見ゆるが、これなるは〔先立ちて〕その花の一つを——夏の終りを思わせて　蕊いまだ揃わず角立ちたるに——彼女が挿頭にはなさんと〔て手折り〕し〔後に、打ち棄てて去り〕たるものか。　（六一）

（舞台を回り、打ち眺めて）それにしても岩の裂目にはざかって、やたら赤く見えるのは、一体こりゃ何だろう。——

輝きの上塗りあれば、獅子の一撃に仆れたる　象の肉片にはあらず。熾火の火花ならんには、ここな茂みは雨にしとどぞ。やや、これなるは宝珠ぞよ——紅アショーカ樹の花房に　等しき色合い帯びたるが上に、日神が〔光線の〕手を垂れ伸ばして　そを撮み上げんと懸命のごとく。　（六二）

こうっと、先ずは取り上げて見よう。（摑み取る所作あり）

〈囃子唄、起こる〉

〽なびき親しんだ牝象の上に　望みの綱を懸けて一筋、己が目は涙にかすみ、悶え苦しんで顔やつれ、深い森の只中を　象の王様さまよいまする。　（六三）

〈足拍子ふんで〉坐りこみ、手に握りつつ独白〉——

珊瑚樹の花を挿頭して馨しき　彼女が髻の上にこそは　この品つけて進ずべけれど、愛しき妹その人　今の余には達し難し。——この品を余はいたずらに　涙に損じたるものとはしまじ。（とて投げ棄てる）　(六四)

舞台裏に声。

——和子よ、手に持っておられよ、持っておられよ。——

ここな宝珠は「出会い石」とて、雪山の娘にましますシヴァの妻、パールヴァティー女神の御足に刷かれてし　臙脂の凝りて成れるものにて、捧持されんかたちまちに　愛人との出会いをもたらすなり。——　(六五)

王　（耳傾けて）かく余に御示教を賜るは、そも何人なるか。（四方を打ち眺めて）おお、尊き遊行のとある聖者が、余に憐れみを垂れ給うぞ。尊者よ、御身の御教示、有り難き仕合わせにござる。（宝珠を取り上げ）やよ、出会い石よ——

胴元くびれ低みたる　かの手弱女と　はぐれてし余の再会に　そこもと資するところあらんとなら、シヴァ大神の新月におけるごと、余は御身をば自らの　髷にいただく宝珠とはなさん。　(六六)

（舞台を回り、打ち眺めて）どうしてかな一体、これなる蔓草は花もないというに、目にしあれば余は艶心を覚えるぞ。いやさ、余が心の艶めくもむべかな。というは、この細き蔓草たるや——

雨に新芽の瑞々しければ、手弱女の紅唇　涙に洗われしがごとく、——その時にはあらずとて、花吹き出だすをやめたるは、装身の具をば脱したるごと、——蜂ども寄らずして響きなければ、思いに耽りて沈黙の風情　——気色損じて物狂おしく　平身低頭の余を振りはらいし後に、後悔の念を覚えたる　彼女なるかと見ゆるなり。　(六七)

（王、独唱）

〽蔓草よ、お目にかかれば胸に迫って　それがし感慨を強うしますぞ。もしも運勢の計らいで　再び彼女を手にしましたら、それがし抜かりなく情をかけて　二度とは起こらぬよう致しましょうぞ——彼女があのように思いこみ　打ち棄て去るといった始末は。　(六八)

（〈群舞に合わせて〉近寄り、蔓草を抱擁する。〔と後者は消え〕これに取って代ってウルヴァシー登場〔抱擁を受ける〕）

王　（眼を閉ざし、手に膚触りを感ずる所作あって）おや、ウルヴァシーの肢体に触れてのごとく、余の身体が和んだわ。といって安心はならぬ。何となれば——

先立ちて余が　愛しき吾妹が上に　揣摩せしものは、須臾にして余に空しくも　さにはあらずと化するなり。されば余は、手触りに　吾妹あるかとは想えども、急には両の目を開

いては見まじ。

（そろりそろりと目を見開いて）何と、まことやウルヴァシーなるぞ。（とて昏倒する）（六九）

ウルヴァシー　お気を確かに、お気を確かになされませ、大王様。

王　（意識を取り戻し）愛しき妹よ、今こそは生ける印あり。——

勘気の猛き御女性よ、そなたとの別離に生じたる　闇黒に溺れんとしある余に、あなめでたや、そこもとが　立ち戻ることとはなれり——息絶えし人に正気　蘇るがごとく。（七〇）

ウルヴァシー　お宥し下さいませ、お宥しを、大王様——怒りに任せて妾、大王様をかくも異様の目にお遭わせしましたとは。

王　とんでもないぞ、そなたが余に静慮を乞わるるなどとは。そなたを一目するのみにて余が心は、内外の感官こぞって静謐を得し次第なれば。さらば語られよ——かくも長期間、そなたは余と離れていかに御消光なりしか。

〈たちまち群舞起こり、王は独唱〉

〽孔雀・郭公・白鳥・鴛鴦・蜂・象・山・川・鹿のいずれにも、そこもとにつき言問わいでか——哭き哭き森をさまよいつつ余は。（七一）

ウルヴァシー　さようにございました、内なる感官に映じましたる大王様は。

王　愛しき妹よ、内なる感官との仰せは余の腑に落ちぬが。

ウルヴァシー　お聞き下さいませ、大王様。そのかみ尊き（シヴァの御子息、クマーラ）大軍神におかれましては、終生童貞の誓願を結び、ここ「無濁」と申します芳香陶然の沢に居を構え、そして定めの布令に及ばれました。

王　はて、どのような定めかな。

ウルヴァシー　この地に来たる女性あらんか、彼女の身は蔓草に変じ、（我が母者人なる）ガウリー女神の御足に起源する宝珠なき限りは、蔓草の境涯を脱せざるべし——との由にござります。その後に到りまして妾は、師父（バラタ仙）の呪いに心くらみまして、神慮の禁令を失念、我ら女性の避けるべきクマーラ神苑に踏みこんでしまいました。して踏みこみますやたちまち、妾の外姿は森の際なる蔓草の様に化しましたる次第。

王　愛しき妹よ、仰せの一部始終はむべなるかなよ。——

愛の戯れにしばし疲れて　余が臥床に眠りあるさえ、長旅に不在のごとく嘆かれし御身、かようなる境涯にての久しき別れを　いかでかここに耐え得られしものぞ。（七二）

しかるを、先刻お言葉にありしがごとき出会いのよすが、再会もたらす威光ありというもの、そを身共はこのとおり手に入れたれば。（とて宝珠を見せる）

ウルヴァシー　あれまあ、これは「出会い石」。なればこそ妾は、大王様の抱擁に接しましたばかりで、本来の姿に立ち戻りましたか。

王　（愛人の眉間に宝珠を置いて）――
額に据えられし宝玉の　閃く茜色を鏤めて、今しそなたの顔は、相愛の朝日に触れし
紅蓮の栄えを呈しあり。（七三）

ウルヴァシー　まあ、お上手をおっしゃって。ところで我らが国都プラティスターナを立ち出でましてからは、よほどの時が経っておりまする。臣下たちとても、いつかは不平をかこつかも知れませぬ。であれば、さあ、帰途につきましょうぞ。

王　御身の仰せのままに。（両者、立ち上がる）

ウルヴァシー　さて、大王様には、いかなる道行きをお望みでしょうか。

王　――
歩み意のままなる天女の上よ、ほどもなく射して出ずべき稲妻に　旌旗翩翻の様をなし、
虹をば新調の絵とて美々しき、立ち昇りたるばかりなる雨雲を　天翔ける花車とはし給いて、余を乗せ居城へと導かれたし。（七四）

（群舞伴ない囃子唄）
〽連れ合いとの出会いを遂げて、膚毛立つ歓喜に肢体飾られ、望んだとおりに天車に乗って、若き白鳥はお楽しみです。（七五）

（群舞に合わせ）両者、退場。

第五幕

喜色満面の道化、登場。

道化　やれやれ、めでたやな、歓喜林を皮切りに各地をウルヴァシー同行で周遊、久方ぶりに親しい相棒殿がお戻りじゃて。して今は、家来どももそれぞれに任務を仕込まれ、もって衆庶一同の心服を博しつつ王国を御統治よ。日嗣の御子がまだという一事以外は、歎くにあたることと何もない状況。今日はまた特別な暦日とて、ガンガー、ヤムナーの尊き両河が合する聖地（プラヤーガ）で妃がたともども沐浴を修し、今しがた幕舎に入られたところじゃ。で、先ずはこちとら、かの御方の身繕いなさるに、（余った）膏や花の類いを一番に頂戴しようぞ。

（舞台を回る）

舞台裏に声。

――まあ大変、大変、禿鷹に攫われたあ、何より大事な挿頭の宝珠が――薄絹かぶせた棕櫚葉の受け皿に収めて、天女の筋ひく婀娜なる女御にお届けするところを。――

道化　（耳傾けて）めっそうもない、相棒殿の思し召し格別な挿頭の宝珠「出会い石」のことよ。

されば装束の着付けもそこそこに、かの御方は座をお立ちじゃ。こちとらも側近に侍るとしよう。

王、応急の供回りと登場。

王　——

先刻は〔場所も場所、〕護民官の家にて盗み働き、手中にしあるは〔宝物にあらで、〕己が身の死刑たるべき、盗賊鳥とやらはいずこなるぞ。　(一)

山窩女　あれ、あそこに飛び交いまする——金鎖が嘴の先に懸った宝珠でもって、虚空を染め上げるかのように。

王　見えたぞ。——

あれなる鳥は、黄金の緒の口に垂れたる紅玉持して　円き高速の飛行をなせば、松明の描く火輪かと見ゆる　赤色の環を現出しあり。　(二)

さていかがしたものかな。

道化　(進み寄って)おお、この際は憐れみは無用ぞ。不届き者には、お仕置きじゃ。

王　おぬし、よくも申された。弓を、弓をもて。

供回り一同　御主君の仰せ、かしこまりました。(とて退場)

王　見えなくなったぞ、鳥は。

道化　こっちじゃ、南方の天空の際をウロチョロしおるわ、あの鳥の野郎は。

王　(向き直って打ち眺め)今度は見えたぞ。——

あれに鳥は、光彩を新芽と息吹く宝珠によりて、方位女神の顔に　無憂樹の花房もて耳飾りなすごと。　(三)

希臘女　(弓を手に登場)弓はこれに、籠手も添えてございます。

王　弓も今は役立たずじゃ。生肉喰いの奴めは、矢の射程の外に出でたれば。というは——

今や宝珠の逸品は　鳥に遠く持ち去られ、夜空にありて〔赤き〕火星が　烈しき密雲の切れに合せるかと見ゆ。　(四)

(後宮執事を見やり)ラータヴィヤ殿、余が言葉とて警視総監に伝えよ——「窃盗鳥が夕刻、巣籠りの木に寄りつくところを追捕せよ」——と。

後宮執事　陛下の御命、かしこまって候。(とて退場)

道化　こうとなれば、そなた、腰下しなされ。どこへ行ったとて、もう宝物泥棒めは、そなたの御成敗をまぬかれはしまいて。

王　(道化とともに着座して)——

鳥の攫いしかの珠玉に　余が親愛の念を寄するは、高値の宝物とてにはあらず。友よ、かの「出会いの石」が　愛しき妹との再会を　余に叶えたればこそなるぞ。　(五)

執事、宝珠に矢を添えて持ち、登場。

執事　陛下の御盛運を。――

これなる矢に結晶の　君が逆鱗に身軀穿たれ、不届きに相応の御成敗受けて　中空より落下せし次第――かの死罪犯なる鳥の奴めは、宝冠の珠玉もろともに。　(六)

一同、仰天の様を呈する。

執事　宝珠は水洗い致しましたるが、さて、どなたにお渡ししたものでござろうか。

王　山窩女よ、火もて浄めたる後、宝筐に収めると致せ。

山窩女　御主君の御命のごとく。(宝珠を受け取り、退場)

王　ラータヴィヤよ、これなる矢が誰のものかは、御身には分かっておろうな。

執事　矢には名の銘ありと見受けますが、それがしの老眼は文字の判読に耐えませぬ。

王　ならば、矢をこれに寄こせ。

執事、指示に従う。王、名を刻んだ字を黙読して、嗣子を得た喜びの情を呈する。

執事　では、それがし、役向きに疎漏なきよう致しましょうぞ。(退場)

道化　そなたは何を考えこんでおいでじゃ。

王　先ずは聞かれい、矢を射かけし者の名を。(朗読する)――

「これなるは、イラーの子〔プルーラヴァス〕が　ウルヴァシーの腹にもうけし男児、　敵手

の寿命を撃破する弓の達人、　アーユス童子が矢なり。」　(七)

道化　(満悦げに)やれめでたや、そなたには、跡取りが出来て一段の御盛運。

王　友よ、これは何としたことか。余はナイミシャ聖林での長期祭典に参列しあった以外、ウルヴァシーと離れた間とてなく、また彼女に懐妊の異常も見かけなかったのに、一体いずれの方にて子を生んだのか。ただし――

あの〔余が旅立ちの〕日頃、彼女が容姿は――　乳房の先は黒ずみ、顔色はラヴァリー草のごとく仄白、いささか眼差し物憂げ――にてありき。　(八)

道化　人間の女子にあることを一々、天女衆に想うて見たって始まりませんぜ。あれらの所行は、超能力で隠されてますものな。

王　御身の申さるるとおりと、一応はしよう。それにしても、男児を余から隔てるとは、彼女の動機は那辺にあったか。

道化　「子持ちの年増とて妾を、王様がお見限りにならぬよう」、と思うてじゃが。

王　冗談じゃないぞ、一つ考えて見てくれい。

道化　神様方の秘事は、誰に見当がつくものかいな。

執事、登場。

執事　陛下の御盛運を。陛下、チャヴァナ仙の修院より、童子を連れて修験女が参りましてご

ざる。陛下に拝謁を望みおりまするが。

王　両名とも即刻に通すがよい。

執事　陛下の御命のごとく。（退場）

弓を手にする童子ならびに修験女を伴なって執事、登場。

執事　御婦人、こちら、こちらへ参られい。

三者、舞台を回る。

道化　（見やって）あれこそは、先刻の矢――禿鷹の的を射抜いた半月鏃の矢――に名を刻む若武者、じゃなかろうかて。えらく御方様に似て見えるが。

王　さもありなん。なればこそ――

余が眼は、彼が上に落つるや、涙ぐむなり。胸は慈愛の情逼り、意は喜びの念に和む。して余は挙措に自若を失し、震いの生じたる全身にて　容赦なく彼を　抱きすくめんと欲す。　（九）

執事　尼殿、そのままでお控えあれ。

修験女と童子、立ち止まってあり。

王　尼殿、それがし御挨拶申し上ぐる。

修験女　大王よ、月種一門の伸張者たれかし。（独白）これなる王仙とアーユスとには、言わず

もがなに分明なろうぞ、実の親子の関係は。（声に出して）坊や、そなたの長上に拝礼なされ。

童子、弓を手挟んで合掌する。

王　聖寿を〔言祝がれ〕保〔つ王者〕たれよ。

童子　（独白）――

これなるは我が父、我は彼が子、と聞くとだに　かくも親しみの胸に逼るとあらば、長上の膝下に育ちし子らの　情愛たるやいかばかりか。　（一〇）

王　尼殿、御光来の用件は。

修験女　聞こし召されよ、大王殿。長き天寿に恵まれし彼アーユスを、ウルヴァシーは出誕早々、とある名目を顧慮して妾の手に托されました。戦士の童子に定めの生誕式その他の儀一切、尊きチャヴァナ仙が彼に施されてございます。聖なる学を授かり、軍事学の訓育も怠りございませぬ。

王　心強い身の上とはなったな、正に就くべき師に就いて。

修験女　さて本日は、聖仙の子たちと花や薪の採集に赴きましたところ、この子は修院の〔不殺生の〕定めとは相容れぬ仕儀に及びました。

道化　はて、どんな風なことかいな。

尼　肉片をくわえた禿鷹が木の頂上にとまっておりますのを、矢で狙ったと申します。

道化、王の顔をうかがう。

王　して、それから。

修験女　さて尊きチャヴァナ仙は、一部始終を耳になされますや、妾に「預りものを返却して参れ」と仰せ出されました。されば妾は、只今ウルヴァシーに会いたく存じまする。

王　とあらば尼殿、御着座の栄を賜りたい。

修験女、召使の進める座に腰下す。

王　ラータヴィヤよ、ウルヴァシーを呼んで参れ。

執事　陛下の御命のごとく。（退場）

王　（童子を打ち眺めて）いざ、参られい、和子よ。——

子の膚に触れなば、歓喜全身に走るとぞ言う。されば近うに寄りて、月光の月光石に対するがごと、先ずは（身の溶けんばかりに）余を喜ばせてたもれ。　（二）

修験女　坊や、父上をお喜ばせなされ。

童子、王に近寄り、両足を掻き抱く。

王　（童子を抱きしめて、床机に坐らせ）和子よ、こなたに控えあるは、そちの父者人に親しき友なる婆羅門、（異様の面相）こわがらずに挨拶されよ。

道化　こわがりなぞするものか。修院暮らしの連中にゃ、猿公はとくとお馴染じゃわ。

童子　（微笑して）小父さん、今日は。

道化　御身に清祥あれよかし。

ウルヴァシーと執事、登場。

執事　奥方、こちらへ、こちらへ。

ウルヴァシー　（童子を打ち眺め）あれは一体、誰かしら——弓を手にして床机を賜り、大王様が御自ら髷を結ってやっておられるのは。（修験女を目にして）あらまあ、サティヤヴァティー尼で分かったわ、妾が息子アーユスだと。本当に大きくなったこと。（舞台を回る）

王　（ウルヴァシーを目にして）和子よ——

そちの母者人が参られたるぞ、そちを見んとの一念に逸り、情愛に吹き出づる乳の汗しとどなる肌衣まといて。　（三）

修験女　さあ坊や、母親をお立ち迎えあれ。

童子、ウルヴァシーを迎えて起立。

ウルヴァシー　刀自よ、足下に拝礼し奉ります。

修験女　娘や、御夫君の寵をかたじけなくされよ。

童子　母上、御挨拶つかまつります。

ウルヴァシー　（童子の顔を上向かせ、抱きしめて）和子よ、父君のお眼鏡に叶うてあられよ。（王に

進み寄り）大王様の御盛運を。

王　よくぞ参られた、男児の母者人には。こなたに座されよ。（半座を頒ち与える）

ウルヴァシー、着席。一同、身分に応じ座す。

修験女　彼アーユスは聖なる学を修め、今や甲冑帯びる年頃とはなりました。されば、手許に預かって参りましたもの、そなたの御夫君立会いの下で、返却に及びましたぞ。では、お暇を頂戴したく——妾の修院での勤行に差し支えますので。

ウルヴァシー　久々にお目にかかりまして、はやお別れとは、誠にもって遣瀬のうございますが、勤行にお邪魔となるわけには参りませぬ。では、尼刀自にはお立ちなされませ、他日お目にかかりましょうぞ。

王　刀自よ、尊きチャヴァナ仙に、余が跪拝をお執りなしあれ。

修験女　心得ましてござる。

童子　尼様、本当に帰られるのなら、僕も修院へ連れて行ってよ。

王　和子よ、そちは第一の住期〔学習期〕を修しおえて、今や第二のそれ〔家長期〕に入るべき折ぞ。

修験女　坊や、長上のお言葉どおりになされ。

童子　それならば——

我が膝に乗せ　鶏冠を掻いてやりたれば　心地よがりて睡り入りし　幼き孔雀マニカンタ

カ——尾羽の伸びし暁には、彼を我が許に差し向けてかし。（一三）

修験女　（微笑して）そうしますとも。そなたに清祥あらんことを。（退場）

王　多幸なる吾妹よ——

そこもとの英邁の子　あれにしあれば、今ぞ余は、男児に恵まれし　父親どもの筆頭者ぞ——プローマンの息女〔シャチー妃〕の　腹に成る〔男児〕ジャヤンタを得て、城塞破砕者〔インドラ神〕の　しかありしがごとく。（一四）

ウルヴァシー、想い出して涕泣。

道化　こりゃ一体どうしたこと、御方様は急に涙顔になられたわ。

王　（不安に駆られて）——

社稷の安定を見たればとて　余が随喜に及ぶ折も折、美女よ、などてか泣き出さるるぞ——豊満にして高まれる胸元を　たばしり落つる涙もて、首より垂るる真珠の緒をば　二重に設くるの愚を犯しつつ。（一五）

彼女の涙を拭ってやる。

ウルヴァシー　聞こし召しませ、大王様。先刻は、息子に会うて生じましたる歓喜のゆえに、打ち忘れておったのでございますが、只今はたまたまインドラ大神の名に及ばれますると、お約束の件が妾の胸を責めてなりませぬ。

王　約束とやらを語られたい。

ウルヴァシー　そのかみ、大王様に心を捉えられました折、妾はインドラ大神の仰せを受けましてございます。

王　何と仰せであったか。

ウルヴァシー　「かの我が親しき僚友が、そちの腹に生れし継嗣の顔を見るに到らば、そちは、そのとき、再び我が側近に帰来すべし」と。で、妾は、大王様との離別を恐れるのあまり、男児が生れますとすぐ、聖なる学の授受を名目に、尊きチャヴァナ仙の修院なるサティヤヴァティー刀自の手に、人知れず預けることと致しました。さて本日、生父の歓心を博するに足る年頃になった、と刀自は思し召しまして、長寿の吉相しるき和子を妾に返されてございます。されば妾が、大王様と居を共に致しますのも、ここまでという次第にて。

　一同、悄然の様を呈する。

王　（ため息ついて）おお、運命は幸いの逆を望むことか。——
　男児を得て　余の安堵せる矢先を、　胴くびれし美女よ、だしぬけに　そこもととの別離が
出来——　雲が雨降らし初むれば　炎暑の患をまぬかれし矢先、　喬木を雷火の襲うがごと
く。　（一六）

道化　こりゃ、利が不利と裏腹になったわ。こうともなりりゃ、わっしの思うに、御方様は木の

皮衣をまとい、修院入りしかあるめえ。

ウルヴァシー　運勢つたなき妾につきましては、大王様、訓育成りし男児を引き取って後に天上界へ戻るのでござりますれば、とまれ務めを全うしたものとお心得下さいませ。

王　などとは申すまいぞ。——
　宮仕えの身なるものは　〔肉親との〕辛き別れもしばしば、　己が望みの一存に任さず。そこもとは、御主君〔インドラ〕の命に従われよ。余とては、そこもとの実子なるアーユスに
　王位を委ね、　鹿の群が去来するなる　森林各地を寄る辺となさん。　（一七）

童子　お父様、それはなりませぬ——屈強の雄牛が支えて来た轅に、調教もまだの若牛を繋ぐなどとは。

王　おお、和子よ——
　香象は仔象なりとも　他の群象を能く統御す。　蛇の仔の猛毒たるや　循環の勢い特に烈しとぞ。　天下人は、幼少なりとも、　大地を隈なく守護し得るなり。　己が任務に耐うる貫禄なるもの、そは年齢にあらずして天賦にぞ由る。　（一八）
ラータヴィヤよ、余が言葉とて閣僚一同に伝えよ——「アーユスの国王即位式を取り計らわれたし」——と。

執事　陛下の御命のごとくに。（浮かぬげにて退場）

一同、眩(まぶ)しさに目くるめく様を呈する。

王　(虚空を打ち眺めて)どうしたことか、雲もないのに急に電光が生ずるとは。

ウルヴァシー　(見やって)あれまあ、尊きナーラダ仙が。

王　おお、尊きナーラダ仙ぞ。かの御方たるや、あれに——

たわわなる蓬髪は　試金石に走る　牛黄(ごおう)の条(すじ)のごと赤褐、　帯び給う聖索は　新月の弦の
ごと無垢、　美粧の栄えは　真珠の首飾りにて　いやが上にも充全、　さながら天上の如意
宝樹が　黄金の新芽吹き歩み出でしかとぞ見ゆ。　(一九)

こなたに奉迎の品一式をもて。

ウルヴァシー　(指示のごとき品を捧持して)これにございます、聖仙奉迎の品一式は。

ナーラダ仙、登場。

王　(ウルヴァシーの手から品一式を受け取り、散布・奉献して)尊者よ、それがし御挨拶申し上げまする。

ウルヴァシー　尊者よ、拝礼つかまつります。

ナーラダ　御両所には、不離なる夫妻にてあられんことを。

王　(独白)さもありたきものよ。(童子を引き寄せ、声に出して)和子(わこ)よ、尊き御方に御挨拶されい。

童子　尊者よ、ウルヴァシーの実子アーユス、拝礼つかまつります。

ナーラダ　聖寿(アーユス)を保有する者にておわせ。

王　これなる褥(しとね)に、御着座の栄を賜りたく。

ナーラダ　かしこまった。(着席)

一同、ナーラダ仙に続いて着席。

王　(うやうやしく)尊者、御光来の用件は何事で。

ナーラダ　王よ、インドラ大神の御伝言を聞かれたい。

王　謹んで拝聴つかまつります。

ナーラダ　神通の眼力を具有せる寛仁者(マガヴァン)〔インドラ〕は、森林に赴かんと意を定めたる御身に諭し給うぞ。

王　いかが仰せつけでござるか。

ナーラダ　「〔過去・現在・未来の〕三時を洞察する聖賢各位の予言によれば、近く神・魔両軍の衝突が起らんとの由、して御身は身共にとりて戦陣の盟友ぞ。さらば、そこもとは、武具を一擲(いってき)なさるべきにあらず。またウルヴァシーは、この地上にて終生、そこもとの王業を扶翼すべし」——と。

王　それがしは臣従つかまつる、神々の統領〔インドラ〕に。

ナーラダ　好首尾ぞよ。——

インドラはそこもとの功業に加勢すべく、そこもとは彼の要望を履行されたし。互いに光輝を貸借し、日は火を〔夜間に〕、火は日を〔昼間に〕、燃え立たすなり。　（二〇）

（虚空を打ち眺めて）ランバーよ、アーユス王子の立太子式典のため、インドラ神が御自ら手配し給うた調度一式を届けてくれい。

天女ランバー　（登場）調度一式はこれに。

ナーラダ　殿下には栄えの席に御着座あれ。

ランバー　和子よ、こちらへ。（童子を着席させる）

ナーラダ　（童児の頭上に水差を傾け、灌頂）余の儀は、ランバーよ、そこもと代わって彼に施されよ。

ランバー　（指示のごとく実施して）和子よ、尊き聖仙と御両親とに拝礼なされ。

童子、順番に拝礼を行なう。

ナーラダ　御身に清祥あらんことを。

王　家門の率先牽引者たれ。

ウルヴァシー　父者人の歓心を迎えられかし。

舞台裏に、吟頌詩人二名。

詩人甲　王太子の御盛運を。——

王仙アトリが〔父〕梵天神に、月神が〔父〕アトリ仙に、ブダ王が光芒冷き〔父〕月神に、今上陛下〔プルーラヴァス〕が〔父王〕ブダにと、歴代見られし例に違わず——民草の翹望すなる英資にかけて——御身の父君に似ておわさんことを。御身が卓抜の家系にては、祝福の及ばざる隈もなければ。　（二一）

詩人乙　——

英邁の士らの頂を極めて　これにまします御父君と、沈着を持し揺るぎなき泰然の御身と、
両者に配分されて王権の栄は　今ぞ層一層と輝き立てり——　雪山と大海とに両極の分かたれし聖恒河のごとく。　（二二）

ランバー　（ウルヴァシーに近寄り）あなめでたや、仲良しの朋輩には——和子に立太子の幸を見た上に、御夫君との別離もなくて重畳重畳。

ウルヴァシー　このたびの盛運は、等しく皆々のものではありませぬか。（童子の手を取って）和子や、参りましょうぞえ——〔親しく〕正妃様に御挨拶をなされよ。

王　待たれい。かの御方のもとには、〔後刻〕一同打ち揃って参るとしようぞ。

ナーラダ　——

そこもとの子アーユスの　立太子の栄は、そのかみ風嵐神群の主〔インドラ〕が　〔シヴァ神の子クマーラ〕大将軍神を　司令官職に叙されし故事に想到せしむ。　（二三）

王　寛仁(マガヴァン)の君〔インドラ〕の加護に浴し、有り難き仕合わせにござる。

ナーラダ　インドラ神がそこもとに対し、この上ともかたじけのうすべき御友誼、何かあろうかな。

王　寛仁(マガヴァン)の君がそれがしに御満悦とあらば、それがし加えて何を望みましょうぞ。とは申せ、あらまほしきは以下のごとく。

——俳優(バラタ)〔一同による〕結詞(ヴァーキャ)——

とかく互いに相容れぬ　富と学芸との両女神が　一箇所に寄り添う得難き出会いの、心
ばせ良き世の人々に　福祉増進して常にあれかし。（二四）

全員、退場。

解題

古典サンスクリット文芸の最高峰をなすカーリダーサ（Kālidāsa ——おそらく四世紀末葉）には、疑いなく真作の三詩篇と三劇作とが今日に伝わっている。その劇作二点をここに訳出するわけであるが、他の劇作一点は最も有名な『シャクンタラー姫』であって、故辻直四郎先生の麗筆に成る名訳が本文庫に収められていること申すまでもない。しかも同書の巻末に付される「カーリダーサとその作品」および「サンスクリット劇入門」の二論攷は、加えるべき何ものもあり得ぬまでに完璧な概観であって、是非とも御参照下さるよう読者各位の上に切望してやまぬ次第である。

『公女マーラヴィカーとアグニミトラ王』

原題 *Malavikāgnimitram* は、女主人公の名と主人公の名とを連ねた合成語に他ならず、カーリダーサの処女作をここに認めて先ず間違いはあるまい。というのも、この戯曲劈頭の序幕には、先立つ著名詩人に挑戦して己が新風の抱負を告げる、新進作家の気負いがあまりにも明白に看取されるからである。（そこで名指しにされている先人三者のうち、先頭のバーサに関

しては文学史上の微妙な問題が伏在するものの、只今は殊更これに触れる必要もなかろう。）

作者が自負する新機軸は、点在する詩節の流麗によりも遥かに勝って、愛の葛藤にかかる宮廷喜劇的な仕組みの妙にあったはずである。純情可憐な女主人公として「窶し身の姫君」(princess incognito)マーラヴィカーを創作、主人公アグニミトラ王の腹心たる道化を舞台回しの軸として存分に駆使。かくて継起する三角関係めいた鞘当ての間には、貫禄・気品を兼備する正妃と現下の寵を頼む女御と、性格の違いを描き分ける筆力も非凡である。中でも第一―二幕、音曲師範の一名と正妃の腹心たる(べき)遊行尼とを抱きこんで、両主人公の対面を取り計らおうとする舞踊競演の経緯は、迫真の気に溢れるといって過褒ではあるまい。――このような構想の大枠こそは、伝説的な説話文学の大宗『ブリハット・カター』から汲まれたものかも知れないが、宮廷喜劇的な展開の細部に到っては、すべて作者カーリダーサの独創に成ったと信ぜられる。

しかも作者は、宮廷生活の外廓に、好箇の時代的背景を措定している。すなわち、西紀前二世紀の前半、マウルヤ帝国を簒奪したシュンガ朝の、草創期三代がそれである。マウルヤ朝の将軍職にあったプシュヤミトラは主家の覆滅に成功したが、旧主の残党はなお各地に分立して内訌を続ける一方、北方からはバクトリア・ギリシア人勢力が、インド中原をうかがって侵攻を重ねる。(後者の首領の一人が、南伝仏教の蔵外文献『ミリンダ王の問い』に名を留めるメ

ナンドロスであり、他方、北伝仏教の教団史は、プシュヤミトラを廃仏毀釈の暴君と伝えている。）さて、プシュヤミトラは依然「大将軍」を称したまま、孫のヴァスミトラと相携えて敵対勢力を征討する間、第二代の(父とは不仲であったらしい)アグニミトラが、マールヴァ東部のヴィディシャー(仏跡サーンチーの近辺)に国都を定めて、シュンガ朝の内政を掌握している。――『プラーナ』(開闢古譚詩)諸書中の王統譜がうかがわせる如上の局面に即して、カーリダーサは本作の舞台をヴィディシャー所在のアグニミトラ宮廷に措定、そして、マウルヤ残存勢力中の親シュンガ・反シュンガ両派を代表する二土侯の対立を創出して、女主人公「窶し身の姫君」の出自をここに仮托したものと思われる。

本作の五幕を通じての脚色の妙は、世俗的な軽快さでもって我々を飽かせる暇もなく、インド劇論にいう「創作(市民)劇」(プラカラナ)様式の作風を感じさせる。にもかかわらず同劇論の見地からは、主人公が『プラーナ』聖詩篇に現れる王侯というむしろ形式的な要因だけで、あくまで「本格(荘重)劇」(ナータカ)様式の作例とされるのである。ともあれ、我々に結構面白いこのカーリダーサ処女作は、当時の読者もしくは観客の一般的好尚にも大いに受けたもののごとく、「窶し身の姫君」を登場させての操作が以後に簇出することとなった。七世紀の王者「戒日王」ハルシャに帰せられる宮廷喜劇の二名作(『ラトナーヴァリー』と『プリヤダルシカー』)が既にその代表例であって、本作との差異は単に劇論の上で、幕数が四以下にして作風

は「本格劇」と「創作劇」とを交えるという、副次様式「小劇」(ナーティカー)を名乗るの一点に尽きよう。

最後に申し添えるならば、十九世紀前半、初期の西欧人研究者間では、この戯曲をカーリダーサ真作とは認めぬ説が行なわれた。劇中の宮廷状景はインド文明の頽廃期を示唆し、したがって作期は十世紀以降でなければならぬ、といった論なのである。これは、上述の「小劇」諸作の存在が当時の論者に知られていなかったがゆえの僻見であって、もはや今日では何らの顧慮にも値しない。

『武勲《ヴィクラマ》(王)に契られし天女ウルヴァシー』

原題は *Vikramorvaśīyam* で、後半部に女主人公の名ウルヴァシーが見えるのに反し、主人公の名プルーラヴァスは題名に現れない。前半部の語「ヴィクラマ」は普通名詞としては「武勇」を意味し、したがって土着注釈者は通常、題名を「武勇をもって獲得されし天女ウルヴァシーの物語」と解する。ただし、本作の劇的内容に関する限り、主人公の武勇は特に見るべき契機を成さぬ点から、当然「ヴィクラマ」には別な解釈が浮上するであろう。すなわち、作者が「ヴィクラマ・アーディトヤ」(漢訳「超日王」)を誇称する覇王の庇護下にあった、したがって作者は本作の題名に「ヴィクラマ」を冠して庇護者の歓心を求めた、との想定に他ならない。

そして問題の覇王を、正に第一称号としてヴィクラマ・アーディトヤを名乗った、グプタ帝国の英主チャンドラグプタ二世(在位三七五—四一四年)に比定することから、詩聖カーリダーサを四世紀末葉の人とするのが、今日では最も有力な通説となっている。

主人公プルーラヴァスは、月神(ソーマ)の子ブタを父とし、原人マヌの娘イダーの腹に生れて、地上二名門の一つ「月種」(ソーマ・ヴァンシャ)の始祖となったとされる神話的王者である。他方、女主人公ウルヴァシーは、天女アプサラス衆——天上楽人ガンダルヴァ(音写「乾闥婆」)連と相睦み、ともにインドラ天に奉仕しつつも好んで中空・地表に来遊する——の中でも才色抜群の評が高い。このような両者の相愛が本作の主題となるからには、神人間の恋とて宿命的な障碍・屈折が予想されるであろう。

事実プルーラヴァスとウルヴァシーの恋の破局は、古く『リグ・ヴェーダ』新層の対話詩篇の一つに示唆されている(本文庫所収、辻直四郎『リグ・ヴェーダ讃歌』、二九二—二九六頁を参照)。この詩篇の不分明きわまる原文字句にもかかわらず、おそらく西紀前八世紀には成立していたであろうヴェーダ祭式の大釈義書『シャタパタ・ブラーフマナ』が、前記詩節の一部を再録しつつ神話の筋を経時的に提示するのを見れば、すでに西紀前第二千年紀末までに以下のごとき民俗伝承が行なわれていた、と想定して大過はあるまい。

——下界の男子プルーラヴァスとの相愛に陥った天女《アプサラス》ウルヴァシーは、彼との地上での同棲

を幾つかの条件を付して受諾した。その後、歓楽を重ねた末に胎児をも宿すに到ったところ、彼女はようやくに天上界への郷愁を覚えて、生来の伴侶たる半神ガンダルヴァ連と共謀、男が彼女に裸体を見せるという（かねての条件の一つに違反する）局面を作為した。かくて取り残された男は、悲歎に暮れて去りし天女を探し回り、一度は邂逅の機会を得て、胎児に対する彼女の母性愛にも訴えつつ、熱烈に地上への復帰を懇願する。聞き入れられずば死あるのみというプルーラヴァスの切言にもかかわらず、これを冷然と拒否して天女ウルヴァシーは、「婦女子の心は豺狼（さいろう）のそれに異ならず」とて、女の愛に望みを托することの無益を諭すのであった……

このような古伝説の根底には、神人間の通婚はあり得ぬという教訓の一方で、より現実的には異性の前で裸身を露出することの禁忌、そしてまた女性心理の本質的な冷酷に関する警告、があったものと想察されるのであるが、さて悲恋の破局には救いの途が残されてはいないのか。『リグ・ヴェーダ』の詩篇におけるウルヴァシーは、祭神行作の果報によって来世を天上に享けよと告げて、プルーラヴァスの愁訴をむしろ突き放して終る風であるのに対して、『シャタパタ・ブラーフマナ』における結末は、以下のごとく多分に宥和的な様相を看取させる。

——ウルヴァシーはプルーラヴァスを憐れんで一年後の夜の契りを約し、そしてこの約を果しての別れ際には、彼をガンダルヴァ連に引き合わせた。その後、彼が彼ら半神の列に迎えられるよう懇請に及ぶや、ガンダルヴァ連は入団の資格要件として、人界に欠如する特定の聖火

を彼が自己の後裔に伝えることを課しつつ、その聖火を創出する秘儀の次第をプルーラヴァスに明かした……

問題の祭儀とは、（男女交合による生殖の営みを元来は象徴したに違いない）「鑽火儀礼（アグニ・マンタナ）」に他ならず、つまり祭式釈義書『シャタパタ・ブラーフマナ』は、同祭儀の淵源を説くに、古来のウルヴァシー伝説を手直しして利用した、ということになろうか。

西紀前数世紀のころから汎インド的に台頭して、ヴェーダ祭祀宗教の落日を促したと思われるヒンドゥイズム（印度教）は、にもかかわらず儀軌の面において、ヴェーダ教の要素を踏襲することが少なくなかった。その一斑として「鑽火儀礼」もヒンドゥイズムに受容され、これに即応してヒンドゥイズムの聖典となる『プラーナ』諸書のうち、『シャタパタ・ブラーフマナ』におけると本筋において変らぬウルヴァシー伝説を、当該儀礼との関連の下に提示するものが八書を数える。すなわち、細部に属する浮動はあっても、裸身露出を生起する策謀、悲恋の救いに連なる「鑽火」秘儀の伝授、そして両項を通じガンダルヴァ連の演ずる重要な役割、は八『プラーナ』に共通して認められるのである。

しかるに二種の『プラーナ』に限っては、この点で例外的な新機軸を示し、他の八書とは歴然と相違する。すなわち、『マツヤ・プラーナ』と『パドマ・プラーナ』の二書であって、そこでは前記の大筋、すなわちヴェーダ期に由来する神話的契機、が完全に消失するというに近

く、代って大きな位置を占めるのは神仙の呪いであり、しかもこの叙事詩的要因をめぐっては、特に天女と国王との出会いの発端に関し、多分に古典期文芸的な物語の形が仕組まれているのである。

カーリダーサが本作の着想を仰いだのは、この異例なプラーナ両書――おそらくは成立のより早い『マツヤ・プラーナ』――が見せるウルヴァシー物語であったに違いない。である以上は、本作が「本格劇」(ナータカ)を称するのはもとより当然であろうが、素材を活かす脚色にかけては、本作のカーリダーサはむしろ平凡と評すべきではなかろうか。逆に、作者として格別の力点を置いたのは、インド的好尚に最適の叙情趣味、なかんずく第四幕における狂乱の王の哀切な独白、であったと考えたい。

さて、その第四幕に関し、本作には二種の伝本が行なわれる。一は、作の様式を上述のごとく「ナータカ」とする南印本であって、含まれる詩節は、他の幕におけると同様、すべてサンスクリット語である。他は、これらサンスクリット詩節(王の独詠に配される)に加えて、プラークリット語(マハーラーシュトリー方言)もしくはアパブランシャ語に成る短詩節を鏤(ちりば)めた北印本であって、この伝本は作の様式として「トロータカ」を標榜している。しかも、後者の非サンスクリット詩節(訳文では頭記〽印で画している)は、韻律・声調・所作・舞踊などに関するらしい頻繁な舞台指示に挟まれて、朗詠ではなく歌唱の対象とされたもののごとくである。

アパブランシャ詩は王の独唱で、前後するサンスクリット詩節の大意を伝え、他方プラークリット詩は折々の王の様態を叙して、おそらく随伴する女性歌舞合唱団の囃子唄を成したかと思われる。

ただし問題は、中期インド・アーリア語の最終局面たるアパブランシャ語が、既にカーリダーサの時代に行なわれていたか否かの点であって、それはそのまま、北印伝本が果してカーリダーサの真作たり得るかの論に連なる。問題は今日なお開かれたままであるとして、最後に、関連する若干点を付記したい。――副次様式「トロータカ」の語義は不明、劇論の所説は「神人混淆」を特色とする「ナータカ」の亜種というにとどまる。――問題のアパブランシャ詩節は、少なくとも十世紀の一部識者に知られていた。――上記の舞台指示に属する術語の各一については、十五世紀前後の北印本土着注釈者とても、的確な理解を持たなかったと思われる。――叙情詩節を主眼とした単一登場人物の独演、というカーリダーサが第四幕に採った趣向は、以後の劇作を通じて追随者を見ることが稀であった。

*

このたび拙訳が本文庫にて公刊されるに到った経緯は、畏友前川嘉昭氏が、日仏会館を通じての古い誼みから、岩波書店編集部の星野紘一郎氏に御紹介を賜った、すでに数年の過去に発

端する。ここに両氏に対する謝意を新たにするとともに、稿の細部に亘って不馴れな筆者を御鞭撻いただいた天野泰明氏、ほか文庫編集部の各位に御礼申し上げる。

なお、『公女マーラヴィカーとアグニミトラ王』の訳文は、かつて『東海大学古典叢書』の一冊として予告されつつも、単に筆者の怠慢から挫折・撤回に了った同劇作の原文対照訳注のため、実に二十年余の昔に準備したものを概ねそのまま流用している。このような破廉恥の仕儀にも御寛恕・御諒承を忝くした同大学関係者、ことに尚樹啓太郎教授と山田渉出版会理事の変わらぬ御友情には、深甚の感謝を捧げてやまない。

一九八九年二月

大地原　豊

公女(こうじょ)マーラヴィカーとアグニミトラ王(おう)　他一篇

1989年3月16日　第1刷発行 ©

定価 450 円

訳　者　大地原(おおじはら)　豊(ゆたか)

発行者　緑　川　亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行所　株式会社　岩　波　書　店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・三陽社　製本・桂川製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします　Printed in Japan

ISBN4-00-320642-8